小島・柳原遺跡群

NAKAMATA

中　俣　遺　跡

浅川扇状地遺跡群

OSIKANE

押　鐘　遺　跡

MAYUMIDA

檀　田　遺　跡

1991・3

長　野　市　教　育　委　員　会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接土地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考える上での実証者といえましょう。

このたび土地区画整理事業や宅地開発、ゴルフ練習場造成事業にともない小島柳原遺跡群中俣遺跡、浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・檀田遺跡の3遺跡の調査を実施しました。

各遺跡とも過去の調査で周辺より重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた遺跡であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第41集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成3年3月

長野市教育委員会　教育長　奥村秀雄

小島・柳原遺跡群

中　俣　遺　跡

1991. 3

長野市教育委員会

例　　言

1　本書は長野市中俣地区土地区画整理事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は中俣地区土地区画整理組合の委託を受けて長野市教育委員会が実施した。

3　調査地は長野市柳原字上返町・一丁目・東過上木・上過上木に位置するが、遺跡名は小島柳原遺跡群中俣遺跡とした。

4　本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集したが、第４章２　は鶴田典昭（長野県埋蔵文化財センター）が、第４章３は町田勝則（長野県埋蔵文化財センター）が執筆した。

5　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。出土遺物の注記記号は「小島柳原遺跡群中俣遺跡」の各頭文字をとって『ＫＹＮ』と表記してある。

6　本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。時期・性格等の不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等遺構ごとにいつでも閲覧しうるよう保管している。

・遺構・遺物は便宜的にＩ～III期に分けて記述した。おおよその年代観はＩ期：弥生時代中期後半、II期：弥生時代後期、III期：弥生時代終末～古墳時代前期であるが詳細は下表に示した。

・遺構の測量は㈲写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：60の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・遺構番号は調査時の仮番号をそのまま用いた。報告に当たって再整理することも試みたが、出土遺物との対応で混乱が生じるおそれがあるため断念した。遺構検索が煩雑となったがご容赦願いたい。

・遺物実測図に関しては、土器１：４・石器１：３・土製品１：２・土器拓影１：３の縮尺に統一してある。

・出土土器観察表の記述は次の要領で行なった。番号：図版番号と一致する。法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。遺存度：図示した部分の遺存度を記した。色調：灰白色（Ａ）・淡黄燈色（Ｂ）・暗黄燈色（Ｃ）・暗褐色（Ｄ）・黒褐色（Ｅ）・灰褐色（Ｆ）とし、中間的なものはＡＢ・ＢＣと表示した。胎土：明らかに在地の胎土と異なるもののみ○印をつけた。

	時代	時期	関連遺跡
Ｉ	弥生時代（中期）	栗林（中）	聖川堤防10号住
		栗林（新）	旭幼稚園遺跡
			徳間遺跡1・2住、湯ノ入遺跡
II	弥生時代（後期）	１段階	吉田高校グランド２・４住
		２段階	
		３段階	神楽橋遺跡
		４段階	生仁遺跡Ｙ８住
		５段階	篠ノ井遺跡群６号周溝墓 四ツ屋遺跡30住
III	古墳時代		牟礼バイパスＡ地点１・２住
			灰塚遺跡Ｈ１住

目　　次

序
例言
第１章　調査経過
　１　調査に至る経過……1
　２　調査の体制……2
第２章　遺跡周辺の考古学的環境……6
　遺跡範囲と名称について……8
第３章　調査……10
　１Ａ区の調査……10
　２Ｂ区の調査……19
第４章　遺物各説……104
　１　土器……104
　２　石器……108
　３　光沢痕のある石器について……112
第５章　総括……114

挿図目次

図１　調査地周辺図
図２　周辺遺跡分布図
図３－１　遺跡範囲推定図
図３－２　周辺字境図
図４　Ａ区遺構全測図・基本土層図
図５　１号住居址実測図
図６　７・８・17・19・21・27号土壙実測図
図７　２号住居址実測図
図８　３号住居址実測図
図９　４号住居址実測図
図10　15号土壙実測図
図11　５号住居址実測図
図12　Ａ区土壙実測図
図13　Ａ区出土土器実測図
図14　Ａ区出土土器実測図
図15　Ｂ区全測図
図16　Ｂ－１・２区全測図
図17　Ｂ－３・４・５区全測図
図18　１号住居址実測図
図19　２号住居址実測図
図20　４号住居址実測図
図21　７号住居址実測図
図22　９号住居址実測図
図23　13号住居址実測図
図24　14号住居址実測図
図25　15号住居址実測図
図26　18号住居址実測図
図27　19号住居址実測図
図28　20号住居址土器出土状況実測図
図29　20号住居址実測図
図30　27号住居址実測図
図31　27号住居址炭化材・土器出土状況実測図

図32　32号住居址実測図
図33　33号住居址実測図
図34号　36号住居址実測図
図35号　40号住居址実測図
図36　54号住居址実測図
図37号　23号下層住居址実測図
図38　Ⅰ期溝・土壙実測図
図39　6号住居址実測図
図40　8号住居址実測図
図41　22号住居址実測図
図42　23号上層住居址実測図
図43　25号住居址実測図
図44　28号住居址実測図
図45　30号住居址実測図
図46　39号住居址実測図
図47　42号住居址実測図
図48　47号住居址実測図
図49　49号住居址実測図
図50　52号住居址実測図
図51　56号住居址実測図
図52　9・44・50号土壙実測図
図53　5号住居址実測図
図54　24号住居址実測図
図55　29号住居址実測図
図56　31号住居址実測図
図57　37号住居址実測図
図58　51号住居址実測図
図59　13号溝址土層堆積状況実測図
図60　13号溝址土器出土状況図
図61　14号溝址土層堆積状況実測図
図62　18・56・60号土壙実測図
図63　畝状遺構実測図
図64　1・4・7号住居址出土土器実測図
図65　7・13・19号住居址出土土器実測図
図66　20号住居址（床面）出土土器実測図
図67　20号住居址（床面）・同（上層）出土土器実測図
図68　20（上層）・18・23下層・27号住居址出土土器実測図
図69　27号住居址出土土器実測図
図70　27・36・54号住居址、10号溝址出土土器実測図
図71　6・7・14・46・49・47号土壙出土土器実測図
図72　47・57・58・59号苞壙出土土器実測図
図73　6・8号住居址出土土器実測図
図74　22・23上層・35・28・39・47・49・52号住居址出土土器実測図
図75　42・56号住居址、9・44・50号土壙出土土器実測図
図76　5・29・31号住居址出土土器実測図
図77　37・48・53号住居址、13号溝址出土器実測図
図78　13号溝址出土土器実測図
図79　13号溝址出土土器実測図
図80　13号溝址出土土器実測図
図81　13・14号溝址出土土器実測図
図82　15号溝址、18・60号土壙出土土器実測図
図83　55号土壙、B区出土土器実測図
図84　B区出土土器実測図
図85　B区出土土器実測図
図86　土製品実測図
図87　土製品実測図
図88　1・2・4・9・13号住居址出土土器拓影
図89　7・18号住居址出土土器拓影
図90　18・19・20号住居址出土土器拓影
図91　20・27・23号下層住居址出土土器拓影
図92　27・32・33・36号住居址出土土器拓影
図93　36・40・54号住居址・14号土壙出土土器拓影
図94　22・46・48号土壙出土土器拓影、44号住居址
図95　44号住居址、2・3・9号土壙出土土器拓影
図96　中俣遺跡出土の石器1
図97　中俣遺跡出土の石器2
図98　中俣遺跡出土の石器3
図99　中俣遺跡出土の石器4

図100　中俣遺跡出土の石器５
図101　中俣遺跡出土の石器６
図102　中俣遺跡出土の遺跡７
図103　中俣遺跡出土の石器８
図104　光沢痕の認められる石器
図105　剥片に残された使用の有無

表　目　次

表１　Ａ区土壙一覧表
表２　Ａ区出土土器観察表
表３　Ｂ区出土土器観察表１
表４　Ｂ区出土土器観察表２
表５　Ｂ区出土土器観察表３
表６　Ｂ区出土土器観察表４
表７　Ｂ区出土土器観察表５
表８　Ｂ区出土土器観察表
表９　Ｂ区出土土器観察表７
表10　Ｂ区出土土器観察表８
表11　Ｂ区出土土器観察表９
表12　Ｂ区出土土器観察表10
表13　Ｂ区出土土器観察表11
表14　Ｂ区出土土器観察表12
表15　Ｂ区出土土器観察表13
表16　Ｂ区出土土器観察表14
表17　Ｂ区出土土器観察表15
表18　出土石器観察表
表19　出土石器分類表

写真図版目次

図版１　Ａ区１・２・３号住居址
図版２　Ａ区４・５号住居址、15号壙
図版３　Ｂ区２・４号住居址、４号住居遺物出土状況
図版４　Ｂ区７・８・９・18号住居址
図版５　Ｂ区13・14・19号住居址
図版６　Ｂ区20号住居址、同土器出土状況
図版７　Ｂ区20号住居址、同ゆ床面土器出土状況
図版８　Ｂ区27号住居址炭化材・土器出土状況
図版９　Ｂ区23・32・33号住居址
図版10　Ｂ区36・54号住居址、10号溝址
図版11　Ｂ区10号溝址土器出土状況、57・58土壙
図版12　Ｂ区22・24・25号住居址
図版13　Ｂ区37・42・５号住居址
図版14　Ｂ区29・31号住居址、13号溝址
図版15　Ｂ区13・14号溝址、60号土壙
図版16　Ｂ区３地区
図版17　Ｂ区４・５地区
図版18　調査風景
図版19～　出土土器

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

長野市柳原地籍は、地理的には千曲川によって形成された自然堤防と千曲川の氾濫原が認められる。今回の調査地周辺は千曲川の氾濫原上に位置するものと考えられ、長沼1号幹線排水路沿いに畑地が分布するほかは一面低湿な水田が展開する。

昭和61年この地域において市街地の造成を目的とした、事業面積約24haにわたる長野市中俣土地区画整理事業が計画された。事業予定地は周知の「小島・柳原遺跡群」内に位置するため、長野市教育委員会は同都市開発部区画整理課の委託を受け事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって、昭和61年10月30日～11月1日の3日間にわたって行われた。調査は現地踏査により遺物の散布を確認した範囲内の任意の7地点について実施した。各地点における土層堆積状況はおおむね一致し、現地表下1m内外に位置する灰黒色粘土層が遺物包含層と認定された。この結果より事業面積約24ha中、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い道路部分約5,000㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認された。

本調査は昭和63年から開始され、工事工程・他遺跡調査日程との調整から以下の3次にわたって実施した。

1次調査　昭和63年9月12日～9月19日（6日間・A区）

2次調査　平成元年4月3日～5月16日（24日間・B－1～B－4区）

3次調査　平成2年3月1日～3月20日（11日間・B－5区）

調査地近景

2　調査の体制

(1)　昭和61年度の調査

試掘調査は長野市の委託を受け、長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって実施された。

長野市遺跡調査会の組織（昭和61年度）

会　　長　奥村秀雄（教育長）
委　　員　米山　一政（長野市文化財保護審議会長）
　　桐原　　健（長野市文化財保護審議会委員）
　　清水　営一（教育次長）
　　関川千代丸（社会教育課文化財専門主事）
　　矢口　忠良（調査団長）

監　　事　高野　　覚（教育委員会総務課長）
事務局長　吉見　　敏（社会教育課長）
局　　員　吉池　弘忠（社会教育課主幹）
　　山崎　博三（社会教育課主査）

調査団

調査団長　矢口　忠良（長野市立博物館主査）
調　査　員　山口　　明（長野市立博物館主事）
　　青木　和明（長野市立博物館主事）
　　中殿　章子（長野県考古学会員）
　　横山　かよ子（長野県考古学会員）
参　加　者　川島　邦子　藤沢　月子　丸山たまき
　　丸山　悦子

(2)　昭和63年度の調査

前年度の調査から長野市教育委員会が直接事業を実施することになった。組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者　長野市教育委員会教育長　　奥村　秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　諏訪部和彦
庶　務　係　　〃　　所長補佐　小山　　正
　　〃　　職員　青木　厚子
調　査　係　　〃　　調査係長　矢口　忠良
調　査　係　市埋蔵文化財センター主事　青木　和明
　　主事　千野　　浩
　　専門員　中殿　章子
　　専門員　横山かよ子
　　専門主事　小松　安和
　　専門主事　中沢　克己
　　専門主事　大室　　昂
調　査　員　清水　隆寿（立正大学学生）
参　加　者　竹元清蔵　小島忠久　田尻岩夫　岡田勇西　志げる　丸山美江子　丸山悦子　川島邦子　川島浩　中沢慶子　宮下智美　大沢寛司　出村駿一　岡田時子　上田たね　宮下きよ　松林伝次郎　柄沢清志神頭幸雄　堀内とし　水内治美

(3)　平成元年度の調査

調査主体者　長野市教育委員会教育長　　奥村　秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　水沢　国男
庶　務　係　　〃　　主幹　小山　　正
　　〃　　職員　青木　厚子
調　査　係　　〃　　調査係長　矢口　忠良
　　〃　　主事　青木　和明
　　〃　　主事　千野　　浩
　　〃　　専門員　中殿　章子
　　〃　　専門員　横山かよ子
　　〃　　専門主事　小松　安和
　　〃　　専門主事　中沢　克己
　　〃　　専門主事　大室　　昂
　　〃　　職員　今井　悦子
調　査　員　飯島　哲也（関西大学学生）
参　加　者　中野節子　中野房伊　下川照子　鈴木寛市川生子　斎藤澄　深沢信子　深沢百合子　宮島昭男前沢初子　奥村千代子　常田保子　中島芳江　徳永一宮沢美代子　白鳥光男　小池和幸　上野いせ子　中村常彦　宮沢嘉三　西沢弘晃　小越光晴　松浦サトミ小林ともい　越山四方太　関川幸子　大和笑子　松田

なか子　上野義次　大日方保　松田と志　小林まさ子　小林栄子　会津奈巳子　佐藤きせ　水野貞子　関夏江　辰野政治　辰野一枝　横田よきを　佐藤徳子　吉田正　児玉米子　渡辺好江　会津はな子　保坂けさ子　吉田みや子　西沢卯三郎　橋詰ときを　松尾昭子　原和子　小山武男　小山幸子　町田清子　伝田いく美　浅品秀子　阿部正子　根岸由恵　竜野いつ子　横谷すま子　西沢はつの　中沢光枝　黒岩けい子　下川利雄　松田もと江　大沢弘　松井律子　松尾よし子　松山三郎　待井春子

整理参加者　徳成奈緒子　岡沢治子　池田見紀　小泉ひろ美

執筆参加者　鶴田典昭　町田勝則
（㈶長野県埋蔵文化財センター調査研究員）

調査の実施および報告書の作成に当たっては以下の方々よりご協力とご教示を得た。記して謝意を表わしたい。
石川日出志　石黒立人　赤澤徳明　置田雅昭　太田三喜　関川尚功　米田文孝　平松良雄　田嶋明人　藤田典夫　久田正弘　中谷克彦　山下誠一　直井雅尚　小山岳夫　西山克己　青木一男　前島卓

また事業主体者である長野市中俣地区土地区画整理組合におかれては、埋蔵文化財保護に対して深いご理解をいただき絶大な協力を賜った。厚くお礼申し上げたい。

重機表土剥ぎ作業

遺構検出作業

遺構掘り下げ

遺構掘り下げ

①1:10000　②1:2000　③表層地質図(f：泥濘原推積物
fs：扇状地推積物　nl：自然堤防推積物　al：現河床堆積物)

図１　調査地周辺図

第２章　遺跡周辺の考古学的環境

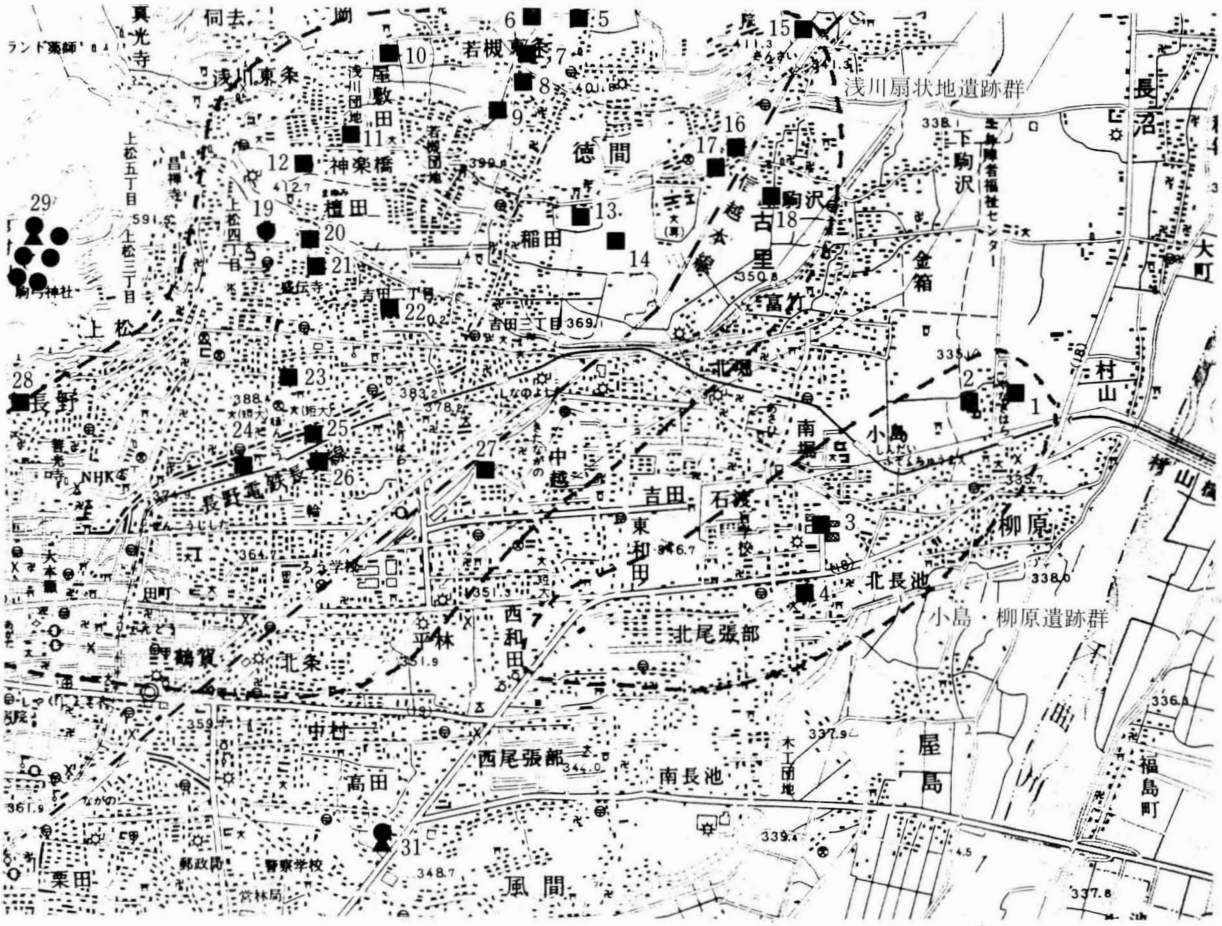
長野市域犀川以北には、浅川扇状地遺跡群・小島柳原遺跡群という大きな二つの遺跡群が存在する。前者は浅川によって形成された広大な扇状地上に立地する遺跡群であり、後者は千曲川左岸に形成された自然堤防上に展開する遺跡群で今回調査した中俣遺跡はその北東端に位置する。

以下正式調査を経た遺跡を中心にその概要を述べ周辺の考古学的環境とする（番号は分布図と一致する）。

２　水内坐一元神社遺跡　柳原小学校新築移転事業にともない調査される。中俣遺跡と同一の自然堤防上に立地し、将来的には同一遺跡として把握される可能性が高い。弥生時代住居址４軒、古墳時代住居址５軒、平安時代以降の柱穴群・溝址等が検出されている。

（文献：長野市教委　1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第６集）

３　小島境遺跡　弥生時代中期以降の各時代にわたる遺構が検出されており、古墳時代の周溝墓５基が検出されている。周溝墓と同時期の住居址群も検出されており、うち３軒から玉生産関係の遺物が出土している。出土土



1.中俣遺跡　2.水内坐一元神社遺跡　3.小島境遺跡　4.南川向遺跡　5.牟礼バイパスD地点遺跡　6.牟礼バイパスC地点遺跡
7.牟礼バイパスB地点遺跡　8.牟礼バイパスA地点遺跡　9.迎田遺跡　10.浅川西条遺跡　11.神楽橋遺跡　12.檀田遺跡
13.徳間遺跡　14.稲田・徳間遺跡　15.三才田子遺跡　16.駒沢祭祀遺跡　17.駒沢新町遺跡　18.上駒沢遺跡　19.湯谷古墳群
20.浅川端遺跡　21.押鐘遺跡　22.吉田高校グランド遺跡　23.下宇木遺跡　24～26.三輪遺跡　27.国鉄貨物基地遺跡　28.箱清水遺跡
29.地附山前方後円墳　30.上池ノ平古墳群　31.南向塚古墳

図２　周辺遺跡分布図

器群の様相には、新潟県地方からの影響が濃く現われており、またＳ字状口縁台付甕もこれに伴出しており、千曲川流域における古墳時代初頭の土器様相の一端を示す良好な資料といえる。

（文献：青木和明　1984「小島境遺跡」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所他）

4　南川向遺跡　小島柳原遺跡群の南西端付近に位置し、平安期の集落が検出されている。特徴的な遺物としては、緑釉陶器皿が出土している。

（文献：長野市教委1988『小島柳原遺跡群南川向遺跡』長野市の埋蔵文化財第25集）

5～8　牟礼バイパスＡ～Ｅ地点遺跡　主要地方道長野荒瀬原線建設事業にともない調査されたもので、縄文前期、弥生中期、古墳前期～後期、平安～中世の集落が検出されている。特筆すべきものとしていわゆる善光寺瓦（丸瓦・軒平瓦）が出土している。

文献：長野市教委1982『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＡ・Ｅ地点遺跡』長野市の埋蔵文化財第12集
〃　1986『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点』長野市の埋蔵文化財第17集

10　浅川西条遺跡　駒沢川によって形成された扇状地の扇端部付近に位置する平安期集落。緑釉陶器、和鏡などが出土している。

（文献：長野市教委1975『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第２集）

13　徳間遺跡　弥生中期終末の住居址が２軒検出されている。土地区画整理事業にともない現在調査中の14稲田徳間遺跡の一部として理解しうるもので、同遺跡では弥生中・後期、古墳前・中期、奈良、平安期の集落がかなり明瞭にとらえられている。

（文献：長野市教委1980『四ツ屋遺跡　徳間遺跡　塩崎遺跡群』長野市の埋蔵文化財第９集）

16　駒沢祭祀遺跡　湧水地を選んだ古墳時代中期から奈良時代にかけての焼土・集石・土器集積を伴う７箇所の遺構が検出された。特に古墳時代中期のものは高坏・小型丸底土器等祭祀関係の遺物を中心に総数500有余の土器が投棄された状況で検出されたもので、他に鏡・剣・玉の石製模造品も出土している。

（文献：森嶋稔「長野県長野市駒沢新町祭祀遺跡」『日本考古学年報』19）

17　駒沢新町遺跡　祭祀遺跡の北西に位置し、平安期集落が検出されている。注目すべきものとして、平安後期の懸仏鋳型とそれに伴うと考えられる工房址と推測される遺構が検出されている。

（文献：長野市教委1981『湯谷古墳群　長礼山古墳群　駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集）

19　湯谷古墳群　後期古墳が７基確認されているが調査以前に湮滅したものの存在がかなり予想される。中でも最大規模と予想される第１号墳はその立地からも本古墳群の中心的存在であったことが予想され多量の土師器、須恵器、武具（直刀・刀子・鉄鏃）、馬具（轡・帯金具・雲珠）、装飾品類が出土している。

（文献：長野市教委1981『湯谷古墳群　長礼山古墳群　駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集）

20　浅川端遺跡　縄文～平安期の遺構が検出されている。縄文時代は住居址１軒、土壙１基を検出したが、住居址は前期前半、土壙は早期末までさかのぼる可能性がある。古墳～奈良・平安期の集落は南東200mほどに存在する押鐘遺跡(21)と同一の集落として把握しうる可能性もある。

（文献：長野市教委1988『浅川端遺跡』長野市の埋蔵文化財第29集）

21　吉田高校グランド遺跡　弥生時代後期前半吉田式土器の標識遺跡。３次にわたる調査が行われ計17軒の住居址が検出されている。住居は吉田式の単一時期で、当該期における良好な集落遺跡である。

（長野市教委1987『長野吉田高校グランド遺跡』長野市の埋蔵文化財第22集）

28　箱清水遺跡　弥生時代後期箱清水式土器の標識遺跡。明治34年長野高等女学校建設事業にともない大量に出土した土器は箱清水式として把握され、黎明期の日本弥生時代研究に大きな影響を与えた。

（文献：長野市教委1984『箱清水遺跡(2)』長野市の埋蔵文化財第15集　ほか）

遺跡範囲と名称について

今回の調査原因となった中俣地区土地区画整理事業は、事業面積約24haと広大なものであり、今回調査を実施した地籍の字名も上返町・一丁田・東過上木・上過上木と複数にわたる。

推定される遺跡範囲は、柳原小学校移転に伴って昭和54年に調査された水内坐一元神社遺跡の存在を考慮するならば、大きく上返町・中俣道東・土井堰南・三ツ家沖地籍を中心として北東から南西へと展開することが予想される。

ただし旧地形は非常に複雑な変化が認められ、推定範囲内に連綿と集落が展開するのではなく、今回の調査でも明らかなごとく、自然堤防上に形成された微高地上に拠点となる集落が複数箇所形成されることによって、広大な遺跡群が結果として構成されたものととらえられる。今回の報告では後述するごとく調査区を大きくA区とB区に二分して記述した。遺跡の形成された時期はほぼ一致するものの両者の間には遺跡の空白地帯が存在し、上述のごとく遺跡の立地する微高地が異なる可能性を考慮したからである。各調査地点の代表的な字名をとり上返町遺跡・上過上木遺跡として報告することも考慮したが、両者を分離する明確な根拠も今回の調査にては把握するに至らなかった。

そこで現状では上返町～三ツ家沖地籍を中心として展開する大きな遺跡群と把握し、長野県史遺跡地名表に掲載されている遺跡番号6758中俣遺跡より、小島柳原遺跡群中俣遺跡として報告する。ただし将来的には遺跡範囲・遺跡の性格の明確化を待ってその名称については再検討されるべきものであることを指摘しておく。

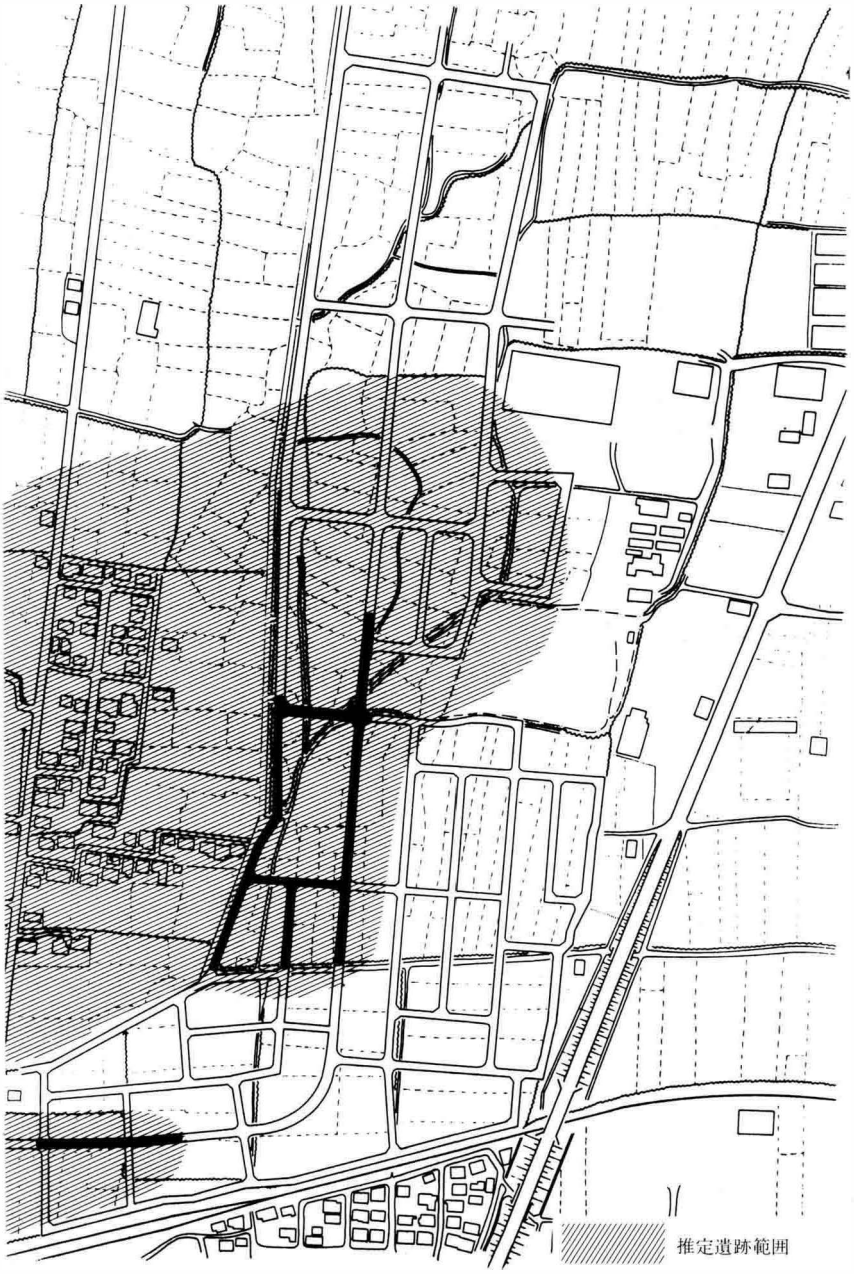


図３－１　遺跡範囲推定図

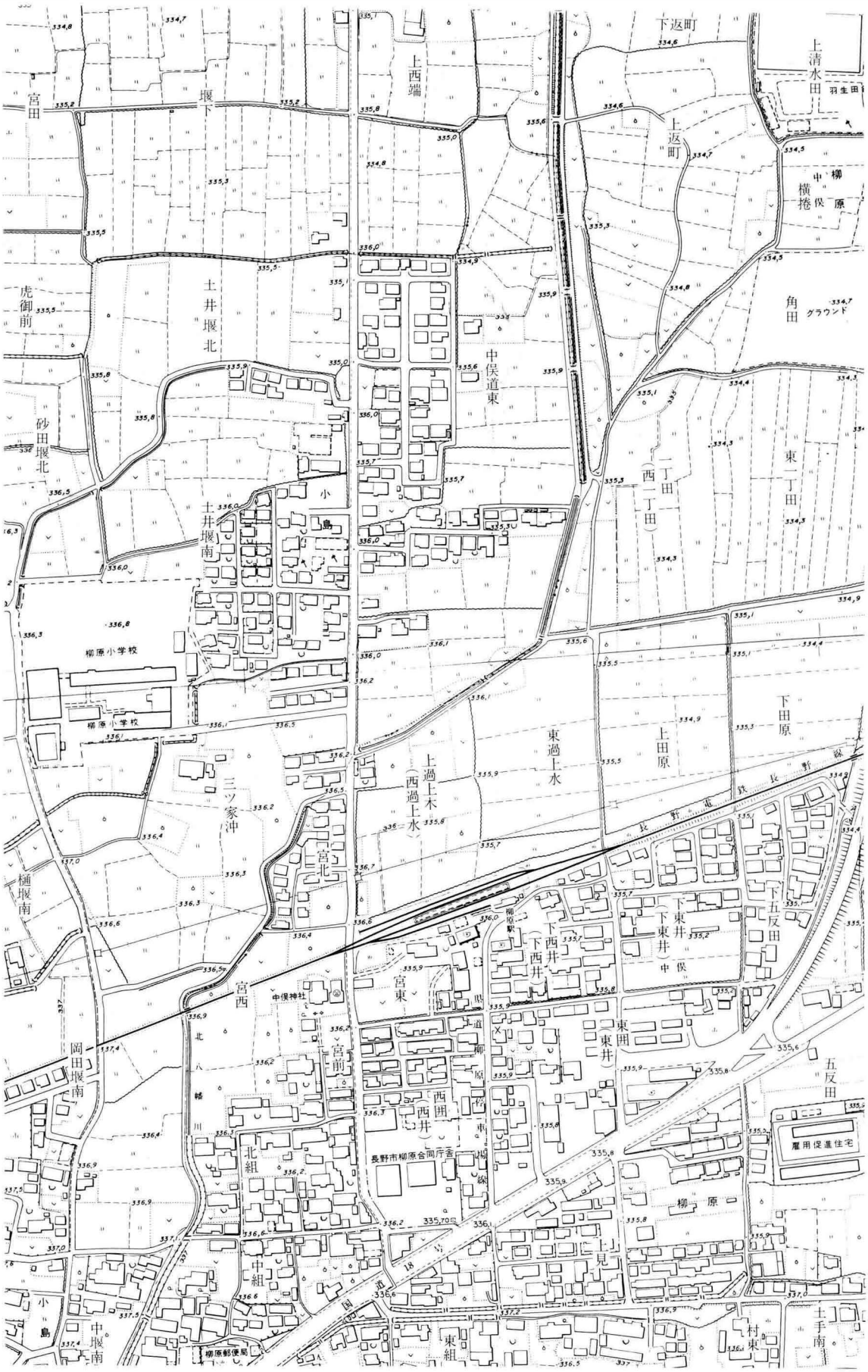

宮田
堰下
上西端
下返町
上清水田
羽生田
上返町
中俣
横捲
柳原
角田
グラウンド
虎御前
土井堰北
中俣道東
砂田堰北
小島
土井堰南
一丁田
(西一丁田)
東一丁田
柳原小学校
柳原小学校
下田原
上田原
東過上水
上過上木
(西過上水)
三ツ家沖
宮北
長野電鉄長野線
樋堰南
下東井
(下東井)
下五反田
柳原駅
下西井
(下西井)
宮西
中俣神社
宮東
宮前
東田
(東井)
岡田堰南
北八幡川
西田
(西井)
五反田
雇用促進住宅
長野市柳原合同庁舎
北組
柳原
中組
上見
小島
中堰南
柳原郵便局
東組
村東
土手南

図３－２　周辺字境図

第3章　調　　査

1　A区の調査

1　調査概要

A区は区画整理事業用地内に存在する自然堤防の南端部分に位置するものと考えられ、幅約5m・長さ約75m・面積約450m²にわたる調査を行った。現地形から判断すると西側に遺跡範囲が延長する可能性は究めて高いが、東側はしだいに低湿地帯へと移行しSD4以東では包含層の存在も希薄となり、遺跡範囲からは外れるものと考えられる。A区とB区の中間地帯も、現地形にはさほど高低差はなく当初は同一遺跡範囲内と想定していたのであるが、トレンチ調査ならびにガス・水道管埋設のさいに土層の断面観察を行ったところ、包含層である黒褐色粘質土層は認められず遺跡範囲からは除外した。

現在同一の微高地上と判断されても旧地形は微妙に変化していることが予想され、遺跡の立地する微高地もA区～B区へと直線的には移行しない可能性が高く、あえて調査区を二つに分割したしだいである。前節にても述べたとおり詳細は将来的な検討に委ねたい。

本調査区の土層堆積は図4にも示したとおり、基本的には4層から構成される。包含層は第III層の黒褐色粘質土層で、第IV層の青灰褐色粘質土層は地山ととらえられる。

遺構はⅠ期～III期の各時期のものが検出されているが、住居址の分布は微高地中央付近の西側に集中し東側は溝址・土壙が主体となる。

2　Ⅰ期の遺構

1号住居址（図5）

検出状況：調査区東端にて検出された住居址で、北東端、南西端は調査区外となる。形状・規模：8.10m×6.50mほどの長楕円形プランを呈し、主軸はN－37°－Wである。床面・壁：床面は壁際をのぞき特に住居中央付近が堅緻に締まっていたが貼り床は形成されていない。壁高は東壁18cm・西壁25cm・南壁18cm・北壁24cmを計り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：P2～P14が検出されているが明確に主柱穴と考えられるものはなく、柱穴の配列は不明である。遺物出土状況：住居址北東隅の壁際で壷(1)が床直上より出土している。またP1・P14付近の壁際より炭化材がかなり出土している。

3号溝址（図4）

検出状況：調査区東端にて検出された北側と南側はそれぞれ調査区外となる。また北側は掘りこみが浅く不明瞭なものとなる。形状・規模：南西から北東方向に直線的に伸びる溝址で、中軸線の主軸はN－40°－Eである。確認面における幅は平均1m前後、深さは9～12cmほどの浅い溝である。掘りこみ等の形状は一様ではないが全体としての断面は浅い逆台形状を呈する。遺物出土状況：覆土内より甕(2)が出土したほかは小破片のみである。

7号土壙（図6）

平面プランは1.70×1.50mの不整方形を呈する。深さ20cm程で北側は二段にわたって掘りこまれている。覆土内より若干の土器片が出土している。

8号土壙（図6）

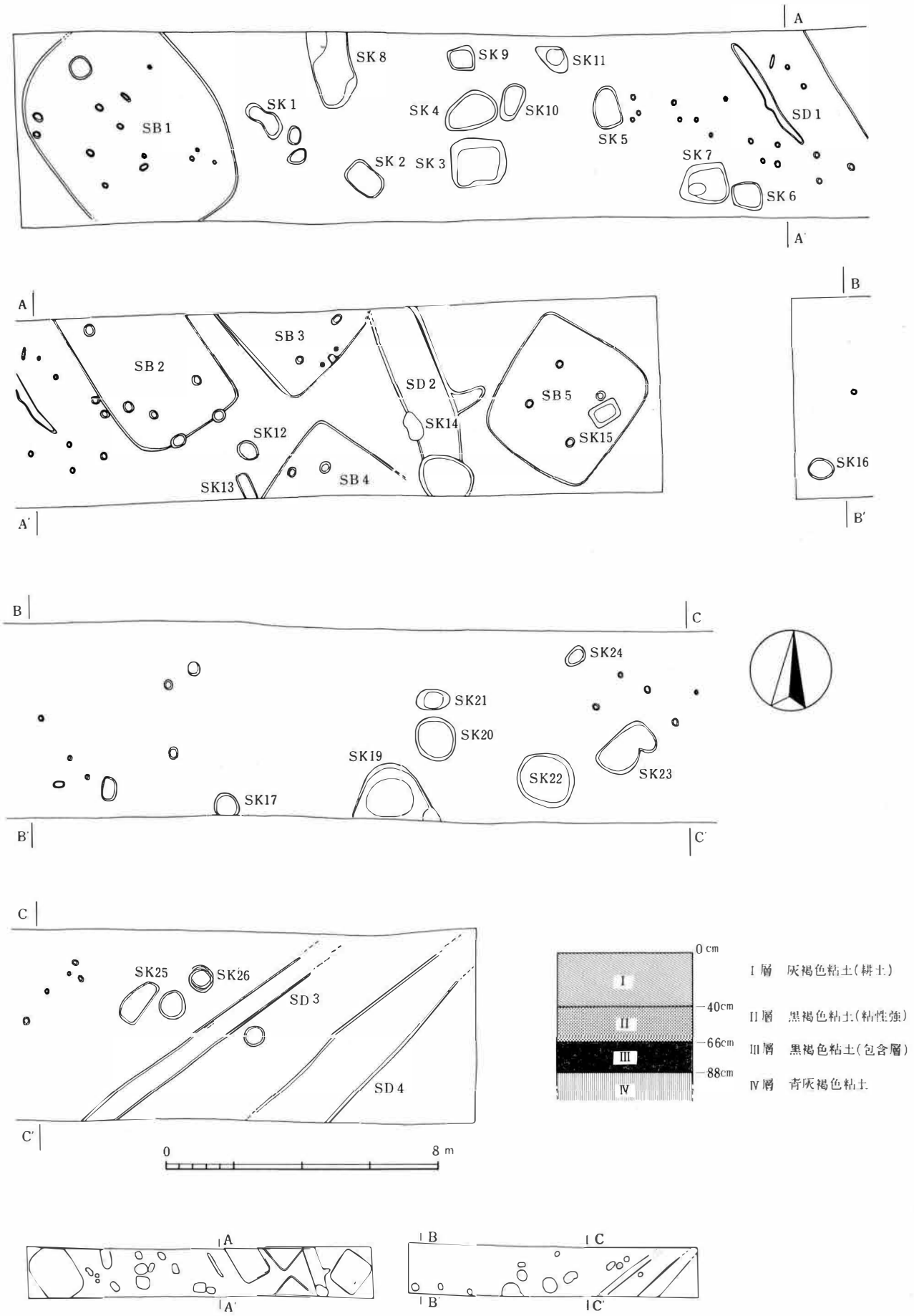
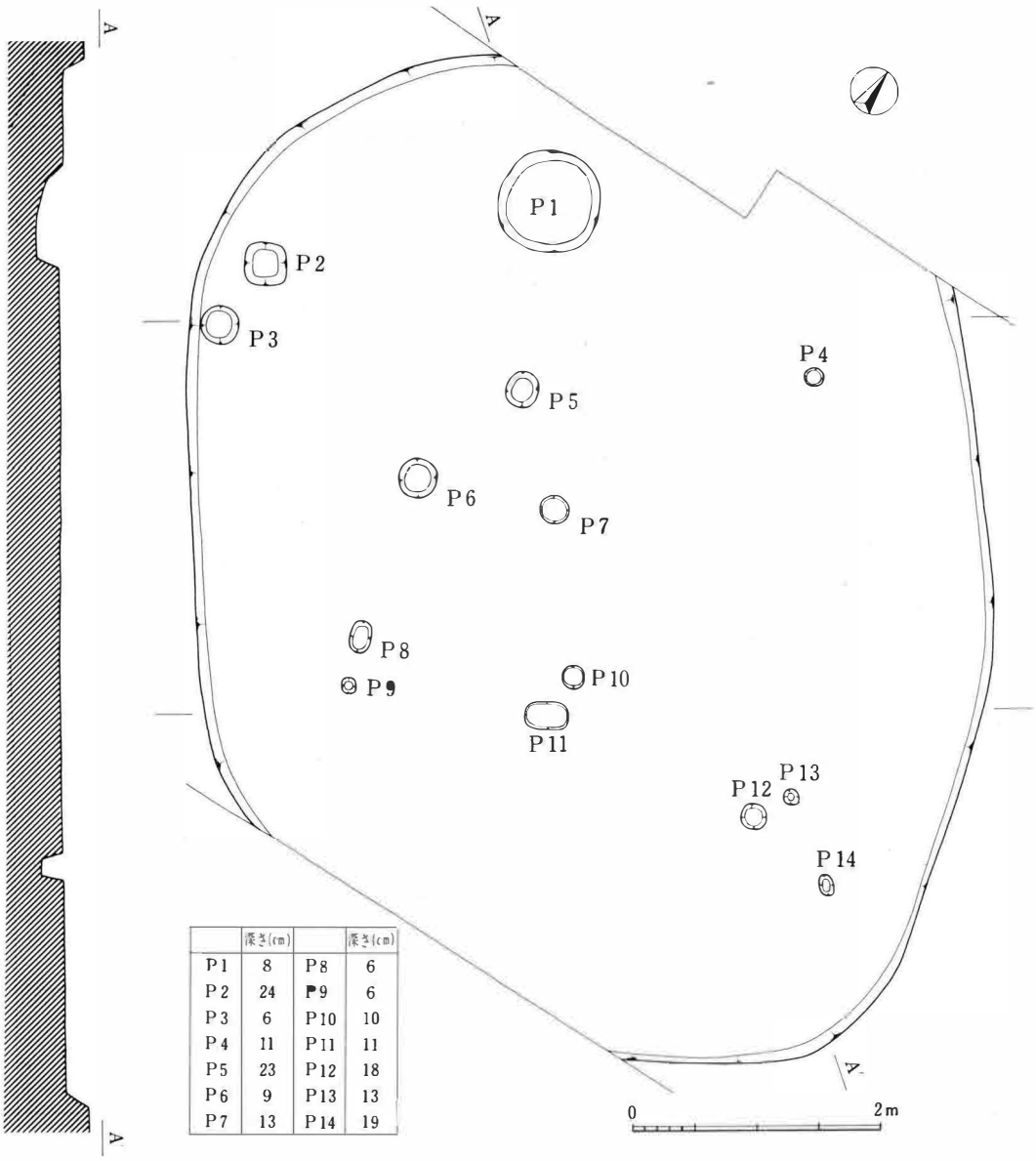


図 4　A区遺構全測図　基本土層図



	深さ(cm)		深さ(cm)
P1	8	P8	6
P2	24	P9	6
P3	6	P10	10
P4	11	P11	11
P5	23	P12	18
P6	9	P13	13
P7	13	P14	19

図5　1号住居址実測図

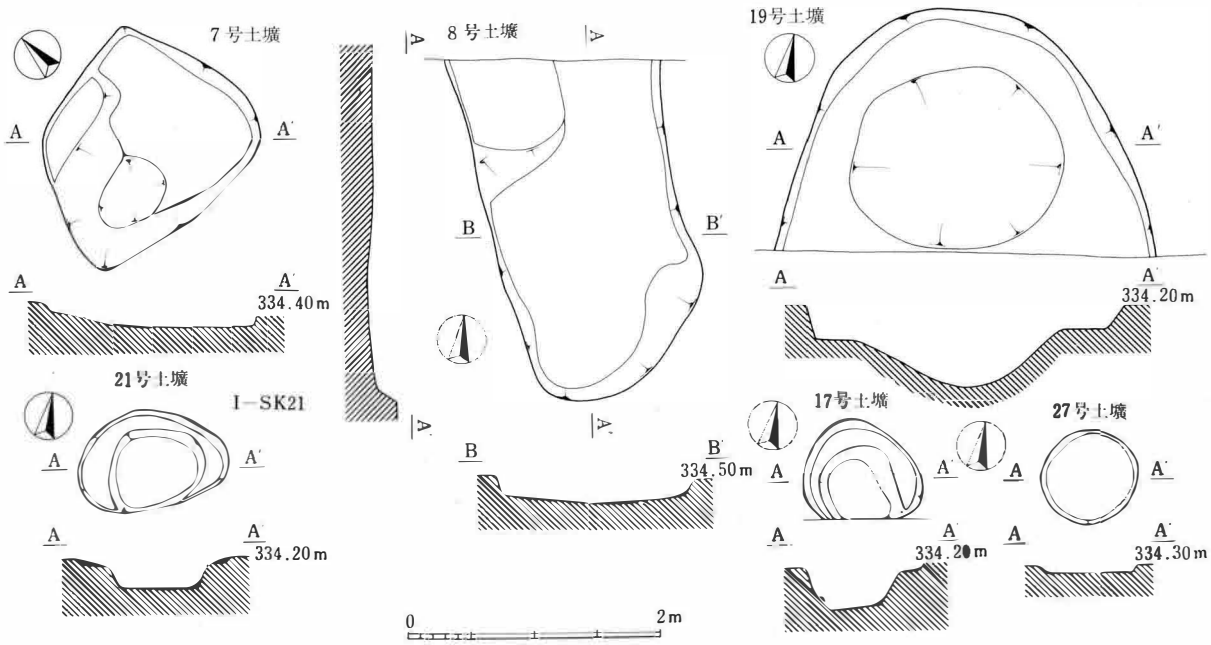


図6　7号・8号・17号・19号・21号・27号土壙実測図

北側は調査区外となるが、平面プランは1.50mほどの不整長方形を呈する。深さ15cm程で断面は浅い逆台形状を呈する。覆土は黒褐色粘質土一層である。北側は二段にわたる掘りこみがなされ、上段は浅いテラス状を呈する。覆土内より若干の土器破片が出土している。

17号土壙（図６）

南側は若干が調査区外となるが、平面プランは径0.90mほどの不整円形を呈する。二段にわたる掘りこみがなされ深さは30cm程である。覆土内より甕（３・４）が出土している。

19号土壙（図６）

南側は½程が調査区外となるが、平面プランは径2.90mほどの不整円形を呈すると思われる。二段にわたる掘りこみがなされ上段は深さ25cmを計る。底面は湧水が著しく完全には調査しえなかったが、おそらく65cmほどの深さになると思われる。壷（５～７）・甕（８）・高坏（９）・坏（10）が覆土内より出土している。

21号土壙（図６）

平面プランは1.20×0.80mの楕円形を呈し、二段の掘りこみがなされる。深さ24cmで覆土は黒褐色粘質土一層である。覆土内より若干の土器破片が出土している。

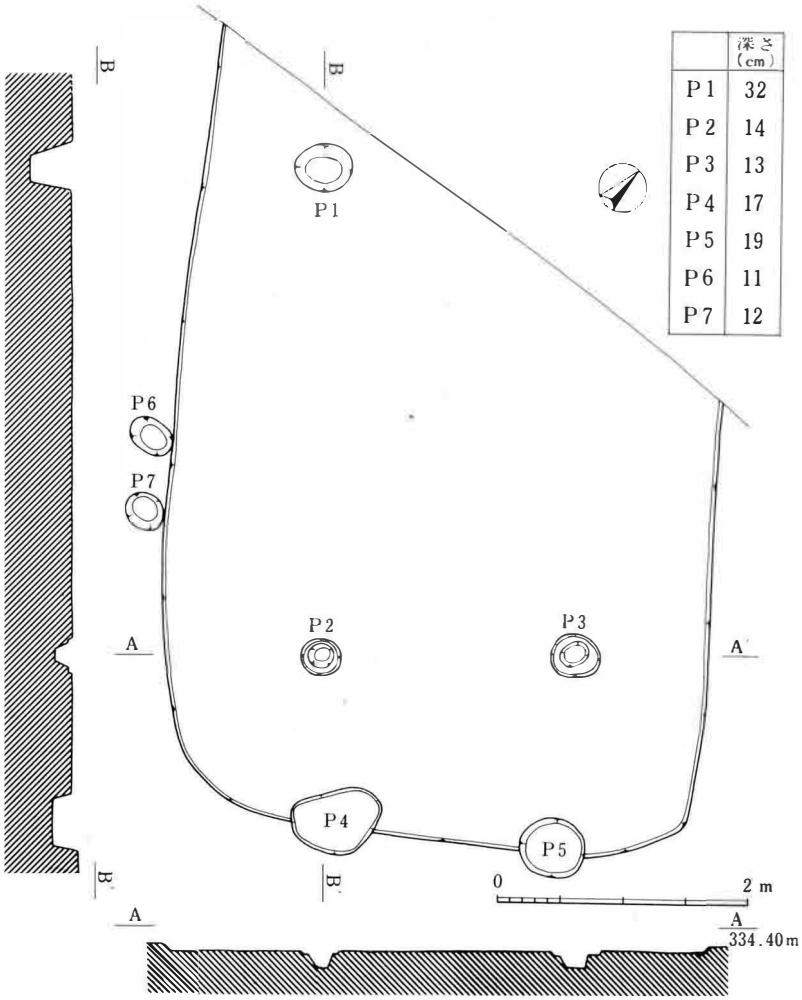
27号土壙（図６）

平面プランは径0.75mほどの円形を呈し深さは５cm程と浅い。覆土より若干の土器片が出土している。

３　II期の遺構

２号住居址（図７）

検出状況：調査区中央付近の住居址集中地区から検出されたもので、北側¼程が調査区外となる。形状・規模：長軸約6.50m×短軸4.40mほどの隅丸長方形プランを呈する。主軸はN－46°－Wを計り、後述する３号・４号住居址もほぼ同一の主軸方位をとる点興味深い。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻に締まっていたが壁際は軟弱である。確認面からの掘りこみは浅く平均７cm前後である。柱穴：Ｐ１～Ｐ３が検出されている。いずれも主柱穴と考えられ、特に



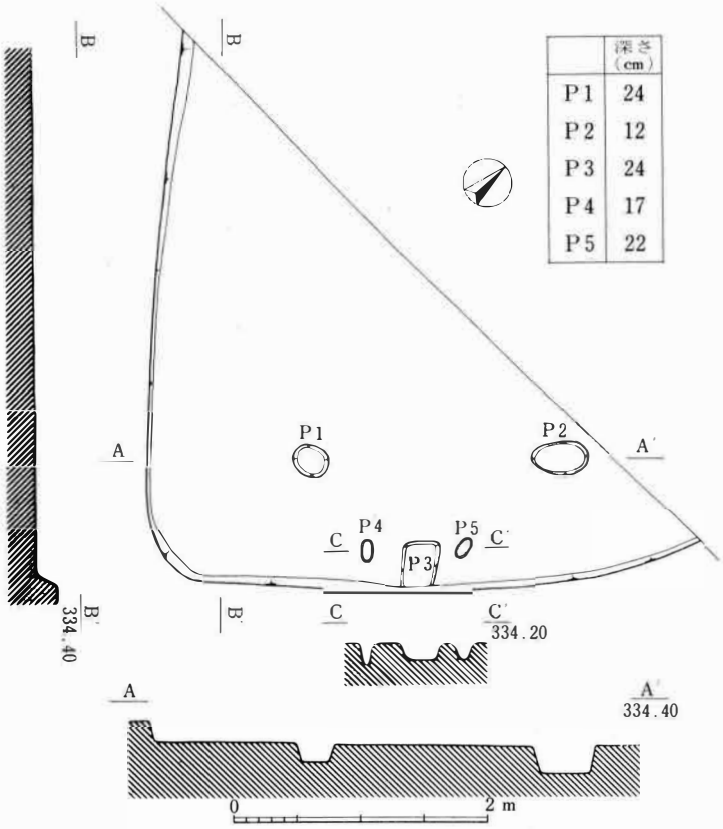
	深さ（cm）
P1	32
P2	14
P3	13
P4	17
P5	19
P6	11
P7	12

図７　２号住居址実測図

Ｐ１には柱根が遺存していた。柱穴配置は４本長方形プランである。またＰ４～Ｐ７は直接本住居址と関わるものか否か調査にては明らかにしえなかったが、何らかの壁外施設の痕跡の可能性もある。その他の施設：炉は調査区外となって確認しえなかったが奥壁側柱穴間中央やや壁よりの位置に地床炉の存在が予想される。遺物は小破片がかなり出土しているが図示しうるものはない。

３号住居址（図８）

検出状況：２号住居址の東側で検出されたもので、東側を２号溝址に切られている。また北側½程が調査区外となる。形状・規模：長軸は想定で約5.0m、短軸約4.5m程の隅丸長方形プランを呈し、主軸はＮ－41°－Ｗである。床面・壁：床面は壁際を除き全体に固く締まっていた。壁高は西壁16cm、南壁15cmで確認面からの掘りこみは平均15cm前後である。柱穴：Ｐ１～Ｐ５が検出されている。Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と考えられ、柱穴配置は２号住同様４本長方形プランが予想される。Ｐ３～Ｐ５は出入り■施設としてとらえられるものである。Ｐ４・Ｐ５の二本一対の支柱の中央付近に梯子受穴？としてのＰ３が存在するものと理解したが、Ｐ３を梯子受穴とする明確な根拠はない。炉は調査区外となり確認されていない。遺物出土状況：いずれも覆土内からの出土であるが壺(11)・高坏(12)が出土している。特に高坏(12)は形態的に北陸地方からの影響が強く伺われる点注目したい。ただし壺(11)内面の篦削り技法の存在を考慮するならば、本住居址はIII期に下る可能性もある。

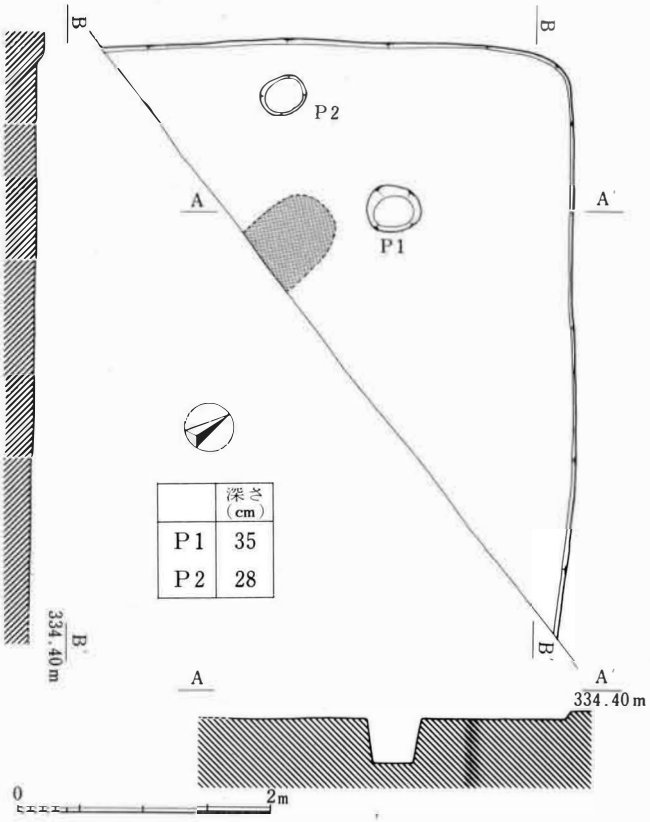


	深さ (cm)
P1	24
P2	12
P3	24
P4	17
P5	22

図８　３号住居址実測図

４号住居址（図９）

検出状況：３号住居址南側で検出されたもので、東側は３号住同様２号溝址に切られる。南側½程が調査区外となる。形状・規模：長軸は想定で約5.0m、短軸約4.6m程の隅丸長方形プランを呈し主軸はＮ－58°－Ｗを取る。床面・壁：床は住居址中央



	深さ (cm)
P1	35
P2	28

図９　４号住居址実測図

付近を中心に比較的固く締まっているが、壁際は軟弱である。壁高は北西壁5㎝、北東壁4㎝程で確認面からの掘りこみは平均5㎝前後と浅い。柱穴：Ｐ１・Ｐ２の二本が検出されている。Ｐ１は主柱穴，Ｐ２は奥壁寄り中心軸上に配された支柱穴と考えられる。その他の施設：炉が一個検出されている。奥壁側柱穴間中央やや内側に位置し、深さ2㎝程のレンズ状に掘りくぼめられた地床炉で、焼土・炭化物の堆積が確認されている。床面より壷⒀が出土している。

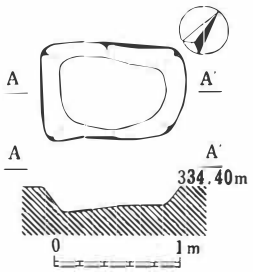


図10　15号土壙実測図

4号溝址（図4）

調査区東端で検出されたもので、同時期の遺跡範囲の東端を画する溝である可能性が高い。南西から北東へ直線的に伸びる形態を呈し、中軸線の主軸はＮ－47°－Ｅを計る。確認面からの掘りこみは10㎝前後と浅く南側がしだいに深くなる。幅は平均2ｍ程である。覆土内より土器片が出土しているが図示しうるものはない。

15号土壙（図10）

5号住居址の下に確認されたもので1.15×0.75ｍ程の不整長方形を呈する。確認面からの掘りこみは20㎝前後で断面逆台形状を呈する。壙底に接した状態で甕⒁が出土している。

4　III期の遺構

5号住居址（図11）

検出状況：調査区中央付近にて検出されたもので、住居址集中区の東端に位置する。形状・規模：長軸5.20ｍ短軸4.80ｍの隅丸方形プランを呈し、主軸はＮ－32°－ＥとII期の住居址とは異なる。床面・壁：床は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高はいずれも5㎝前後で、確認面からの掘りこみは浅い。柱穴：Ｐ１～Ｐ４が検出されているが、いずれも主柱穴と考えられ、柱穴配置は一辺約2ｍの4本長方形プランである。住居址中央やや西寄りのところに炉が検出されている。深さ5㎝程の

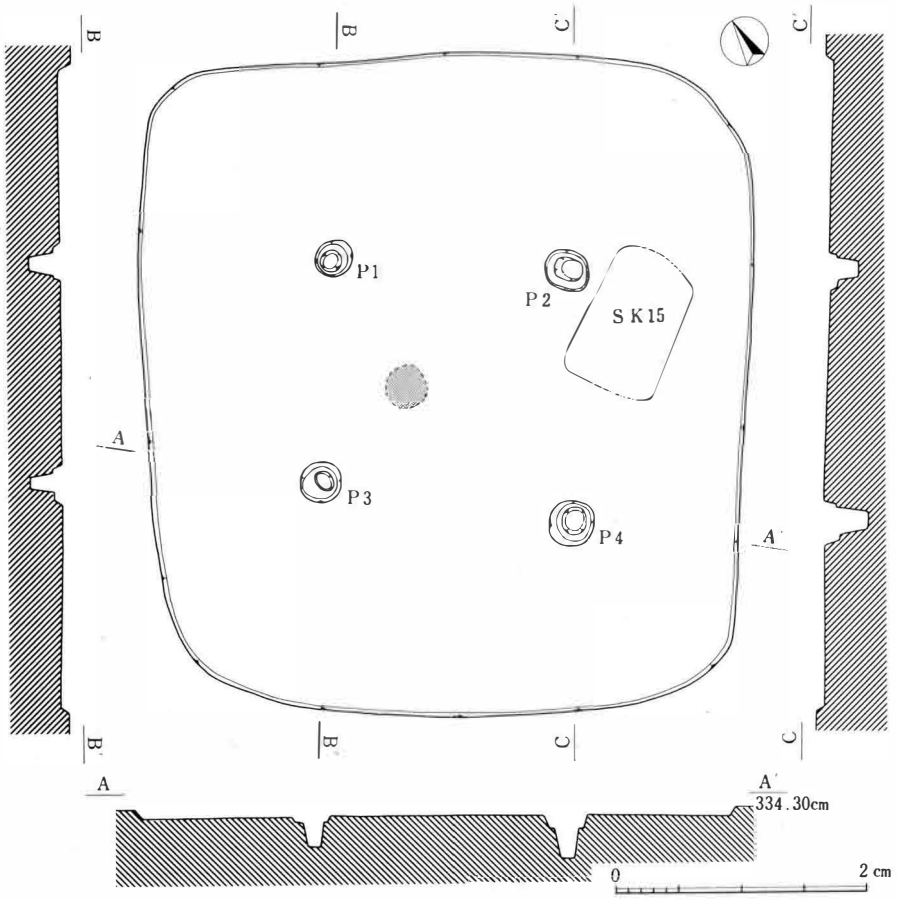


図11　5号住居址実測図

レンズ状に灰と炭化物の堆積が確認され底面はさほど焼き締まっていない。地床炉である。

2号溝址（図4）

調査区中央付近にて検出された溝で、3号・4号住居址を切って構築され、14号土壙に切られる。南東から北西方向に直線的に伸びる形態を呈し、中心軸の主軸はN－21°－Wを計る。確認面からの掘りこみは平均30cm前後とやや深く、断面逆台形状を呈する。深さは北側に行くにつれしだいに深くなる。図示しうる遺物は出土していない。

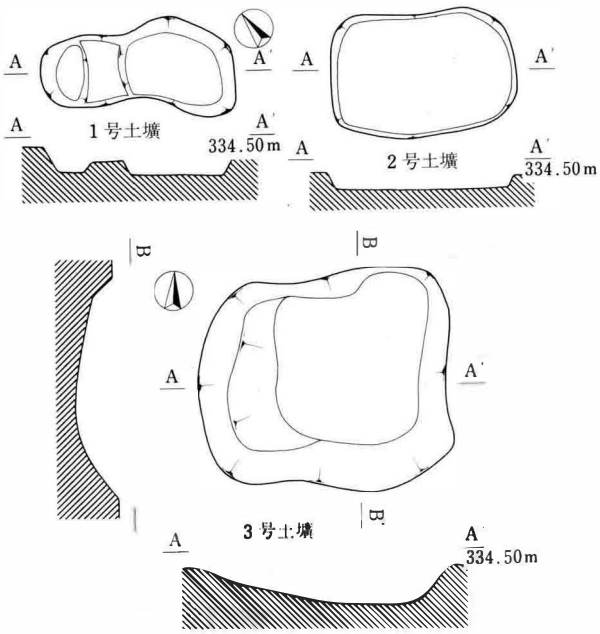
14号土壙（図4）

2号溝址を切って構築される。1.0×0.6m程の不整長方形を呈し、深さ22cmを計る。壙底に接した状態で壷(15)が出土している。

5　その他の遺構（図12）

遺構名	平面形	規模（cm）			時期
		長軸	短軸	深さ	
1号土壙	不整楕円形	150	77	25	I
2号土壙	長方形	145	95	15	I
3号土壙	方形	195	175	35	I
4号土壙	楕円形	200	125	15	不明
5号土壙	楕円形	150	105	24	II
6号土壙	方形	115	100	35	II
9号土壙	方形	95	85	14	II
10号土壙	楕円形	143	85	32	不明
11号土壙	不整楕円形	140	85	25	不明
12号土壙	円形	85	65	25	不明
13号土壙	長方形	112	50	30	不明
16号土壙	円形	100	80	10	不明
20号土壙	円形	150	155	35	不明
22号土壙	円形	210	190	15	不明
23号土壙	不整長方形	230	140	14	不明
24号土壙	不整楕円形	85	60	18	不明

表1　A区土壙一覧表



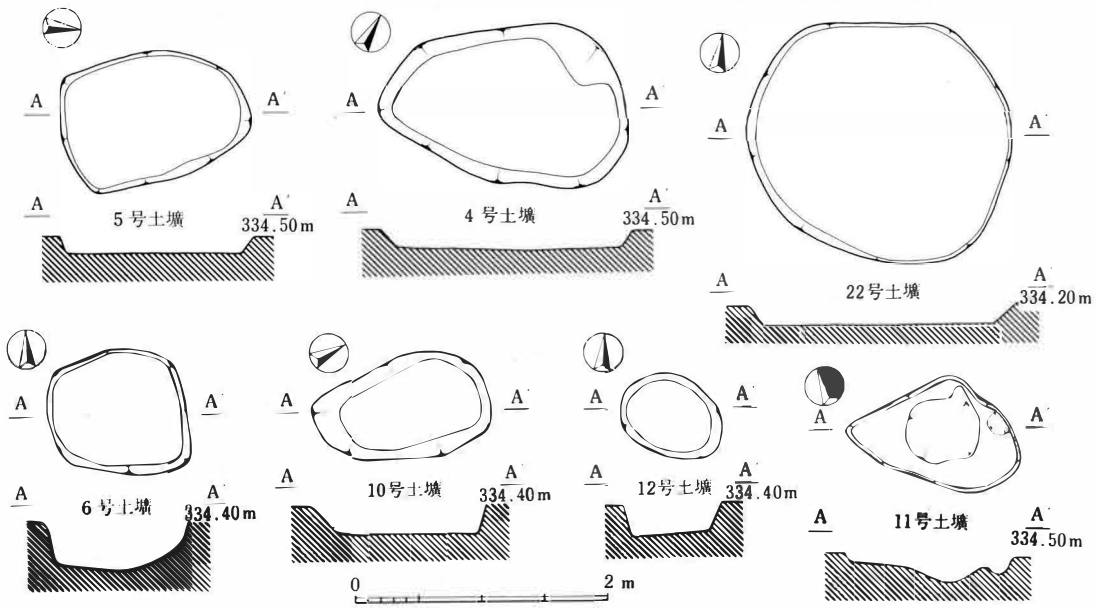


図12　A区土壙実測図

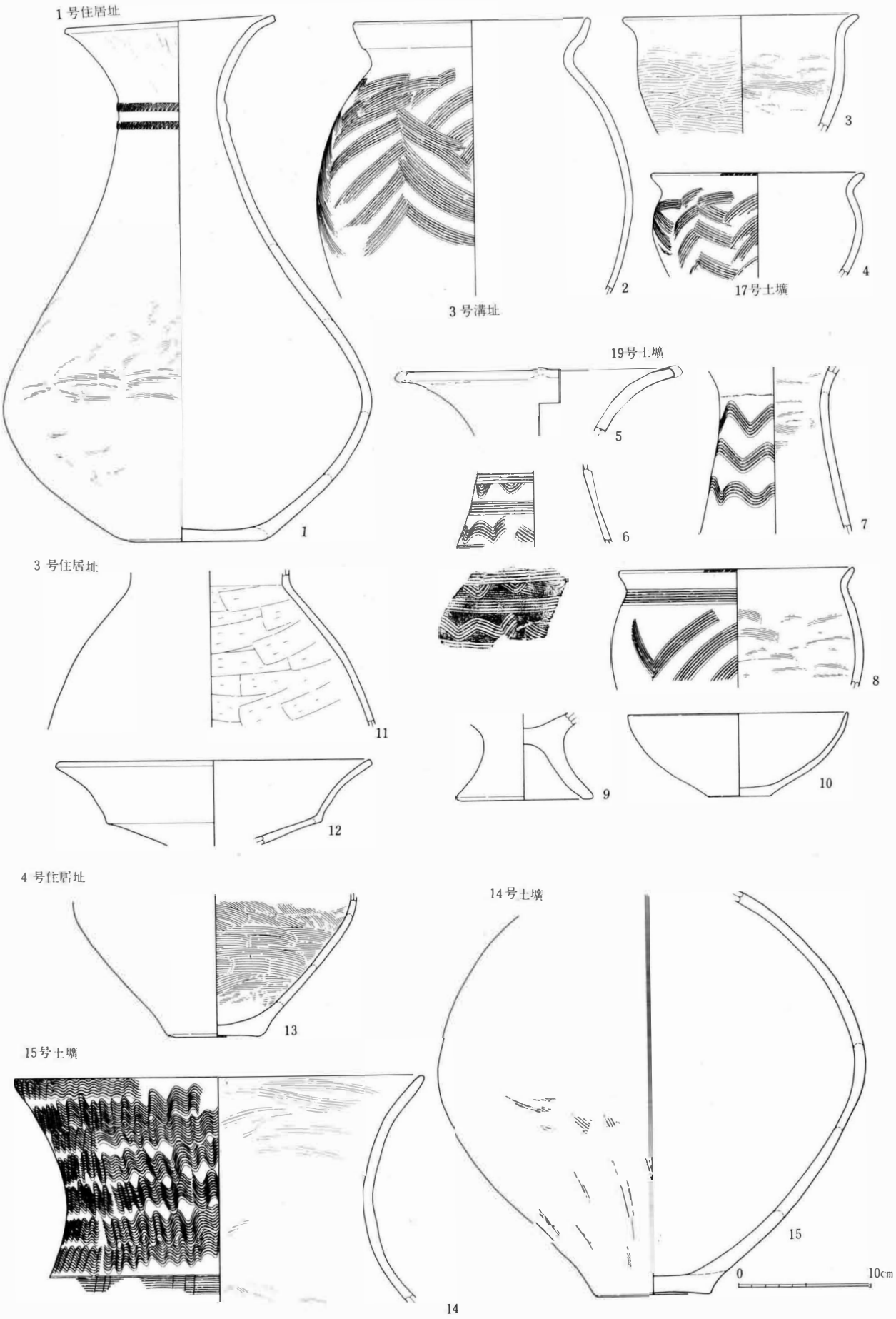


図13　A区出土土器実測図

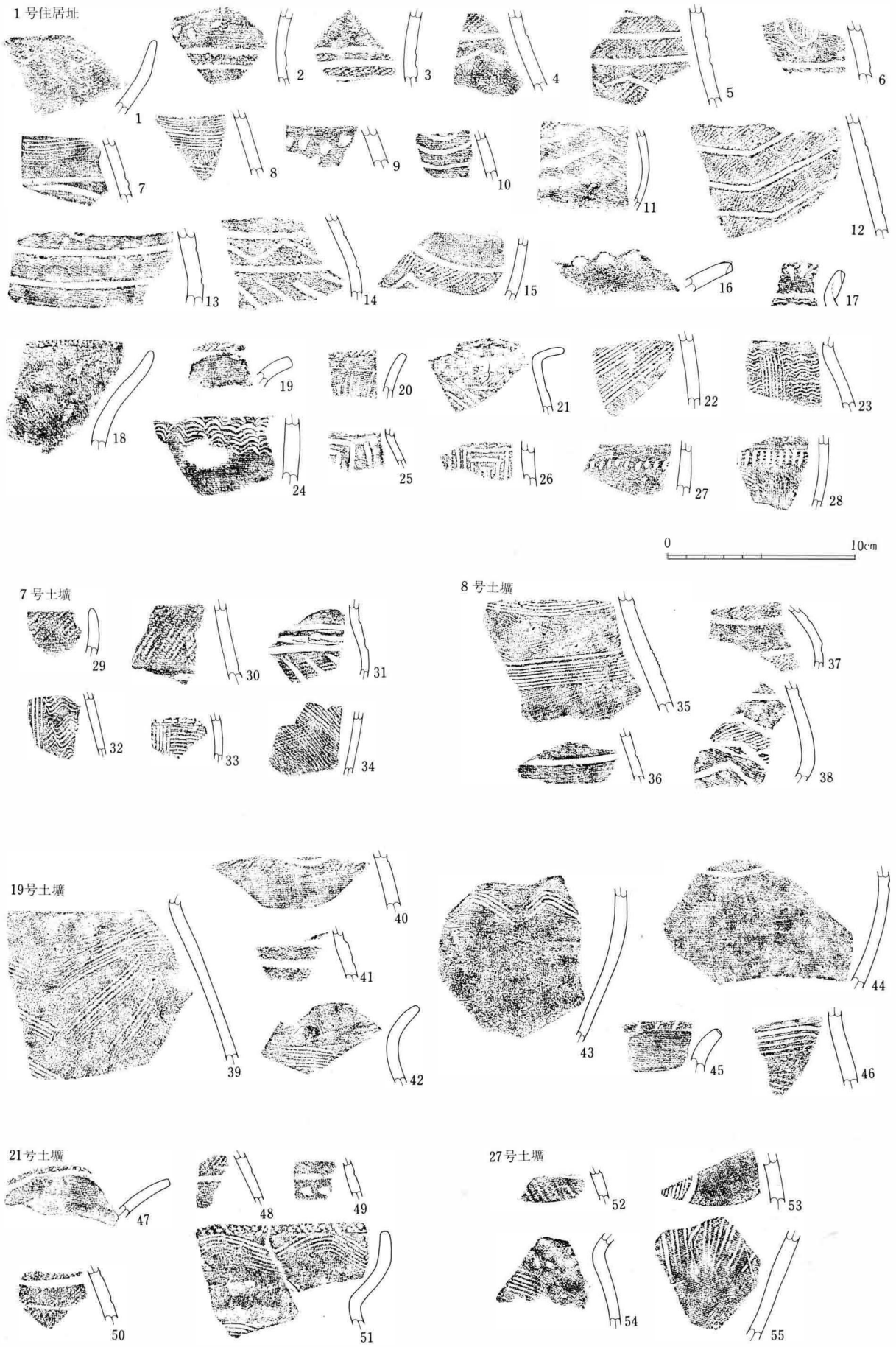


図14　A区出土土器拓影

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
1号住居址										
1	壺	15.5	10.4		2／3	C		口縁：ハケ→箆磨き　頸：隆帯2→LR縄文　胴：ハケ→箆磨き	ナデ	
3号溝址										
2	甕	17.6			2／3	CD		口縁：ナデ　胴：櫛縦羽状文	ハケ→箆磨き	
17号土壙										
3	甕	17.6			2／3	CD		口縁：ナデ　胴：ハケ→ナデ	箆磨き	
4	〃	16.0			1／2	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛縦羽状文（右回り）	箆磨き	
19号土壙										
5	壺	20.0			1／4	C		口唇：山形突起　口縁：ハケ→ナデ	ハケ→箆磨き	
6	壺				1／4	F	○	ハケ　櫛波状文2→櫛直線文3	ナデ	
7	壺				2／3	C				
8	甕	17.6			1／4	D		口唇：LR縄文　頸：櫛直線文→櫛縦羽状文（左回り）	ハケ→箆磨き	
9	高坏		10.0		4／5	D		磨耗不明	磨耗不明	
10	坏	16.4	4.6	6.1	1／3	A		箆磨き・赤彩　底部：箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
3号住居址										
11	壺				1／5	C		箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆削り→ナデ	
12	高坏	23.0			1／4	B	○	口唇：面とり　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
4号住居址										
13	壺		7.2		4／5	B		箆磨き・赤彩　底部：箆磨き	ハケ	
15号土壙										
14	甕	30.4			2／3	B		頸：櫛簾状文（3連止め）口縁：櫛波状文7（下→上、区画充塡）	ハケ→箆磨き	
14号土壙										
15	壺		8.4		3／4	B		ハケ→箆磨き　底部周辺：箆削り	ナデ	

表2　A区出土土器観察表

1号住居址土器出土状況

15号土壙土器出土状況

2　B区の調査

1　調査概要

B区は、事業予定地内にて唯一畑地が密集して展開する微高地をなしており、調査着手以前より濃密な遺構の分布が予想されていた地点である。

またおそらく遺跡が展開する自然堤防の北東端に位置し、昭和49年度に調査を行なった本調査地より西へ400mの距離にある水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡の存在を考慮するならば、A区もあわせ調査区以西の自然堤防上に大規模な遺跡群が展開することが予想される。

今回は道路部分の総面積3,800㎡以上にわたる調査を行なったがI期～III期の各時期にわたる多量の遺構が検出されている。

調査区が長大なため、以下便宜的に調査区を1～5区に小区分し、その概要を時期ごとに述べる。

I期

1～3・5区において遺構の分布が認められるが、各地区にて検出された遺構には出土土器の様相から大きな時間差は認められず、ほぼ同一時期の集落址と考えてよさそうである。

分布状況からは1・2区と3・5区とに二大別することができる。2区以北の状況は攪乱等のために詳細不明であるが1区と3区の中間地帯は遺構の分布が認められない空白地帯となる。

南側の1・2区では住居址は比較的散漫な分布状況を示し、これとは対照的に北側の3区北半～5区南半は環状に密集した分布状況を示す。仮にこの二者を同一時期に併存した二つの集落として理解することが可能ならば、当該期集落研究において非常に興味深い資料となろう。

II期

1・2区にも1軒住居址が検出されているが、分布の中心は3・4区と北側に移行する。3区と4区との中間地帯ならびに4区南半は攪乱等により不明な部分が多いが、SD13以北が主要な分布域となる。

出土土器の中に在地の箱清水式土器の伝統を残すものと古式土師器が供伴する例が存在すること等考慮するならば、II期～III期への移行は同一集落内にて比較的スムーズになされた可能性が考えられる。

III期

II期同様1・2区にも若干の遺構が分布するが、分

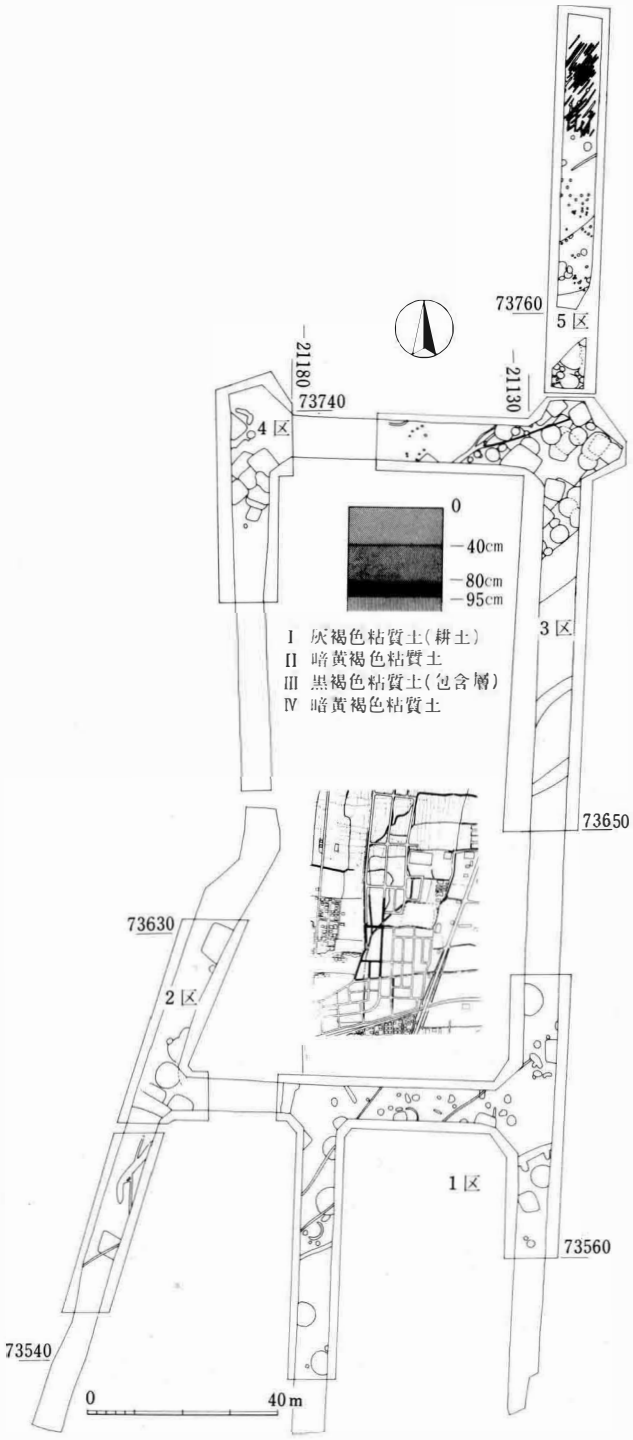


図15　B区全測図

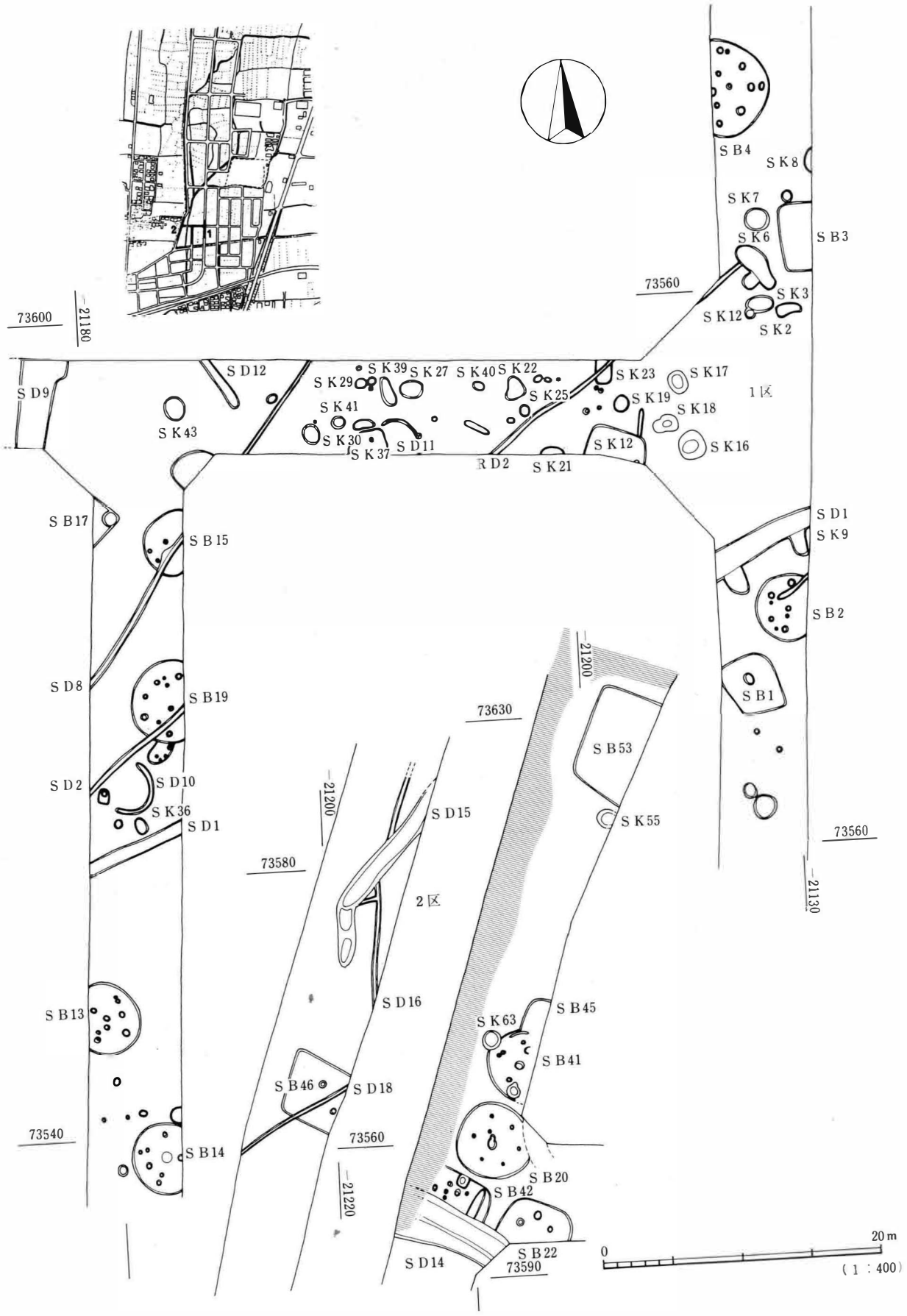

SB4
SK8
SK7
SK6
SB3
SK3
SK12
SK2
73560
73600
21180
SD12
SK39
SK27
SK40
SK22
SK23
SK17
SK29
SK25
SK19
SK18
1区
SD9
SK41
SK43
SK30
SD11
SK37
RD2
SK21
SK12
SK16
SB17
SB15
SD1
SK9
SB2
21200
SD8
SB19
73630
SB53
SB1
SD2
SD10
SK36
SD1
SD15
SK55
73560
73580
2区
21130
SD16
SB13
SK63
SB45
SB41
SB46
SD18
73540
SB14
73560
SB20
SB42
21220
SB22
SD14
73590
0
20m
(1:400)

図16　B－1・2区全測図

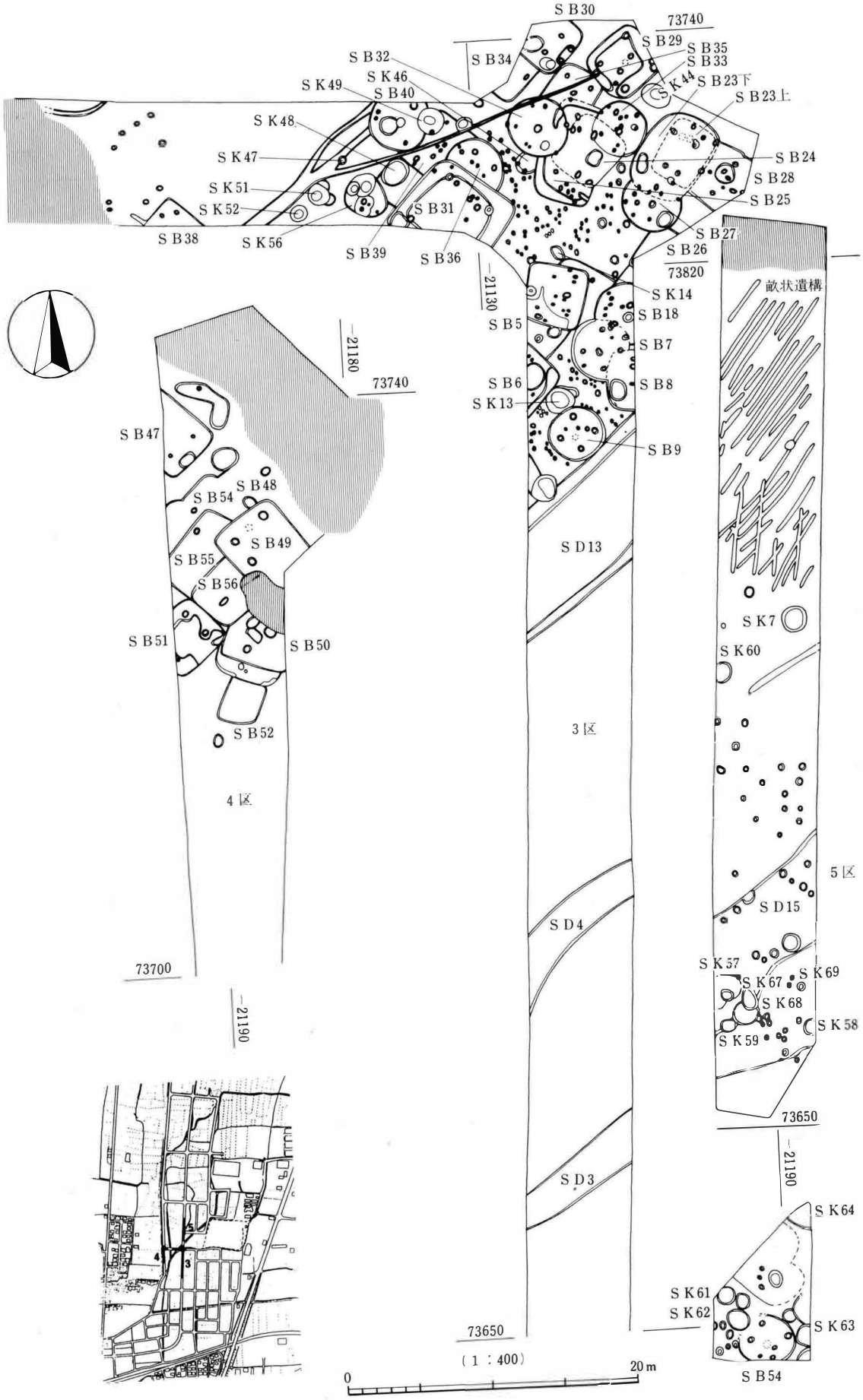


図17　B－3・4・5区全測図

布の中心は３・４区と北側にある。SD13以北が主要な分布域であるが、５区のSD15とした広大な溝状の落ち込みが集落域の北側を画している可能性が高い。住居址ならびに溝址から大量の土器群が出土しているが、東海系・北陸系を中心にかなりの量の外来系土器群が含まれ、当該期の広範な交流の一端を垣間見せる。

2　Ⅰ期の遺構

1号住居址　（図18）

検出状況：１区東南端で検出された住居址で、北西隅が一部調査区外となるがほぼ全堀しえた。形状・規模：長軸4.30m、短軸3.80mのやや不整な隅丸方形プランを呈する。検出当初は土壙状の落ち込み遺構かと思われたが中央付近に焼土と炭化物の堆積を有するピットが検出されたので住居址と認定した。主軸はN－21°－Wを測る。床面・壁：床面は全体に軟弱で、明瞭な床施設は認められない。壁高は東壁15cm・西壁20cm・南壁18cm・北壁16cmと、確認面からの掘りこみは平均20cm前後である。柱穴：主柱穴等検出されていないが住居址中央やや北寄りの位置に、焼土と炭化物の堆積を有する径18cmのピットが検出されている。炉とする明確な根拠はないが二段にわたる掘りこみを有し深さ19cmである。覆土内より深鉢（16）が出土している。

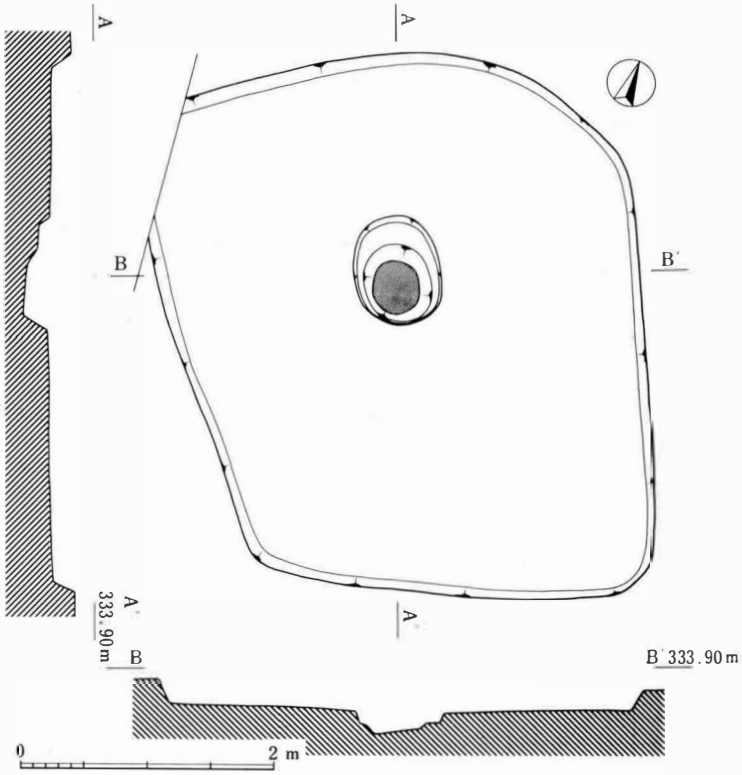
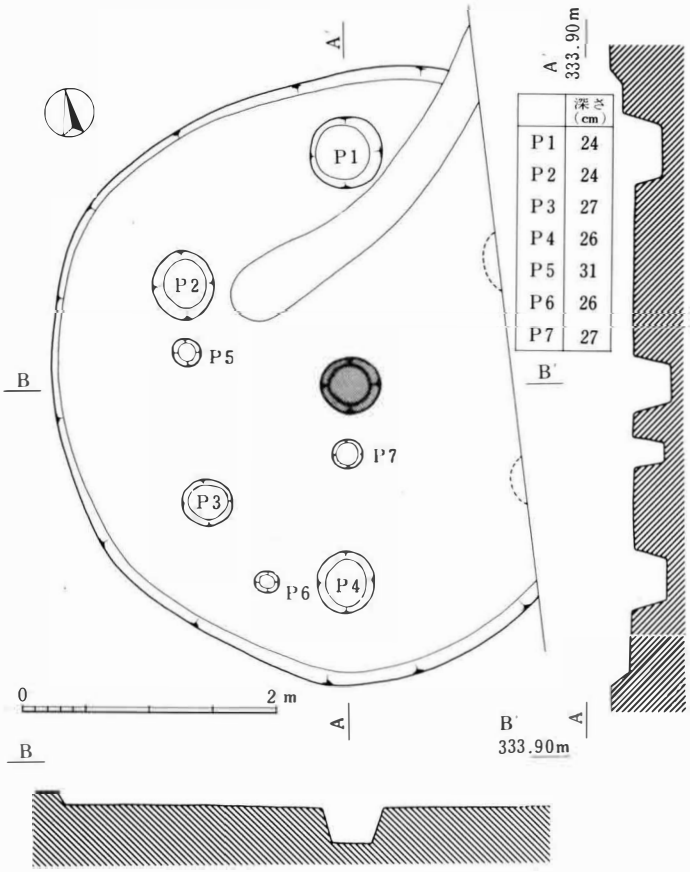


図18　１号住居址実測図

2号住居址　（図19）

検出状況：１区東側で検出された住居址で東側⅓程が調査区外となる。また北側を近世溝に切られる。形状・規模：径4.90m程の円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で、貼り床等の施設は認められなかった。壁高は北壁16cm・西壁10cm・南壁16cmで確認面からの掘りこみは平均20cm程である。



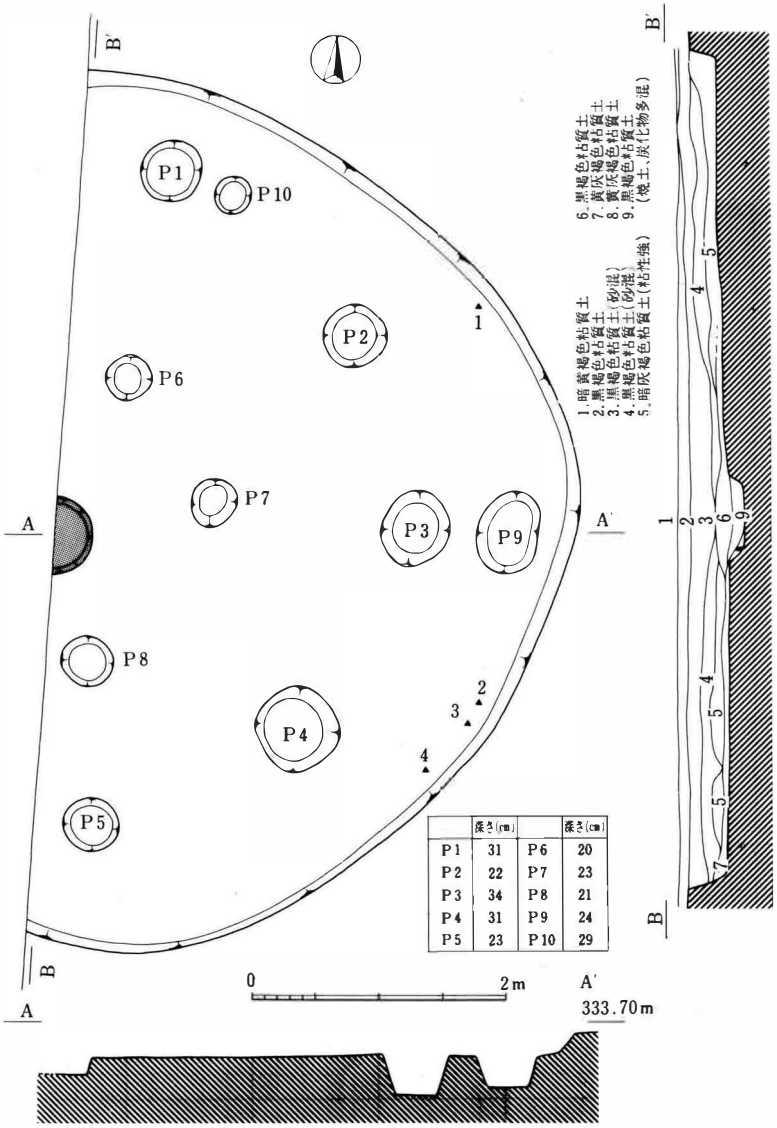
	深さ（cm）
P1	24
P2	24
P3	27
P4	26
P5	31
P6	26
P7	27

図19　２号住居址実測図

柱穴：Ｐ１～Ｐ７が検出されている。主柱穴はＰ１～Ｐ４で炉を中心として６本の同心円状の配列が予想される。Ｐ５～Ｐ７は支柱穴と考えられるものであるが、配置は不規則である。炉：住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。径50cm程の円形をなし、深さ27cmである。内部には灰・炭化物・焼土の堆積が認められたが底面はさほど焼き締まってはいない。覆土内から土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

４号住居址　（図20）

検出状況：１区北東端で検出された住居址で、西側½程が調査区外となる。本住居址より北は同時期遺構の空白地帯が広がり明確なものでは９号住居址まで遺構が存在せず、Ｉ期に併存する二つの集落が存在した可能性のあることは前節にて述べたとおりである。形状・規模：径6.90mのやや不整な円形プランを呈し、本遺跡で検出されたＩ期の住居址の中ではもっとも大型である。床面・壁：床面は住居址中央部を中心として主柱穴間内部が比較的締まっていたが、壁際は軟弱である。貼り床等の施設は認められなかった。壁高は北側15cm・東側17cm・南側17cmを測り、確認面からの掘りこみ平均15cm前後である。覆土は７層から構成されるが、基本的にはレンズ状の自然堆積としてとらえられる。柱穴：Ｐ１～Ｐ10が検出されているが大型住居であるためか、主柱穴は炉を中心に二重に配置される。内側はＰ６～Ｐ８で４本～５本の同心円状の配置が予想され、外側はＰ１～Ｐ５で８本の同心円状の配置が予想される。Ｐ９は規模・深さとも主柱穴と大きな変化はないがその性格は不明である。炉：住居址中央に地床炉が一個検出された。½が調査区外となるが径65cm程の円形を呈すると思われ、深さ14cmである。内部には灰・炭化物・焼土の堆積が認められ底面もかなり焼き締まっていた。遺物出土状況：覆土内より壷（17）・甕（18・19）が出土している。また住居址東側の壁際で床面より若干浮いた状況で磨製石鏃（６）・扁平片刃石斧（43）・打製横刃型石器（45）・打製石錐（14）が出土している。



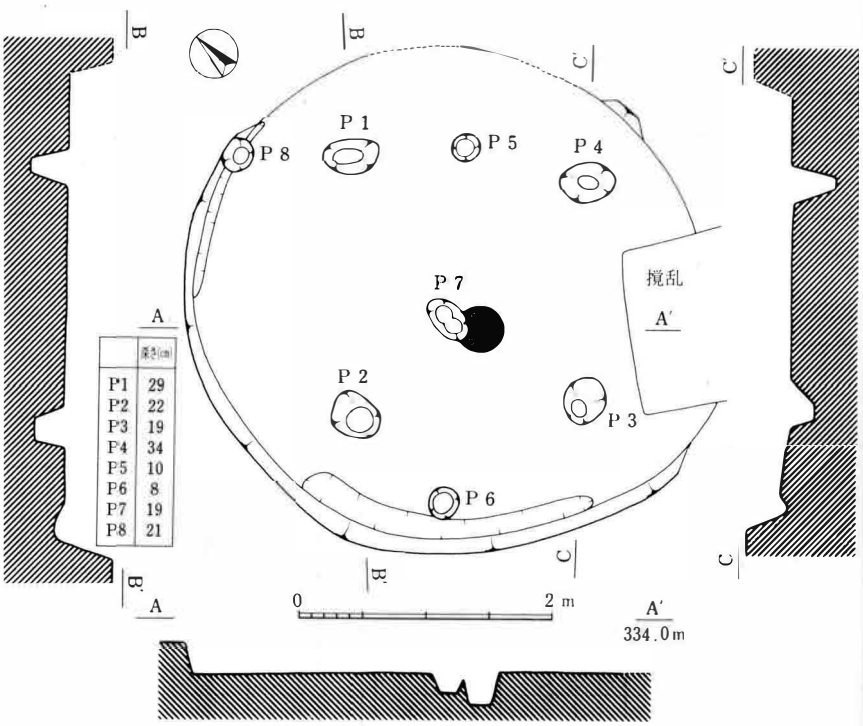
	深さ(cm)		深さ(cm)
P1	31	P6	20
P2	22	P7	23
P3	34	P8	21
P4	31	P9	24
P5	23	P10	29

図20　４号住居址実測図

７号住居址　（図21）

検出状況：３区にて検出された住居址で、北東を18号住居址に、南東を８号住居址に切られ一部に攪乱をうける。形状・規模：径4.40mのやや不整な円形プランを呈する。床面

・壁：床面は全体に固く締まっており良好な状況を呈していた。壁高は西壁27cm・南壁39cmを測り、確認面からの掘りこみは平均30cm程である。西壁と南壁際に壁周溝が検出されている。南壁際のものは幅15cm・長さ2.30m・深さ7cm、西壁際のものは幅6cm・長さ1.50m・深さ3cm程である。柱穴：P1～P8が検出されている。主柱穴はP1～P4と考えられ、柱穴配置は一辺2.0mの方形プランである。P5・P6は住居址の中軸線上に配される支柱穴と考えられ、P7もその可能性が考えられる。P8は壁際に配される支柱穴の可能性があるが他には検出されておらず詳細は不明である。炉：住居址中央やや南寄りの位置に地床炉が一個検出されている。径40cm程の円形で焼土・炭化物が検出されているがさほど焼き締まってはいない。遺物出土状況：床面付近より壷（20～35）・甕（36～48）・蓋（49）・鉢（50・51）・坏（52～54）・高坏（55）が出土している。

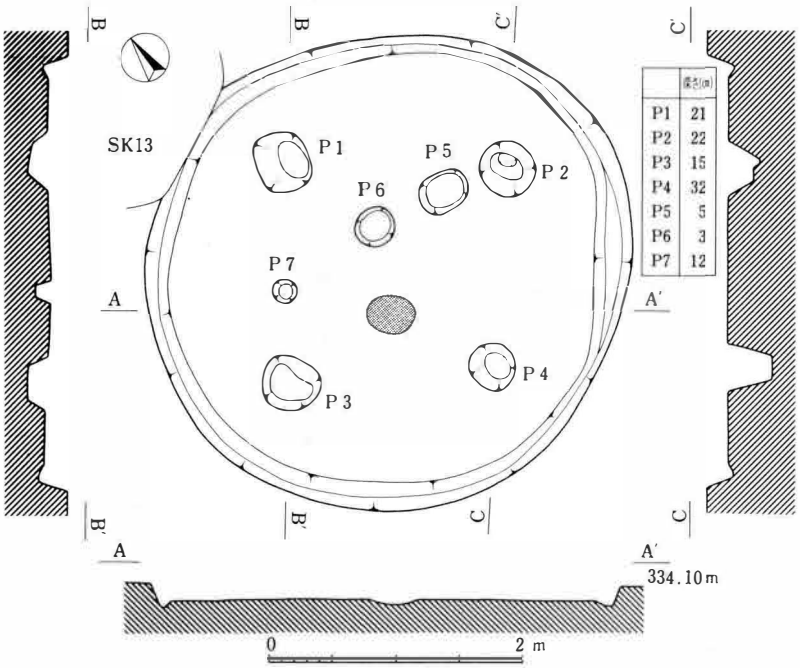


	深さ(cm)
P1	29
P2	22
P3	19
P4	34
P5	10
P6	8
P7	19
P8	21

図21　7号住居址実測図

9号住居址　（図22）

検出状況：3区住居址集中区南端で検出され、北西隅を13号土壙に切られる。形状・規模：径4.0mの円形プランを呈する。床面・壁：床は全体に堅緻に締まっており良好な状態であった。壁高は東側17cm・西側15cm・南側19cm・北側16cmで平均18cm程である。壁周溝が全周しており、幅20cm・深さ5cm平均である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P4で柱穴配置は一辺1.80mの方形プランである。P5～P7は支柱穴だが配置が不規則で詳細は不明。炉：住居址中央やや南寄りの位置に地床炉



	深さ(cm)
P1	21
P2	22
P3	15
P4	32
P5	5
P6	3
P7	12

図22　9号住居址実測図

が一個検出されている。40～30cm程の楕円形を呈し、掘りこみは5cm程と浅い。土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

13号住居址　(図23)

検出状況：1区南西端で検出された住居址で西側⅓程が調査区外となる。形状・規模：長軸5.30m、短軸4.80mのやや楕円に近い円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。壁高は東側12cm・南側12cm・北側13cmで確認面からの掘りこみは平均12cm程である。柱穴：P1～P9が検出されている。P1～P4を主柱穴と考えたが、やや南側に片より、配置も不整形な点疑問が残る。P7～P9は支柱穴と考えられるがP5・P6は性格不明である。炉は検出されていない。覆土内より甕（56）が出土している。

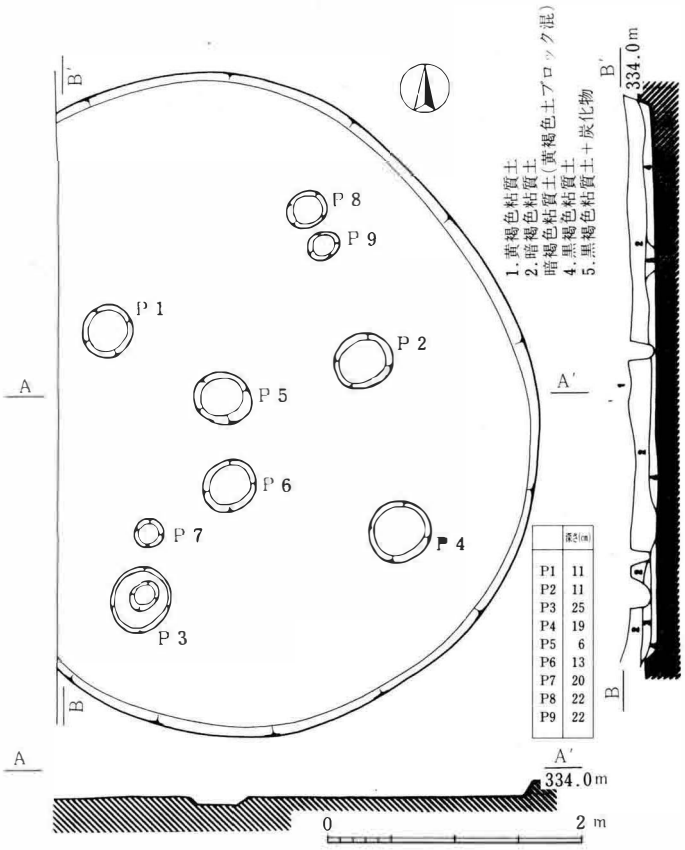


図23　13号住居址実測図

14号住居址　(図24)

検出状況：1区南西端にて検出された住居址で東側⅓程が調査区外となる。形状・規模：径5.10mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものだが、住居址中央付近を中心にやや固く締まった部分も認められた。壁高は西側8cm・南側19cm・北側13cmで、確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：P1～P8が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P3で、柱穴配置は一辺2.50m程の方形プランが予想される。P5～P8はそれぞれ主柱穴間に二個一対づつ配置された支柱穴と考えられる。東側は不明だが、あるいは主柱穴間に同心円状に配置されていた可能性も考えられる。P2は

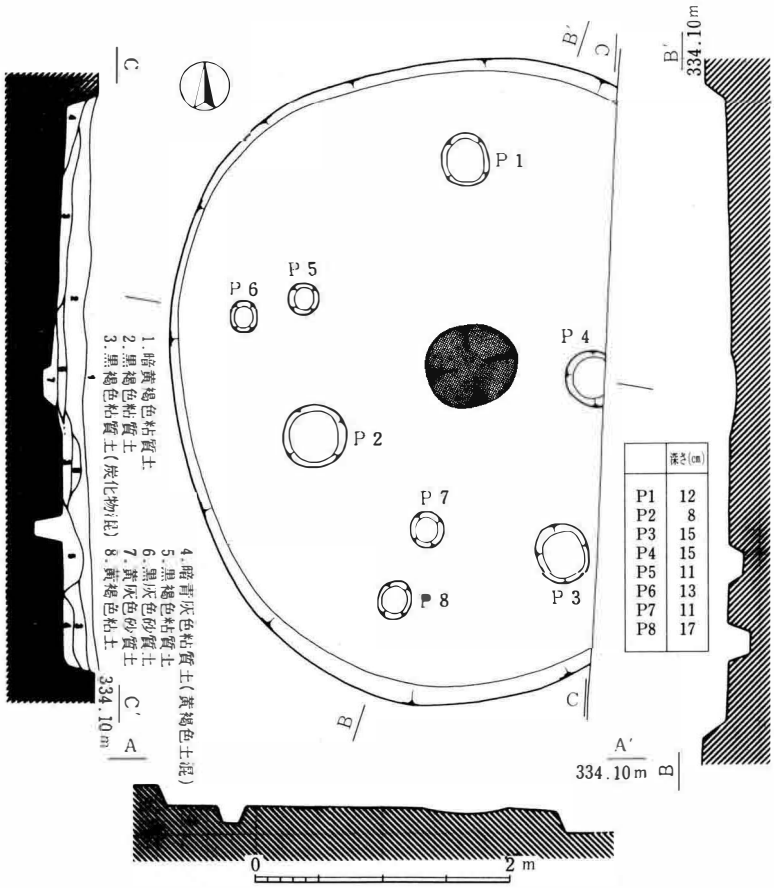


図24　14号住居址実測図

掘りこみ規模も浅く主柱穴とは考えられないがその性格は不明である。炉：住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。75×60cmの楕円形を呈し、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物、焼土の堆積が認められた。覆土内から土器小破片が出土しているが図示しうるものはない。

15号住居址　（図25）

検出状況：1区西側で検出された住居址で東側は⅓程が調査区外となり、また住居址中央部を8号溝址に切られる。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。住居址北側の壁際に長さ2.50m、幅0.90mの浅い落ち込みが認められたが、何らかの施設であるのかまたは攪乱であるのか明らかにはしえなかった。確認面からの掘りこみは浅く壁高は平均5cm程である。柱穴：P1・P2が検出されたのみである。共に掘りこみは浅く性格不明である。その他本住居に直接関連する施設は検出されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内から若干の土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

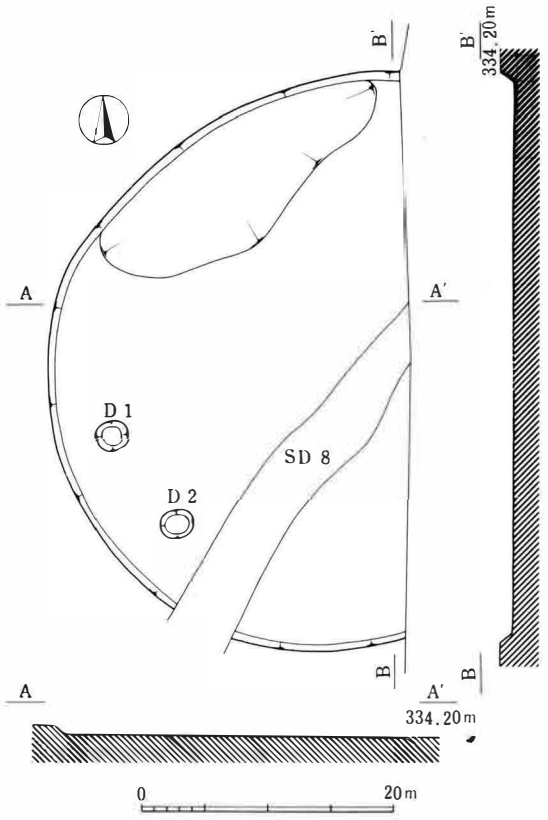


図25　15号住居址実測図

18号住居址　（図26）

検出状況：3区で検出された住居址で、7号住居址のうえに構築されている。東側½程が調査区外となる。形状・規模：長軸5.0m、短軸4.30m程の楕円形プランが予想される。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的堅緻に締まっていたが貼り床等の施設はなされていない。壁高は西壁21cm・南壁12cm・北壁10cmを測る。覆土は4層が認められるが基本的にはレンズ状の自然堆積ととらえられる。柱穴：P1～P10が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P3で、柱穴配置は6本同心円状が予想される。P5は支柱穴と考えられる。P9は内部に焼土の堆積が確認されているが性格は不明である。P10は位置的には炉の可能性が考えられるが焼土・炭化物等確認されていない。覆土内より壷・鉢・坏（83～86）が出土している。

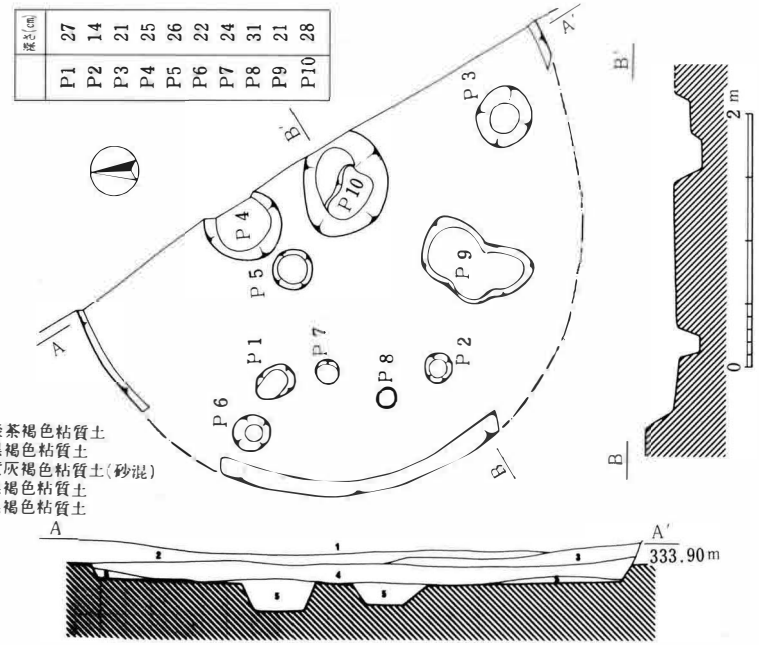


図26　18号住居址実測図

19号住居址　（図27）

検出状況：１区西側にて検出された住居址で、東側⅓程が調査区外となり南半を２号溝址に切られる。形状・規模：径5.90mの円形プランを呈すると思われ、やや大型の住居址である。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。貼り床・周溝など特別の施設は検出されていない。壁高は西壁20cm・南壁13cm・北壁23cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ９が検出されているが、主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ５である。主柱穴配置は８本の同心円状が予想され、柱穴間の距離は平均1.50m程である。Ｐ７～Ｐ９は支柱穴と考えられるもので、特にＰ８・Ｐ９の位置から主柱穴間内部に方形に支柱が配される可能性も考えられる。また本住居址では炉はおそらく調査区外となって検出されていないが、Ｐ６の存在を考慮するならば、４号住居址同様炉の周囲にさらに柱穴が配されていた可能性も考えられよう。覆土内より壷（57）・甕（58）・坏（59）が出土している。

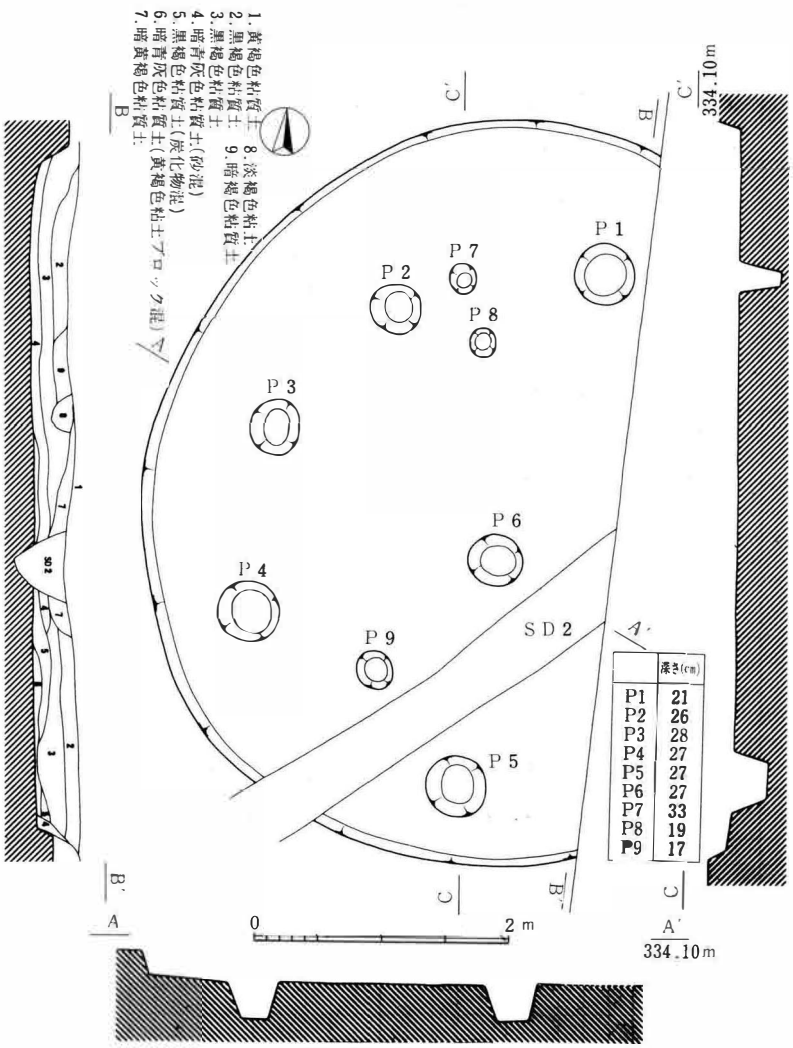


図27　19号住居址実測図

20号住居址　（図28・29）

検出状況：２区中央付近にて検出された住居址で、北東隅は一部調査区外となりまた攪乱を受ける。Ｂ区南半で検出されてＩ期の住居址の中では41号住居址とともにもっとも西側に位置するもので、南側集落の西端となる可能性もある。形状・規模：径5.50mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は壁際を除いて全体に堅緻に締まっており比較的良好な状況であった。ただし貼り床等の特別な施設は認められない。壁高は東側43cm・西側47cm・南側36cm・北側52cmで確認面からの掘りこみは平均42cm前後と非常に深い。壁面は直に近く掘りこまれていたが、南側はやや不明瞭であった。柱穴：Ｐ１～Ｐ７が検出されている。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ６で主柱穴配置は６本の同心円状である。また各柱穴間の距離は平均1.80m程である。柱穴はいずれも径25cmと小さいが、掘りこみは30cm前後でしっかりしたものであった。Ｐ７は支柱と考えたが、あるいは炉に伴う何らかの施設かもしれない。炉：住居址中央やや南西よりの位置に、切りあった二つの炉が検出された。切りあい関係からは北側の炉のほうが新しい。ともに地床炉で深さは南側32cm・北側36cmとかなり深く、断面船底型を呈する。内部には炭化物と焼土の厚い堆積が確認されている。遺物出土状況：本住居址は焼失住居であり、床面直上と覆土上層からきわめて多量の土器が良好な状態で出土している。住居址の覆土は基本的には第２～５層の４層ととらえることができる。第４層は粘性の強い黒褐色粘質土で、同層下半には多量の炭化材・炭化物を含み、

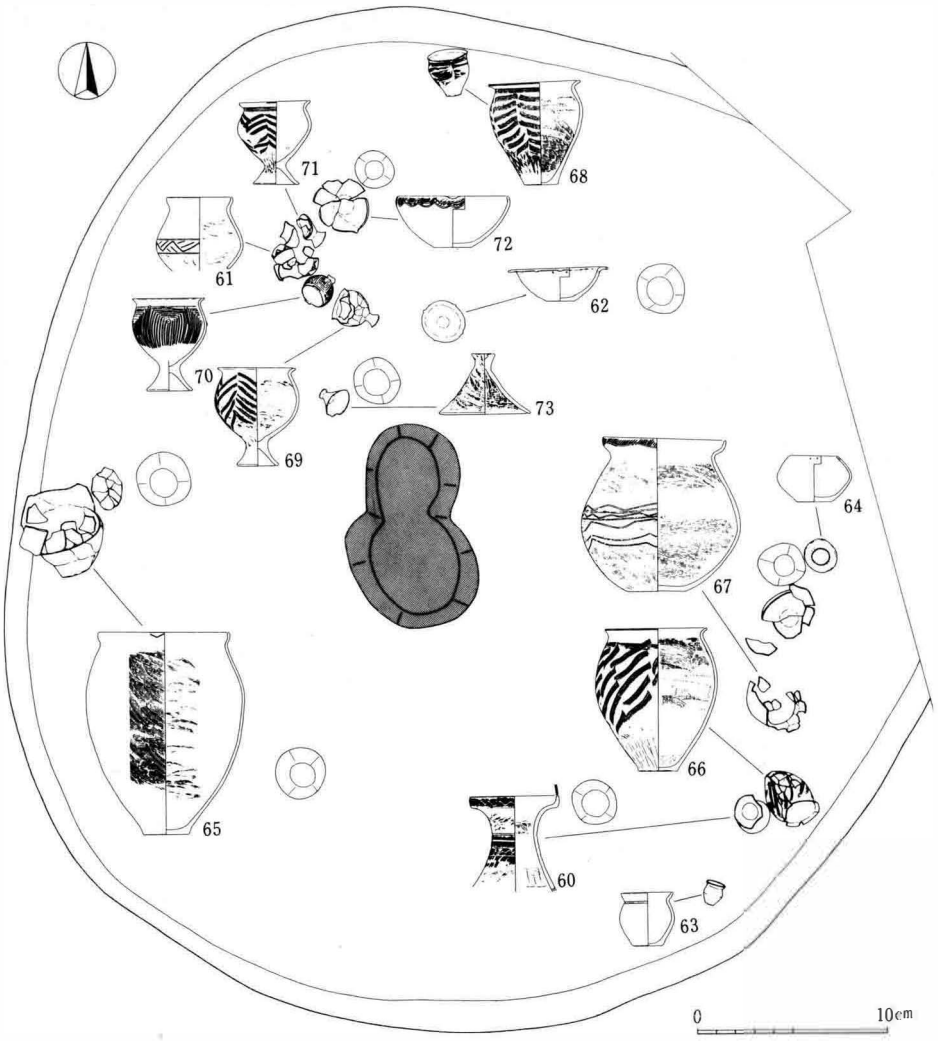


図28　20号住居址土器出土状況実測図

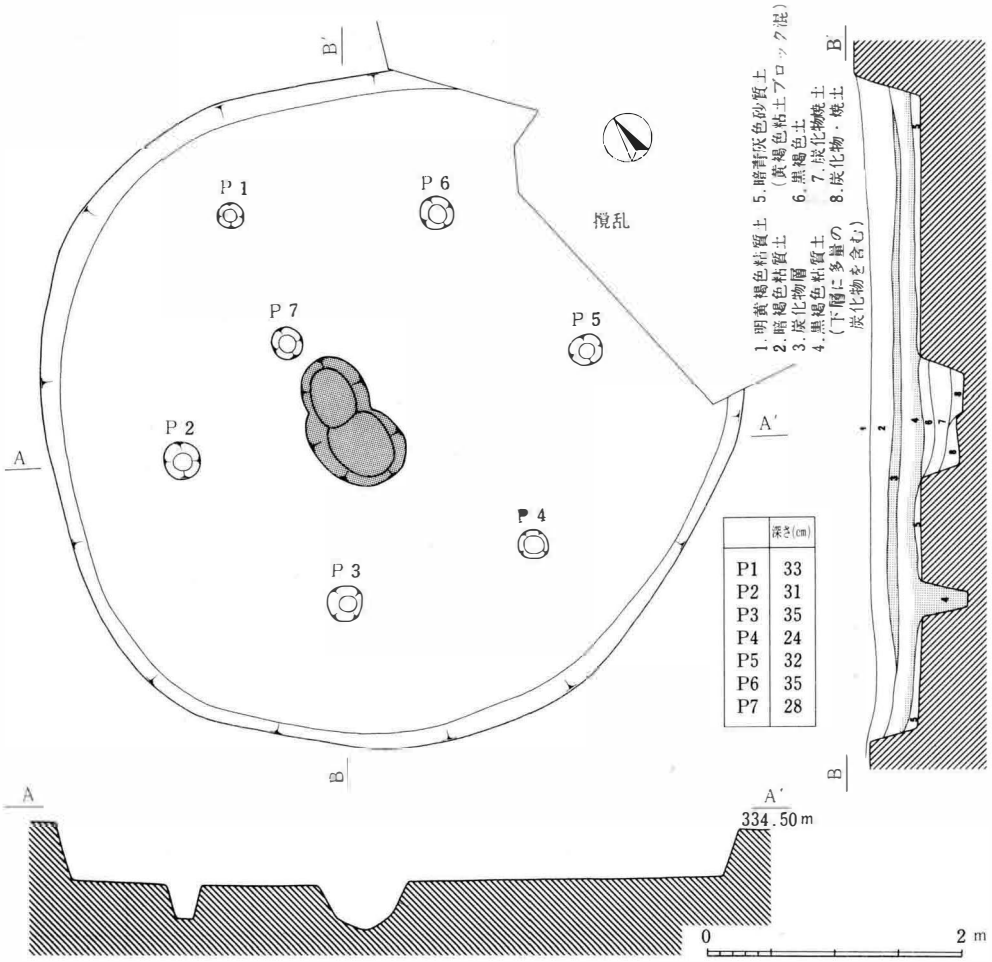
床面直上として扱った土器も第5層に接した4層下半より出土したものである。4層上面には第3層とした薄い炭化物層が確認されており、上層出土として扱った土器群はこの層より出土している。土器の出土状況は床面直上のものと比べて比較的細かく破砕されている。住居址の埋没過程のある時点で火を焚き土器を破砕して投棄したような何らかの祭祀行為に伴うものである可能性も考えられる。床面直上より出土した土器は、土圧によって押し潰されたものが多いが比較的原形をとどめた状況で出土している。出土位置は大きく北西と南東の壁よりの地点に二分できる。出土器種の構成を比較してみると、前者は広口壷1・甕2・台付甕2・甕用蓋1・片口鉢1であり、後者は壷1・無形壷1・短頸壷1・甕2である。炉の周囲に近い北西側に煮沸用の器種が集中する点は、住居址内の空間利用を推察するうえで示唆的なあり方を示している。床面直上からは壷・甕（60・61・63・64）・甕（65～71）・坏（62）・片口鉢（72）・蓋（73）が、上層からは壷（74・75・81・82）・甕（76・80）・蓋（78）・片口（77）・高坏（79）が出土している。また覆土内からではあるが、指輪状の石製品（51）が出土している。

27号住居址　（図30・31）

検出状況：3区住居址集中区中央付近にて検出されたもので、北側¼程を23号下層住居址に切られる。20号住居址同様焼失住居であるが、B区北半住居址群中で焼失住居は本住居址のみである。形状・規模：径4.30mの円

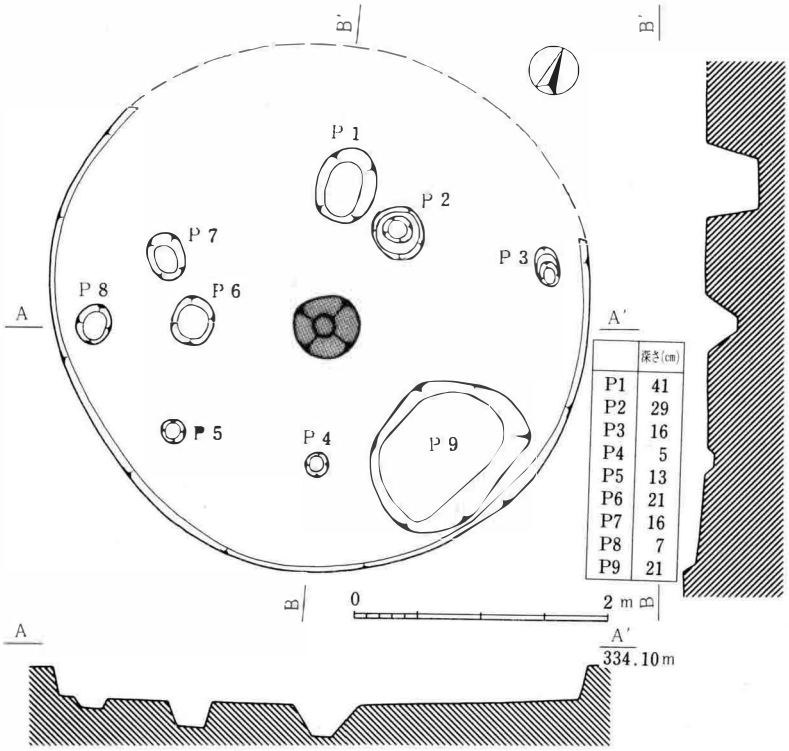
形プランである。

床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は全体に低く確認面からの掘りこみは平均10cm前後である。柱穴はＰ１～Ｐ８が検出されている。比較的小型の住居址であるので、主柱穴配置は４本方形か６本の同心円状が予想されるが、検出された柱穴の位置はいずれも不規則で、主柱穴配置を明確に把握しえなかった。Ｐ１～Ｐ３のあるものは23号下層住居址に伴うものである可能性もある。Ｐ９は1.30×1.00m、深さ28cm程の不整方形を呈する土壙状の落ち込みであるが際立った遺物の出土もなく性格は不明である。遺物出土状況：前述のごとく焼失住居であり、多量の炭化材と土器が出土している。炭化材は切り合いのない南側の壁際を中心に検出され、また土器は南東壁よりのところに集中箇所が認められる。床面直上より壷（91～102）・甕（103～106）・台付甕（107～114）・蓋（115・116）・底部穿孔鉢（117）・坏（118～120）が出土している。



	深さ(cm)
P1	33
P2	31
P3	35
P4	24
P5	32
P6	35
P7	28

図29　20号住居址実測図



	深さ(cm)
P1	41
P2	29
P3	16
P4	5
P5	13
P6	21
P7	16
P8	7
P9	21

図30　27号住居址実測図

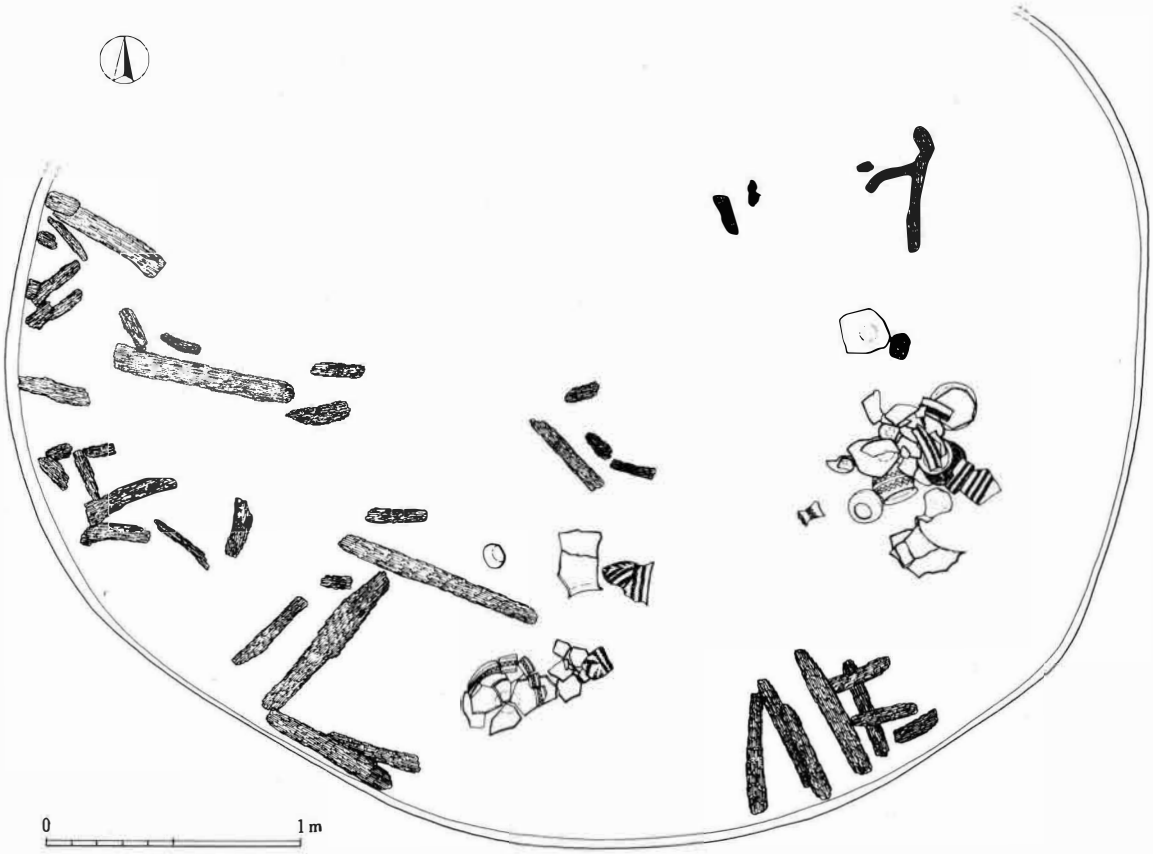
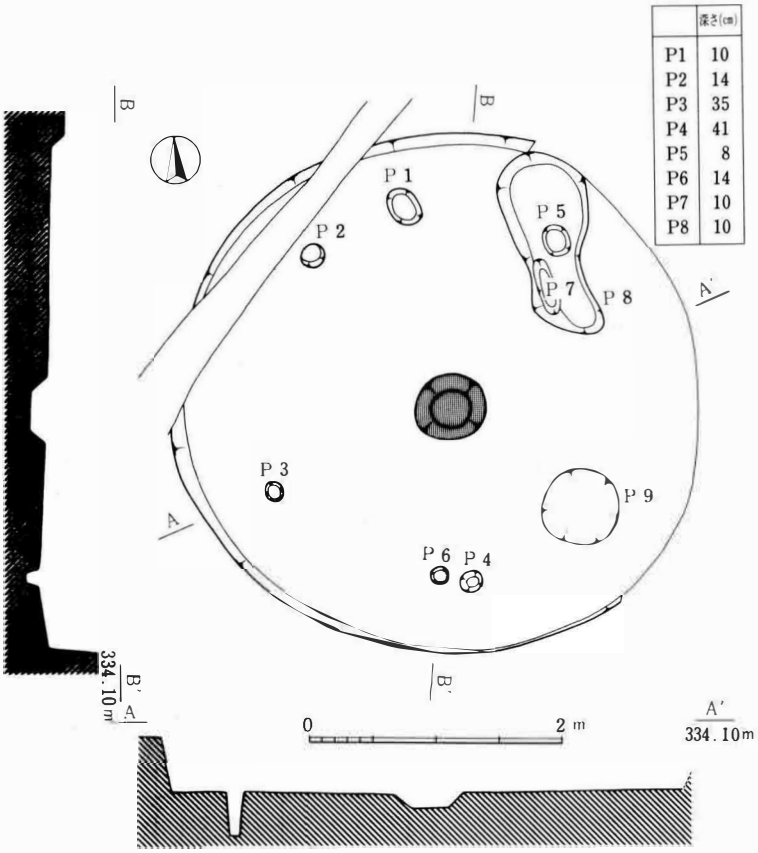


図31　27号住居址炭化材・遺物出土状況実測図

32号住居址　（図32）

検出状況：３区住居址集中区の中央付近に位置し、25号・35号住居址の下に検出されたものである。北東隅を溝址に切られる。形状・規模：径4.10m程の円形プランを呈する。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが、壁際は軟弱である。壁高は西壁39cm・南壁６cm・北壁22cmで確認面からの掘りこみは平均20cm前後である。柱穴：Ｐ１～Ｐ８が検出されているが、Ｐ１～Ｐ５が主柱穴の可能性が高くＰ６は支柱と考えられる。主柱穴配置は６本の同心円状が予想される。Ｐ８は深さ10cm程の不整形な落ち込みであるが本住居に伴うものか不明である。炉は住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。径50cmの円形で深さ10cmである。図示しうる遺物は出土していない。

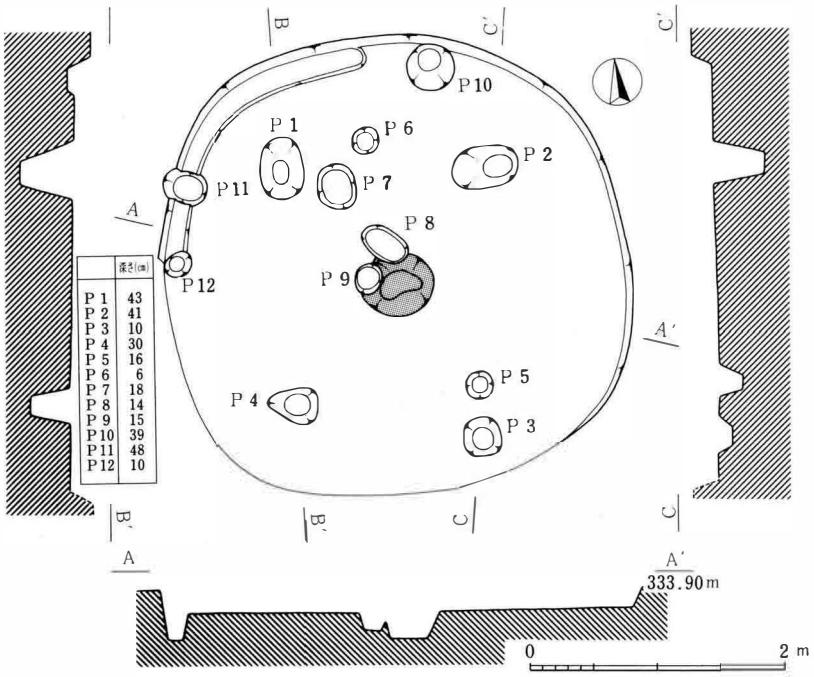


	深さ(cm)
P1	10
P2	14
P3	35
P4	41
P5	8
P6	14
P7	10
P8	10

図32　32号住居址実測図

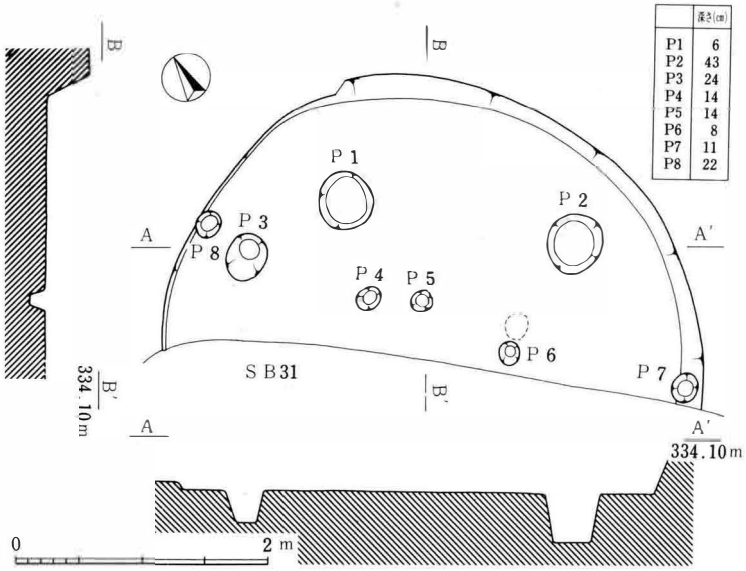
33号住居址　(図33)

検出状況：３区住居址集中区中央付近に位置し、24号・25号住居址の下に検出されたものである。形状・規模：径3.80m程の隅丸方形に近い円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は遺存状況のよい北側で22cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。南西は大半が上の住居址に破壊されかろうじて床面を確認したのみである。柱穴：Ｐ１～Ｐ12が検出されている。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４で主柱穴配置は４本方形プランである。また主柱穴間の距離は平均1.80m程である。Ｐ５・Ｐ６は支柱穴と考えられる。住居址中央付近にあるＰ７～Ｐ９は本住居址に伴うものか不明である。壁際に検出されたＰ10～Ｐ12は壁支柱の可能性もあるが、いずれも北西に片より詳細不明である。北西壁際に壁周溝が確認されている。幅20cm・深さ５cm程のもので、¼円弧のみである。炉：住居址中央付近に地床炉が一個検出されている。径55cmの円形で、深さ20cmである。覆土内より土器破片が出土しているが図示しうるものはない。



	深さ(cm)
P 1	43
P 2	41
P 3	10
P 4	30
P 5	16
P 6	6
P 7	18
P 8	14
P 9	15
P10	39
P11	48
P12	10

図33　33号住居址実測図



	深さ(cm)
P1	6
P2	43
P3	24
P4	14
P5	14
P6	8
P7	11
P8	22

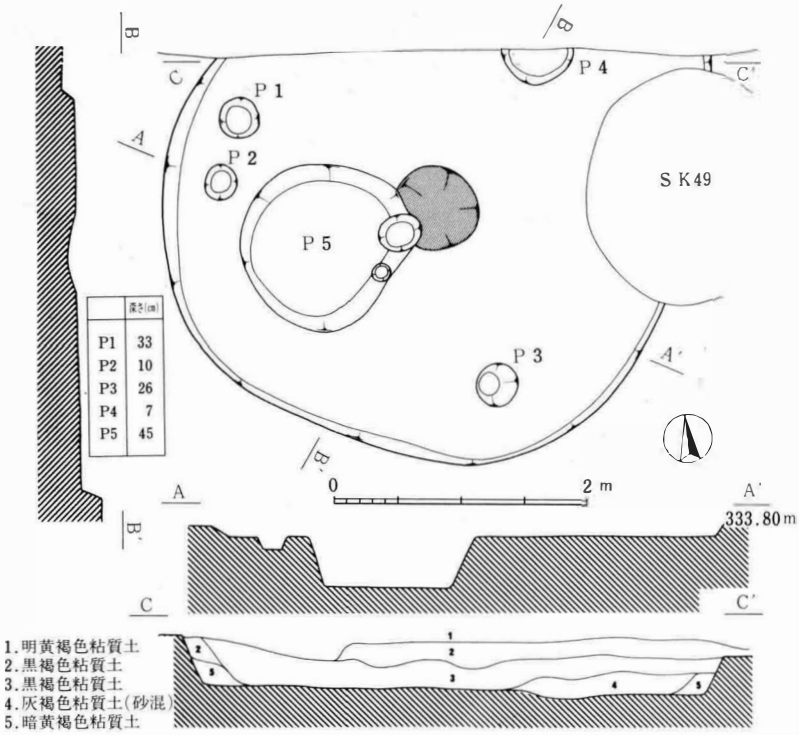
図34　36号住居址実測図

36号住居址　(図34)

検出状況：３区住居址集中区中央付近に位置する。31号・39号住居址に切られ北側½程を検出したにすぎない。形状・規模：径4.30mの円形プランである。床面・壁：床は全体に比較的締まっていたが壁際はやや軟弱なものとなる。壁高は北側で32cmを測り、確認面からの掘りこみは平均30cm程である。西側はほとんどが39号住居址によって破壊されており、かろうじて床面を確認したのみである。柱穴：Ｐ１～Ｐ８が検出されている。主柱穴と考えられるものはＰ１・Ｐ２で主柱穴配置は４本方形から６本の同心円状が予想される。柱穴間の距離は1.80mである。Ｐ４～Ｐ６は支柱穴、Ｐ７・Ｐ８は壁支柱ととらえられようか。炉は検出されていないがＰ６の北側に若干の焼土の堆積が確認されている。覆土内より壷（122・123・124）・甕（121）・壷用蓋（124）が出土している。また（421～426）は39号住に混入していたものであるが、本住居址出土の可能性が高い。

40号住居址　（図35）

検出状況：３区住居址集中区西側で検出されたもので、Ｂ区北半に展開するＩ期集落の西端に位置する。39号住居址の下に検出された。形状・規模：径4.10mのやや不整な円形プランを呈する。床面・壁：床面は全体に固く締まっている。壁高は西壁15cm・南壁15cm・東壁10cmで確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ４が検出されているが明確に主柱穴ととらえられるものはなく、主柱穴配置は不明である。Ｐ５は径1.20m・深さ45cmの不整な円形を呈する土壙状の落ち込みであるが、際立った遺物の出土もなく性格不明である。また本住居に直接伴わぬ可能性が高い。炉：住居址中央やや南寄りの位置に地床炉が一個検出されている。径70cmの円形を呈し、レンズ状に５cm程掘り窪められている。内部には焼土と炭化物の堆積が確認されている。覆土内より土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

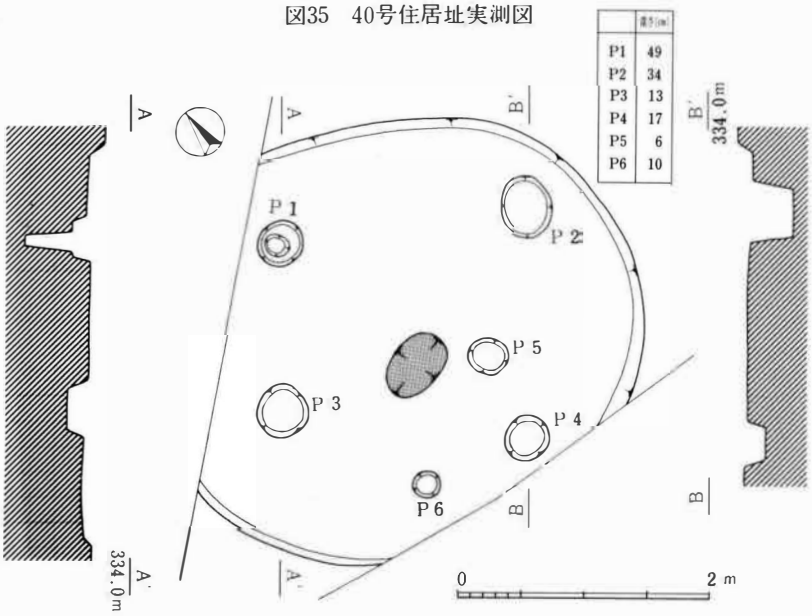


	深さ(cm)
P1	33
P2	10
P3	26
P4	7
P5	45

図35　40号住居址実測図

54号住居址　（図36）

検出状況：５区南端にて検出されたもので、Ｂ区北半に展開するＩ期集落の北端に位置する。南側は若干が調査区外となり、西側はトレンチによって破壊してしまった。形状・規模：長軸4.0m、短軸3.40mの小判型を呈する。床面・壁：床面は住居址中央部分を除いて全体に軟弱で不明瞭なものであった。壁高は北壁14cm・東壁14cmを測る。柱穴：Ｐ１～Ｐ６が検出されている。主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４で、主柱穴配置はやや不整な４本長方形プランを呈する。主柱穴間の距離は長軸2.0m、短軸1.70m程である。Ｐ５・Ｐ６は支柱穴と考えられるが、Ｐ５はあるいは炉に伴う何らかの施設に関連する可能性もある。炉：住居址中央南寄りの柱穴間に、地床炉が一個検出されている。40cm×60cmの楕円形を呈し、５cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物と焼土の堆積が確認されている。遺物出土状況：床面より壷（126）・甕（127）が出土している。



	深さ(cm)
P1	49
P2	34
P3	13
P4	17
P5	6
P6	10

図36　54号住居址実測図

23号下層住居址

（図37）

検出状況：３区住居址中央区西側で検出された住居址で、南側は27号住居址を切り東側は28号住居址に切られる。また本住居址調査中に別の遺構の床面が検出され、これを23号上層住居址として扱った。形状・規模：長軸6.40m、短軸4.60mの隅丸方形に近い長楕円形プランである。主軸はＮ－７°－Ｅである。床面・壁：床面は全体に比較的堅緻に締まっていたが、壁際はやや軟弱である。壁高は西壁23cm・北壁12cmを測り検出面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ10が検出されている。主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ４もしくはＰ５であり、主柱穴配置は４本長方形である。柱穴間の距離は長軸3.00m、短軸1.70mである。南壁際に検出されたＰ９・Ｐ10は梯子受け穴等の出入り口施設に関連する可能性が考えられる。Ｐ６～Ｐ８は本住居に直接伴わぬものかもしれない。炉：奥壁側柱穴間中央に地床炉が一個検出されている。径50cm程の不整円形で、５cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には焼土の堆積が確認されている。覆土内から高坏（87）・台付甕（88・90）・甕用蓋（89）が出土している。また床面直上より鉄石英製の管玉が１点出土している。

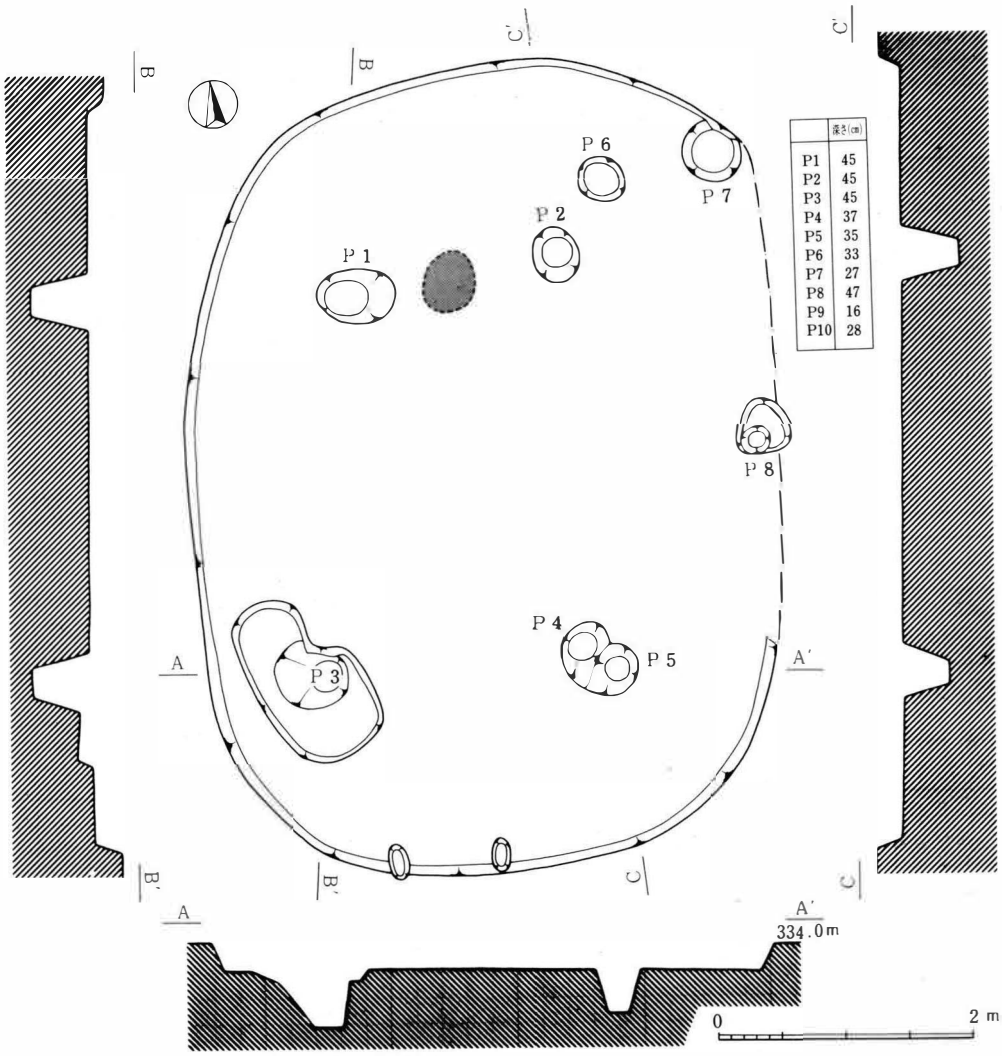


図37　23号下層住居址実測図

10号溝址　（図38）

１区西側にて検出されたもので、半円形の溝址である。幅は平均40cm、深さ20cmを測る。当初住居址の壁周溝とも考えたが、他に何らの施設も検出されず、またこの溝址に直接関係すると思われる土壙・柱穴等も存在せずその性格は不明である。同じ１区中央付近にある11号溝址も同様のものと考えられる。底部に接した状態で短頸壷（128）が出土している。

６号土壙　（図38）

１区北側にて検出されたもので、長軸3.80m・短軸1.50m程の不整楕円形を呈する。二段にわたる掘りこみを

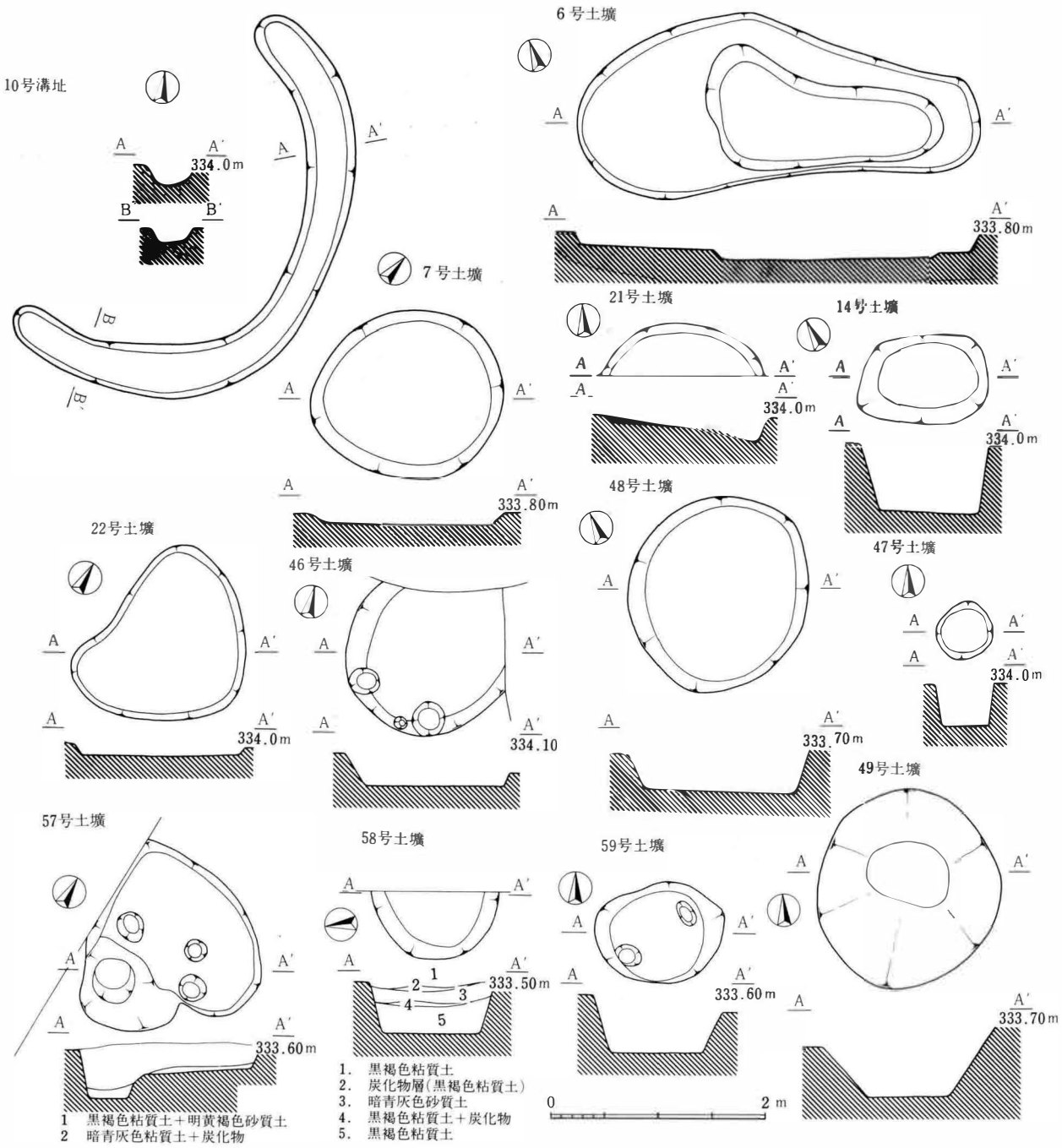


図38　Ⅰ期溝・土壙実測図

有し、最深部では25cmを測る。壙底より若干浮いた状態で甕（129）・台付甕（130・133）・壷（132）・坏（131）が出土している。

7号土壙　（図38）

1区北側にて検出されたもので、6号土壙の北側に位置する。径1.80mの円形を呈し深さ10cm程である。覆土内より甕（134）が出土している。

14号土壙　（図38）

3区住居址中央付近にて検出されたもので、長軸1.20m・短軸0.85m程の不整方形を呈する。確認面からの掘りこみは60cmとやや深く、断面逆台形状を呈する。覆土内より壷（135・137～140）・甕（141）・底部穿孔鉢（136）が出土している。

21号土壙　(図38)

1区中央付近にて検出されたもので、南側は½程が調査区外となる。長軸1.50m程の円形もしくは楕円形プランが予想される。確認面からの掘りこみは8cm程と浅いが西側壁際のみ深く落ち込み22cmを測る。覆土内より碧玉製管玉が2点出土している。出土土器は小破片が若干あるのみで時期の特定は不可能だが、Ⅰ期の墓址である可能性が高い。

22号土壙　(図38)

1区中央付近にて検出されたもので、長軸1.60m程のやや不整な隅丸の三角形状を呈する。確認面からの掘りこみは浅く8cm程である。覆土内より土器破片がかなりの量出土している。

30号土壙　(図38)

1区中央付近にて検出されたもので、径1.50mの円形を呈する。確認面からの掘りこみは浅く8cmである。覆土内から碧玉製管玉が1点出土している。出土土器は若干の小破片があるのみで時期の特定は不可能だが、21号土壙同様Ⅰ期の墓址である可能性が高い。

46号土壙　(図38)

3区住居址集中区中央付近より検出されたもので25号住居址に切られる。短軸1.50m・長軸2.00m程の楕円形プランが予想される。確認面からの掘りこみは30cmとやや深く断面逆台形状を呈する。覆土内より甕(142)・壷(143・144)ならびに磨製石剣の未製品が1点出土している。

47号土壙　(図38)

3区西側で検出されたもので上部を他の溝址に切られる。径50cm程の円形を呈し深さ39cmとやや深い。内部はいわゆる土器溜状を呈しており、完形の壷2点(150・151)・底部穿孔鉢1点(152)をはじめとして、かなりの量の土器破片が出土している。

48号土壙　(図38)

3区西側で検出されたもので、径1.80mの円形を呈し深さ50cmである。覆土内より土器破片がかなり出土している。

49号土壙　(図38)

3区西側で検出されたもので、40号住居址を切っている。径1.90mの円形を呈し深さ90cmである。覆土内より壷(145・147)・坏(146)が出土している。

57号土壙　(図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので、長軸1.60m程の不整形な落ち込みである。二段にわたる掘りこみを有し最深部で深さ45cmを測る。壙底に接した状況で壷(153～155)・甕(156・157)・高坏(158・159)が出土している。

58号土壙　(図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので東側½は調査区外となる。径1.20mの円形を呈し深さ48cmである。覆土は5層よりなり、4層の炭化物層を中心に壷(160・161・163)・甕(162)が出土している。

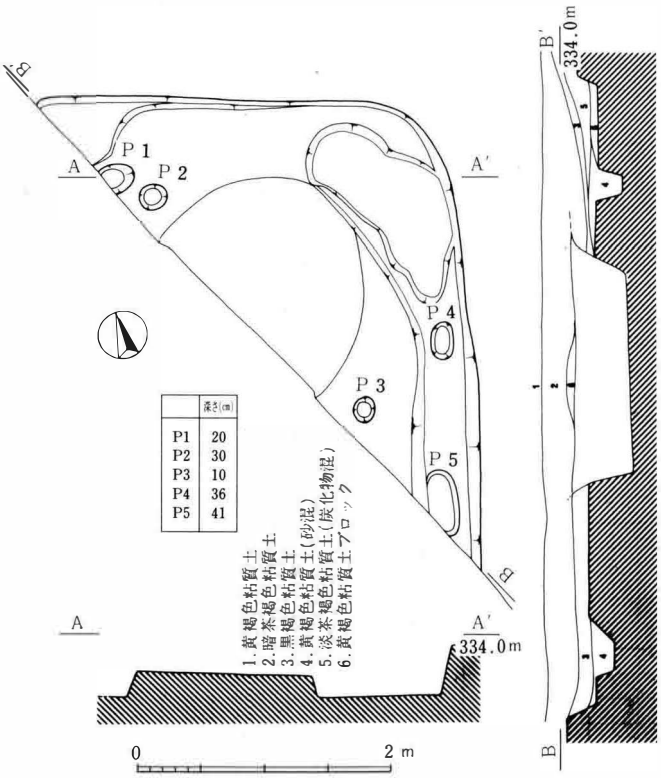
59号土壙　(図38)

5区15号溝址の下で検出されたもので、58号土壙の南に位置する。長軸1.20m・短軸0.90mのやや不整な楕円形を呈し、深さ54cmと深い。内部に深さ10cmの2個のピットを有する。覆土より壷(164)が出土している。

3　II期の遺構

6号住居址　（図39）

検出状況：３区住居址集中区南側で検出されたもので、南西側½は調査区外となる。また住居址中央部分を他の土壙に切られる。形状・規模：短軸3.50m程の隅丸長方形プランが予想される。主軸はＮ－75°－Ｅを測る。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。東壁側は周溝状に一段深く掘り下げられており、幅平均50cm・深さ18cm程である。これは北隅にも認められ、西壁際も一段深く掘り下げられていた可能性がある。柱穴：Ｐ１～Ｐ５が検出されているがいずれも位置的には不規則なもので、主柱穴配置は不明である。壁高は北壁22cm・東壁17cmを測る。覆土より壷（165～168・171～173）・甕（169・170）・底部穿孔鉢（174・175）・甕用蓋（176）・高坏（177～179）・坏（180～183）が出土している。



	深さ(cm)
P1	20
P2	30
P3	10
P4	36
P5	41

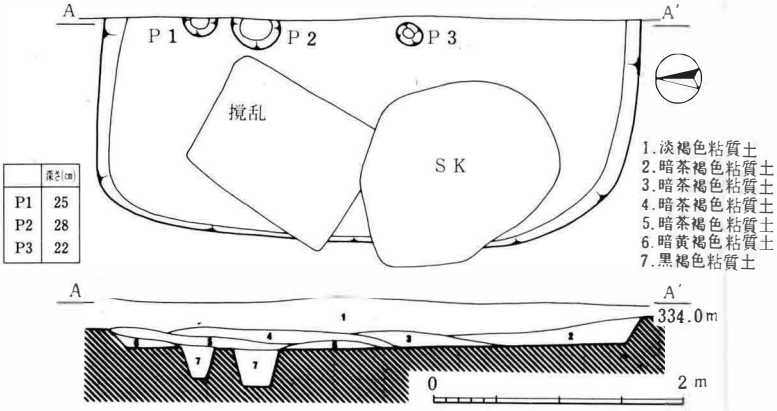
図39　６号住居址実測図

8号住居址　（図40）

検出状況：３区住居址集中区南端にて検出されたもので、東側⅓程で調査区外となる。７号住居址の上に構築されるが、土壙に切られまた一部攪乱を受けるため、調査面積はわずかに過ぎない。形状・規模：長軸4.30m程の隅丸長方形プランが予想され、主軸はほぼ南北方向をとる。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は西壁23cm・南壁19cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ３が検出されている。Ｐ２が主柱穴の一つとなり、主柱穴配置は４本長方形プランが予想されるが詳細は不明である。Ｐ１・Ｐ３は支柱穴であろう。他に本住居に関連する施設は検出されていない。覆土内より壷（184・185）・高坏（186・187）・甕（188・189）が出土している。

22号住居址　（図41）

検出状況：２区中央付近にて検出されたもので、西南を14号溝址に切られまた南側½程が調胴張りの隅丸長方形プランが予想され、主軸はＮ－26°－Ｅを測る。床面・壁：床面は貼り床はなされていないものの非常に堅緻に締まっており良好な状況を呈していた。壁高は北壁25cm・西壁18cm・東壁20cmを測り、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ４



	深さ(cm)
P1	25
P2	28
P3	22

図40　８号住居址実測図

が検出されている。主柱穴はＰ１・Ｐ２で主柱穴配置は４本長方形プランが予想される。柱穴間の距離は短軸で2.20mを測る。Ｐ３は住居址中心軸上に配される支柱穴と考えられる。Ｐ４は壁支柱の可能性もあるが本住居址に直接伴うものか不明である。柱穴間中央やや壁よりの部分に炭化物の堆積が認められたが、炉に伴うと考えられる掘りこみ・焼土などは認められなかった。Ｐ１内より甕（190）が出土している。

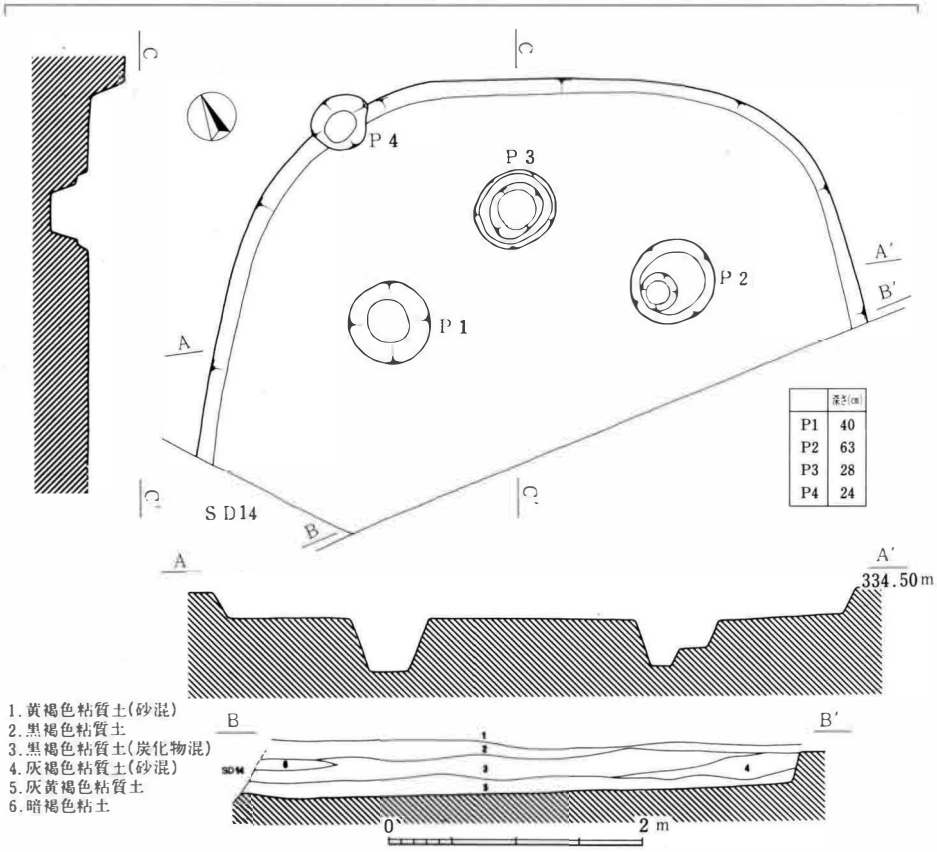


図41　22号住居址実測図

23号上層住居址

（図42）

検出状況：23号下層住居址調査中に床面の存在から確認された住居址で、壁等は破壊してしまった。形状・規模：確認された床面の範囲から、長軸4.40m・短軸3.20m程の隅丸長方形プランが予想される。主軸はＮ－３°－Ｅを測る。床面・壁：床面は貼り床はなされていないものの全体に非常に堅緻で良好な状況であった。柱穴：Ｐ１～Ｐ４が検出されている。主柱穴にはＰ１～Ｐ３が考えられる。４本長方形配列が予想されるが奥壁側の１本は検出されなかった。柱穴間の距離は長軸2.30m・短軸1.0m程である。Ｐ４は住居址中心軸上に配される支柱穴と考えられる。炉は奥壁側柱穴間やや壁よりの位置に検出されている。50×40cmの楕円形を呈する地床炉で、５cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物・焼土の堆積が確認されている。覆土より甕（191～193）・台付甕（194・195）が出土している。

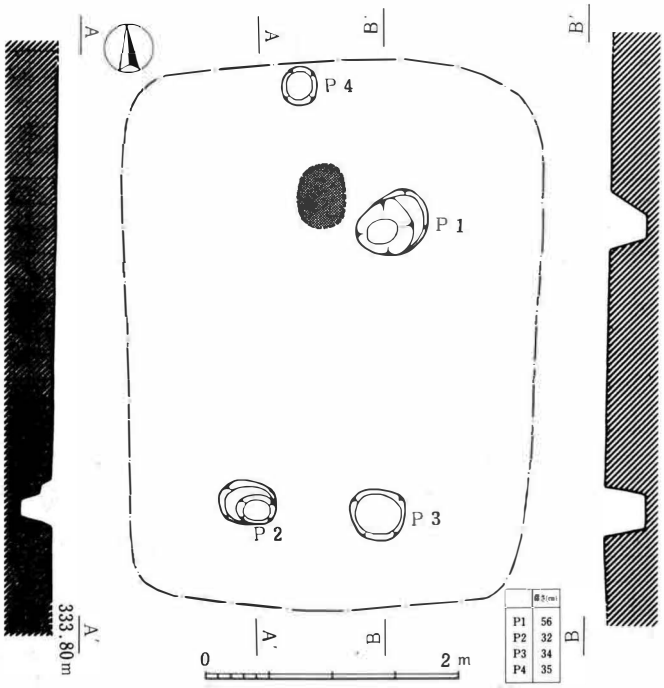
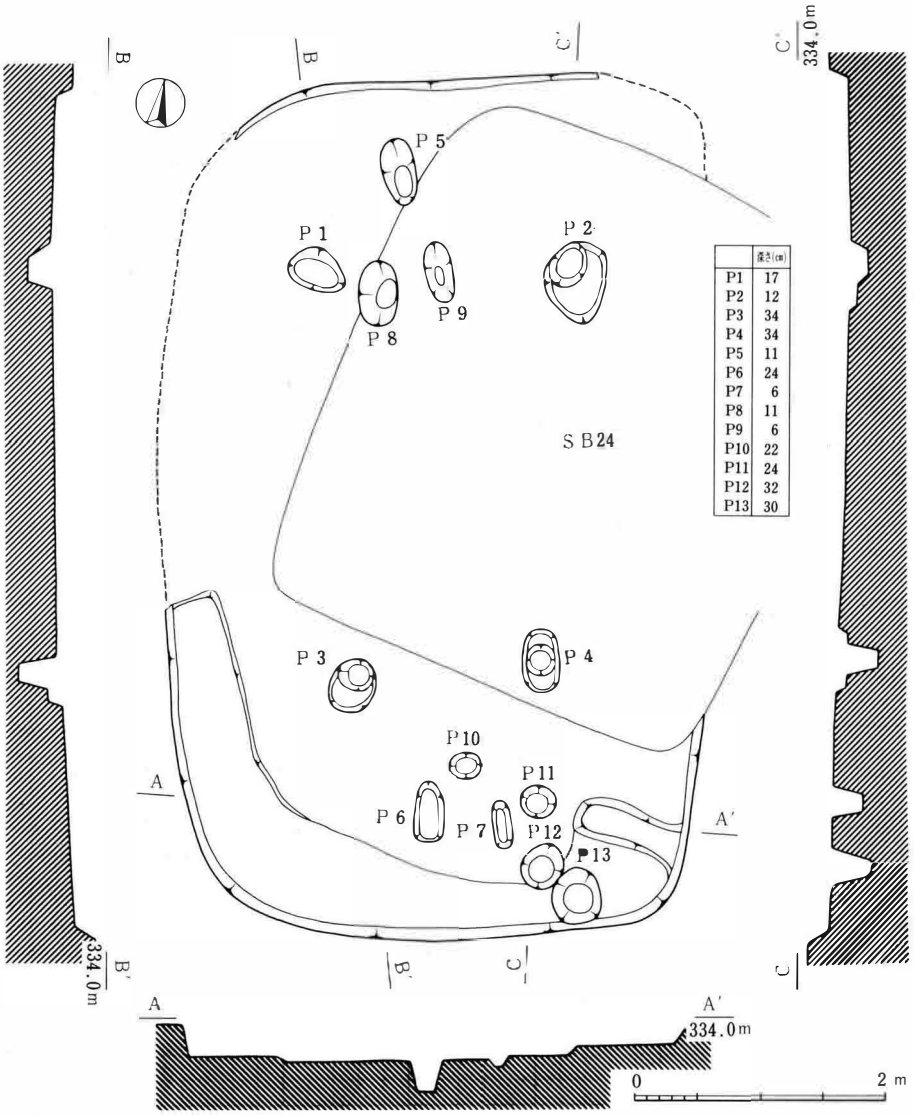


図42　23号上層住居址実測図

25号住居址　（図43）

検出状況：３区住居址集中区中央付近で検出されたものである。32・33号住居址のうえに構築されたものであるが、北側は大半が24号住居

址に切られる。形状・規模：長軸6.80m、短軸4.30mの隅丸長方形プランでやや大型である。主軸はN－11°－Wを測る。床面・壁：床面は全体に比較的堅緻に締まっていた。壁高は東壁18cm・西壁18cm・南壁16cm・北壁9cmである。西壁南側から南壁にかけては壁際の床面が5cm程の高まりをもつ部分が検出されているが、明確なベッド状遺構とはとらえられない。柱穴：P1～P13が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1～P4で柱穴配置は4本長方形プランで、柱穴間の距離は長軸3.15m、短軸2.0m前後である。P5・P10は住居址中心軸上に配される支柱穴と考えられる。P6・P7は出入り口施設に関連するもので梯子受け穴の可能性も考えられる。P8・P9・P11～P13は本住居に直接伴うものか否か不明であるが、P8・P9は支柱穴とも考えれらる。炉等その他の施設は検出されていない。覆土内より甕（196・197）が出土している。



	深さ(cm)
P1	17
P2	12
P3	34
P4	34
P5	11
P6	24
P7	6
P8	11
P9	6
P10	22
P11	24
P12	32
P13	30

図43　25号住居址実測図

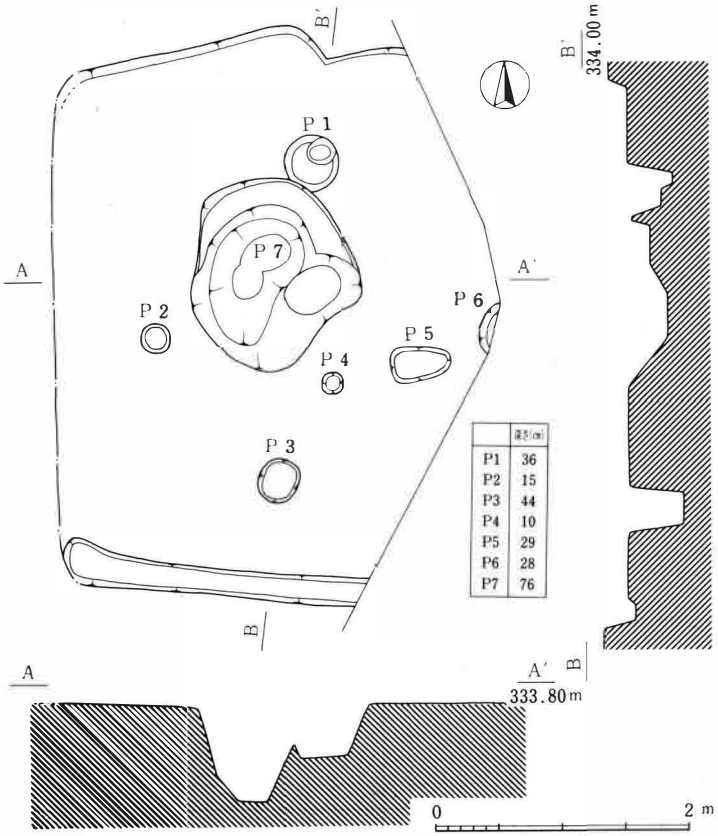
28号住居址　（図44）

検出状況：3区住居址集中区東端にて検出されたもので、東側は調査区外となり西側は23号住居址調査の際に一部破壊してしまった。形状・規模：一辺4.40m程の不整な方形を呈するが、あるいは東側は他遺構が切りあっている可能性もある。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。壁高は北壁14cm・南壁20cmを測る。また南壁際には壁周溝が検出されている。幅は平均20cm・深さ6cm程である。柱穴：P1～P6が検出されている。いずれも位置的には不規則なもので主柱穴配置は不明である。P7は径1.50m程の不整円形を呈する土壙状の落ち込みであるが本住居址に直接伴うものであるか不明である。覆土内より甕（198）・甕用蓋（199）・高坏（200）が出土している。

30号住居址　（図45）

検出状況：3区北端にて検出されたもので、北西½程が調査区外となる。形状・規模：短軸4.00m程の隅丸長

方形プランが予想され主軸はN－75°－Wを測る。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は北壁10cm・東壁11cmで確認面からの掘りこみは平均10cm前後である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴と考えられるのはP1・P2で主柱穴配置は4本長方形プランが予想される。柱穴短軸間の距離は1.70mである。P3～P5は出入り口施設に関係するものである可能性がある。P6・P7はともに土壙状の落ち込みであるが、直接本住居址と関係するか不明である。覆土内よりかなりの土器破片が出土しているが図示しうるものはない。

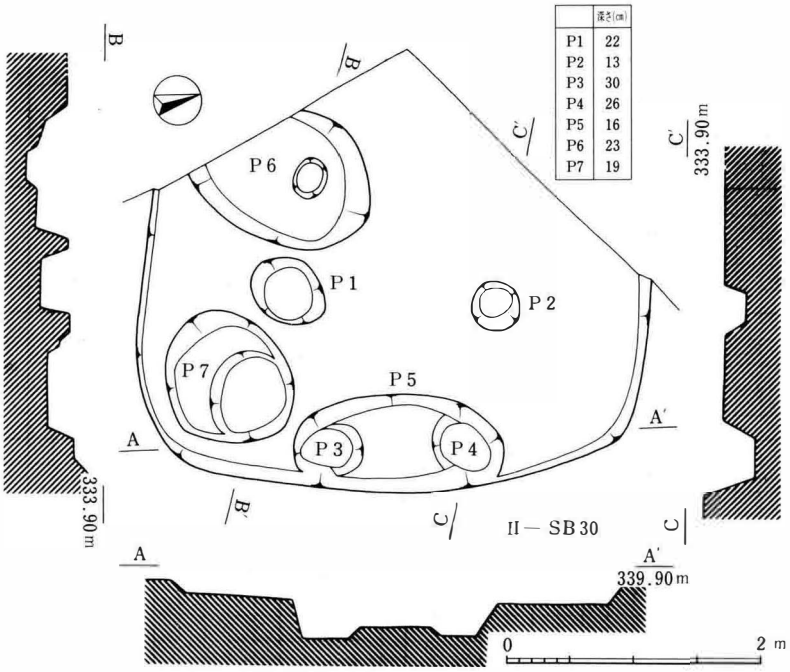


	深さ(cm)
P1	36
P2	15
P3	44
P4	10
P5	29
P6	28
P7	76

図44　28号住居址実測図

39号住居址　（図46）

検出状況：3区住居址集中区西端にて検出されたもので、36・40号住居址、49号土壙の上に構築され、31号住居址に切られる。形状・規模：長軸4.80mの隅丸長方形プランが予想される。主軸はN－42°－Eを測る。床面・壁：床面は住居址中央部を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は北壁14cm・南壁18cmを測り確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴：P1～P7が検出されている。主柱穴ととらえられるのはP1・P2で主柱穴配置は4本長方形が予想される。長軸柱穴間の距離は3.20mである。P4・P7は支柱穴の可能性がある。住居址中央やや南寄りの位置に炭化物の堆積が確認されたが焼土は認められず炉とは考えられない。覆土内より甕（201・202）・甕用蓋（203）が出土している。



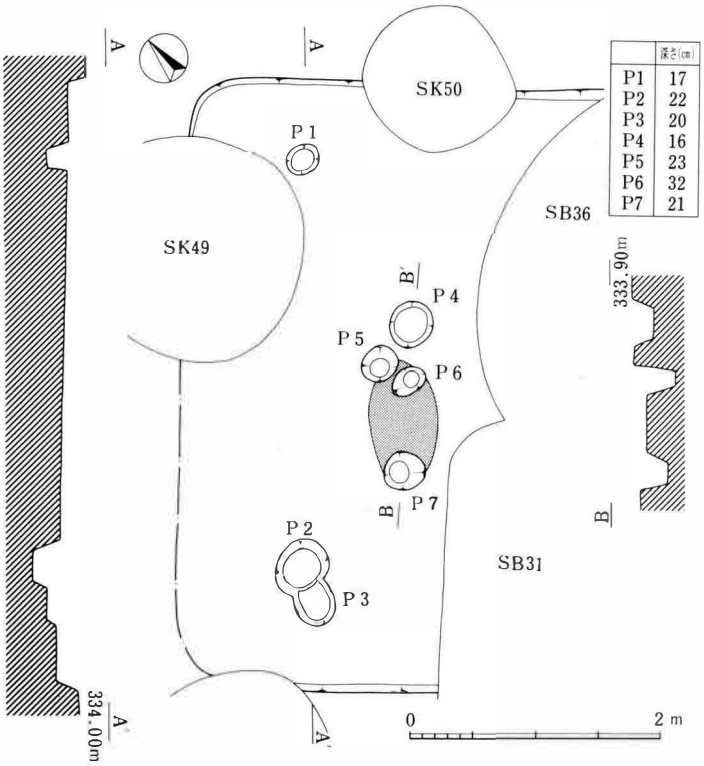
	深さ(cm)
P1	22
P2	13
P3	30
P4	26
P5	16
P6	23
P7	19

図45　30号住居址実測図

42号住居址　（図47）

検出状況：2区中央付近で検出された住居址で、南側は14号溝址に切られ、西側は調査区外となる。形状・規模：隅丸方形または隅丸長方形プランが予想されるが½程を調査したにすぎず、正確な規模は不明といわざるを得ない。主軸はN－33°－

E。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。壁高は北壁49cm・東壁20cmを測る。東側壁よりのところに幅75cm、深さ20cm程の溝が検出されているが本住居址には直接関係しない。柱穴：P１～P８が検出されているが位置的にはいずれも不規則で主柱穴配置は不明である。住居址中央付近に炭化物の堆積が確認されているが炉と考えられるものではなかった。覆土内より壷（210）・甕（212）・高坏（211）が出土している。



	深さ(cm)
P1	17
P2	22
P3	20
P4	16
P5	23
P6	32
P7	21

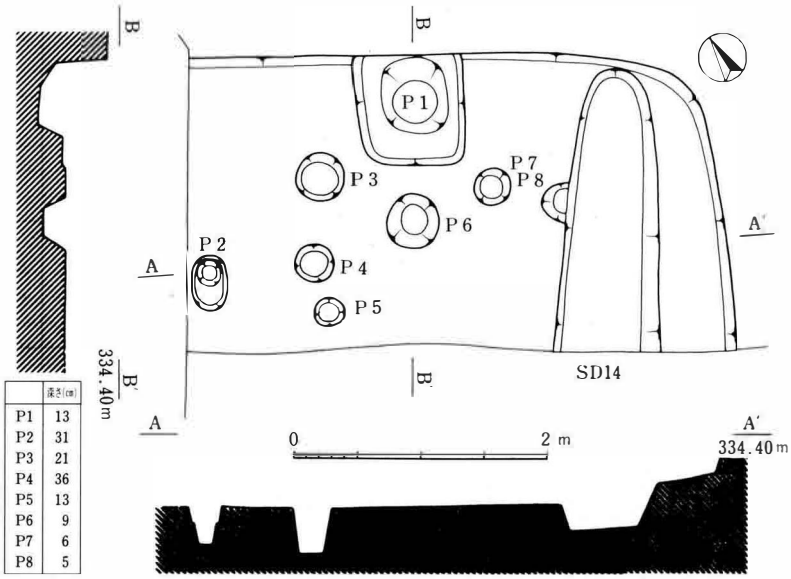
図46　39号住居址実測図

47号住居址　（図48）

検出状況：４区北側で検出されたもので北西側⅓程が調査区外となる。形状・規模：隅丸長方形プランを呈するものと予想され、短軸4.30ｍである。主軸はＮ－38°－Ｗを測る。床面・壁：床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は東壁19cm・西壁11cm・南壁24cmで、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ３が検出されている。主柱穴と考えられるのはＰ１・Ｐ２で、主柱穴配置は４本長方形プランが予想される。短軸柱穴間の距離は1.20ｍである。Ｐ３は長径1.50ｍ程の長楕円形の落ち込みであるが二段にわたる掘りこみを有する。出入り口施設に関連するピットである可能性が高い。覆土内より台付壷（204）・甕（205）・甕用蓋（206）が出土した。

49号住居址　（図49）

検出状況：４区にて検出された住居址で、南東は⅓程が調査区外となり、また一部に攪乱を受けている。形状・規模：隅丸長方形プランを呈するものと予想され、短軸は5.00ｍとやや大型である。主軸はＮ－40°－Ｗを測る。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが壁際はやや軟弱である。壁高は東壁で19cm・西壁16cm・北壁20cmで確認面からの掘りこみは平均15cm前後である。柱穴：Ｐ１～Ｐ３が検出されている。主柱穴はＰ１・Ｐ２と考えられ、主柱穴配置は４本長方形配置が



	深さ(cm)
P1	13
P2	31
P3	21
P4	36
P5	13
P6	9
P7	6
P8	5

図47　42号住居址実測図

予想される。短軸柱穴間の距離は2.70mである。炉：主柱穴間中央に地床炉が一個検出されている。径50cm程の円形を呈し、5cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部に焼土と炭化物の堆積が確認されている。覆土内より甕用蓋（207）が出土している。

52号住居址　（図50）

検出状況：4区にて検出されたもので、4区の住居址群の中ではもっとも南に位置する。形状・規模：長軸3.00m、短軸2.80mの不整な隅丸方形を呈する。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。壁高は低く、確認面からの掘りこみは平均10cm程である。柱穴は確認されていない。住居址中央やや北寄りのところに長径1.80m程の長楕円形の落ち込みが検出されている。深さ5cm程であるが内部から炭化物と土器片が出土している。覆土内より高坏（208・209）が出土している。

56号住居址　（図51）

検出状況：4区南側で検出された住居址で南側を51号住居址に、北側を49号住居址に切られる。また北東隅は一部攪乱が及んでいる。形状・規模：隅丸長方形プランを呈すると予想され、短軸3.75mで

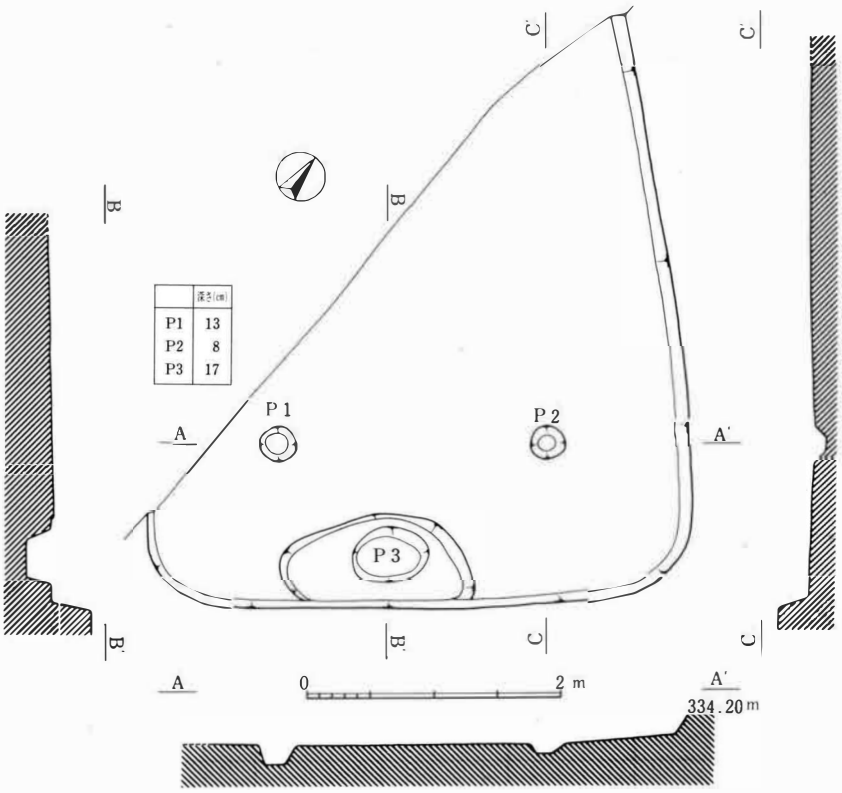


図48　47号住居址実測図

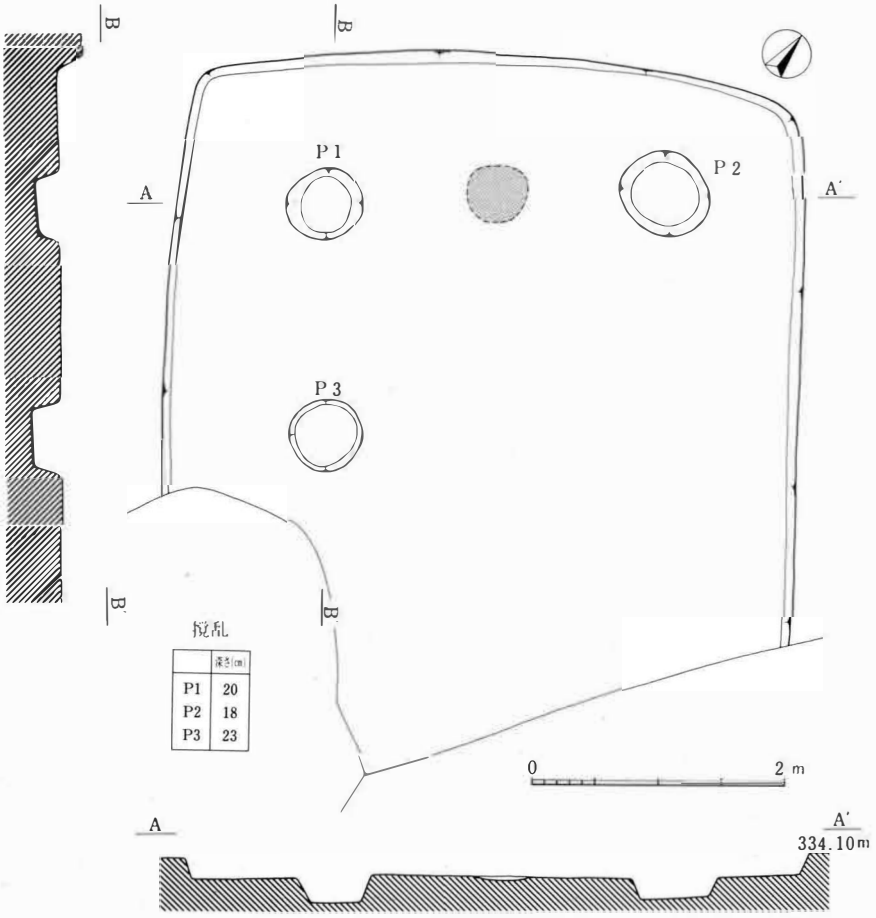


図49　49号住居址実測図

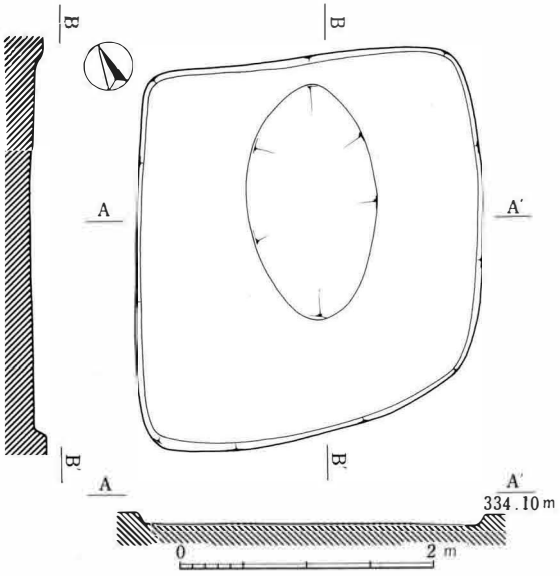


図50　52号住居址実測図

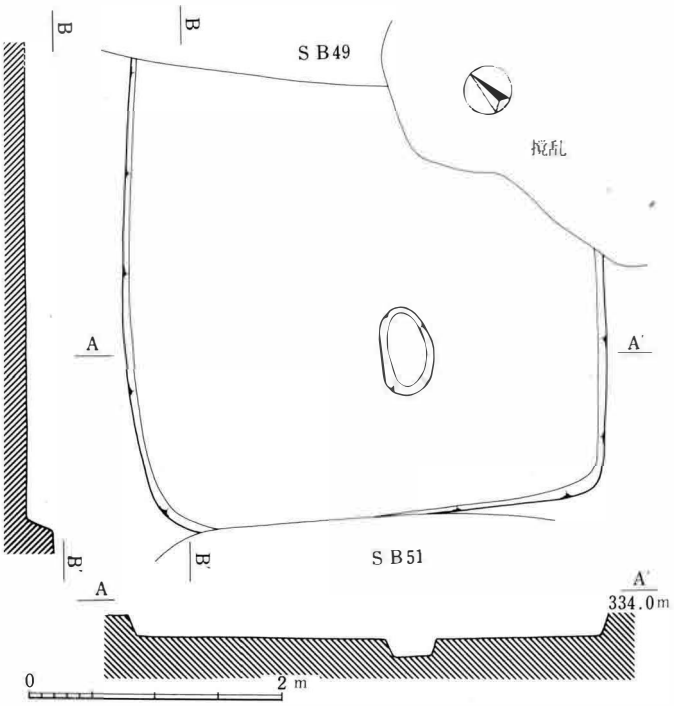


図51　56号住居址実測図

ある。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭である。確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：ピットが一個検出されているのみで柱穴配置等不明である。覆土内より壷（213・215）・甕（214）が出土している。

9号土壙　（図52）

1区東側にて検出されたもので、北側は1号溝址に切られ、東側は若干調査区外となる。二段にわたる掘りこみを有し最深部で深さ43cmを測る。壙底よりかなり浮いた状況で壷（218）が出土している。

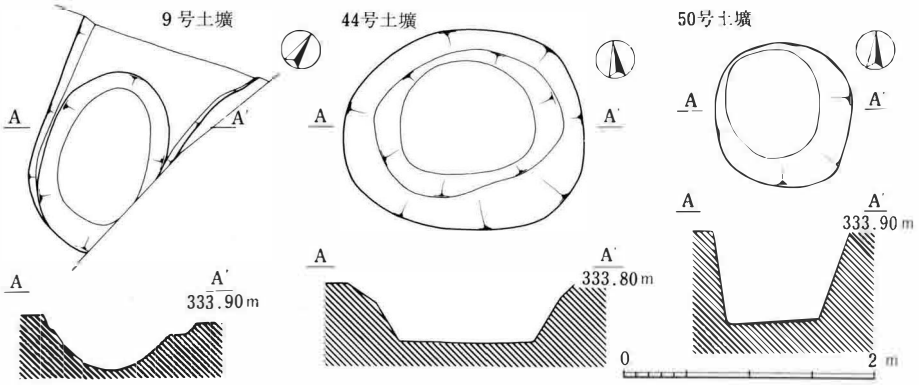


図52　9号・44号・55号土壙実測図

44号土壙　（図52）

3区北東にて検出されたもので、長径1.90m・短径1.60mの楕円形を呈する。深さ50cm程で覆土内より甕（216）・高坏（217）が出土している。

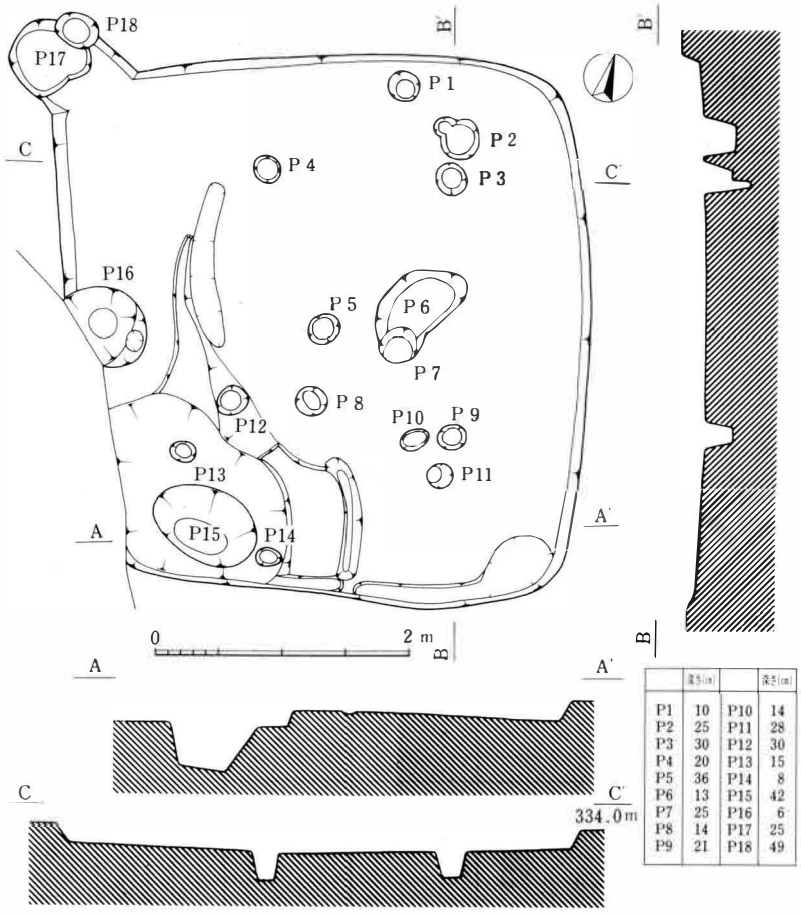
50号土壙　（図52）

3区39号住居址の下に検出されたもので径1.10m程のやや不整な円形を呈し、深さ75cmとやや深い。覆土内より甕（219）が出土している。

4　III期の遺構

5号住居址　（図53）

検出状況：３区住居址集中区中央付近にて検出されたもので、西側は若干が調査区外となる。形状・規模：4.30×4.20mの隅丸長方形プランを呈し主軸はN－17°－Wを測る。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが、壁際は軟弱なものとなる。壁高は北壁11cm・南壁10cm・東壁15cm・西壁14cmで確認面からの掘りこみは、平均10cm前後である。柱穴：Ｐ１～Ｐ18が検出されている。主柱穴はＰ３・Ｐ４・Ｐ９・Ｐ12と考えられ、主柱穴配置はやや不整な４本の方形プランである。Ｐ15・16の周囲の床面は土堤状にやや高くなっており、特にＰ15は何らかの貯蔵穴施設の可能性が考えられるが、きわだった遺物の出土はない。張り出し状に検出されたＰ17・18は本住居址に直接伴うものか否か不明である。覆土内より二重口縁壷（220）・短頸壷（221・222）・小型丸底坩（223）・甕（224～226）・高坏（227）・粗製器台（228）が出土している。

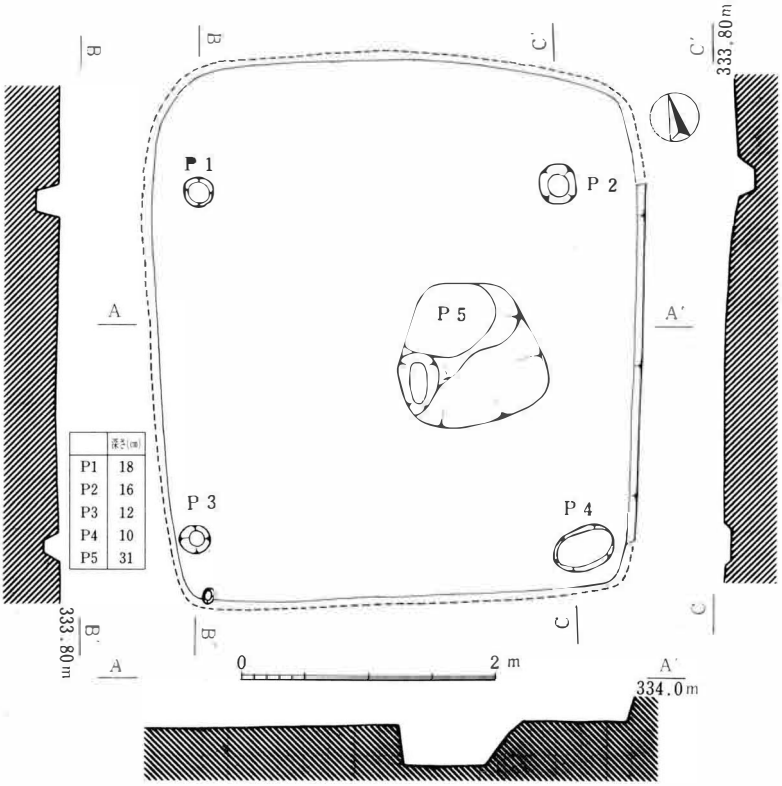


	深さ(cm)		深さ(cm)
P1	10	P10	14
P2	25	P11	28
P3	30	P12	30
P4	20	P13	15
P5	36	P14	8
P6	13	P15	42
P7	25	P16	6
P8	14	P17	25
P9	21	P18	49

図53　５号住居址実測図

24号住居址　（図54）

検出状況：３区住居址集中区中央付近で検出されたもので25・32・33号住居址を切って構築されている。形状・規模：4.30×3.90mの隅丸方形プランを呈し、主軸はN－14°－Eを測る。床面・壁：25号住居址調査中に、床面の存在から新たに検出した住居址であり、床面は全体に非常に堅緻でしっかりしたものであっ



	深さ(cm)
P1	18
P2	16
P3	12
P4	10
P5	31

図54　24号住居址実測図

たが、壁際はやや軟弱である。壁は東壁の一部を確認したのみであるが、壁高24cmを測る。柱穴：主柱穴はＰ１～Ｐ４で４本方形の配列である。柱穴間の距離は2.80mを測る。Ｐ５は径1.20m程の不整な円形を呈する土壙状の落ち込みであるが、本住居に直接伴うものであるか不明である。炉等その他の施設は検出されていない。出土遺物も図示しうるものはない。

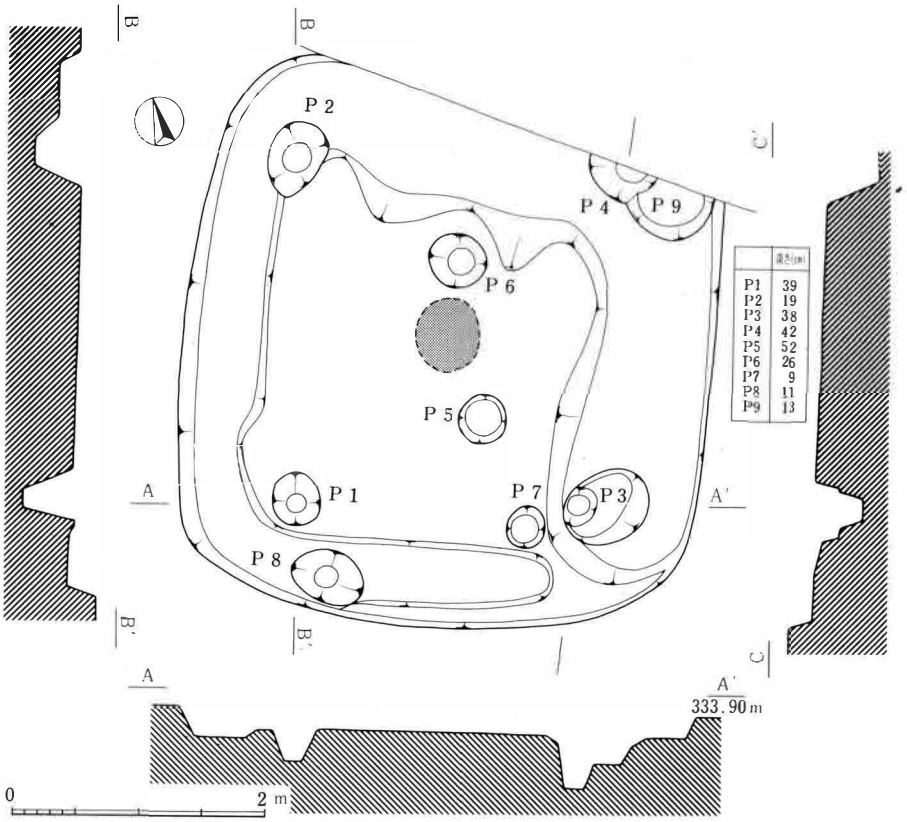


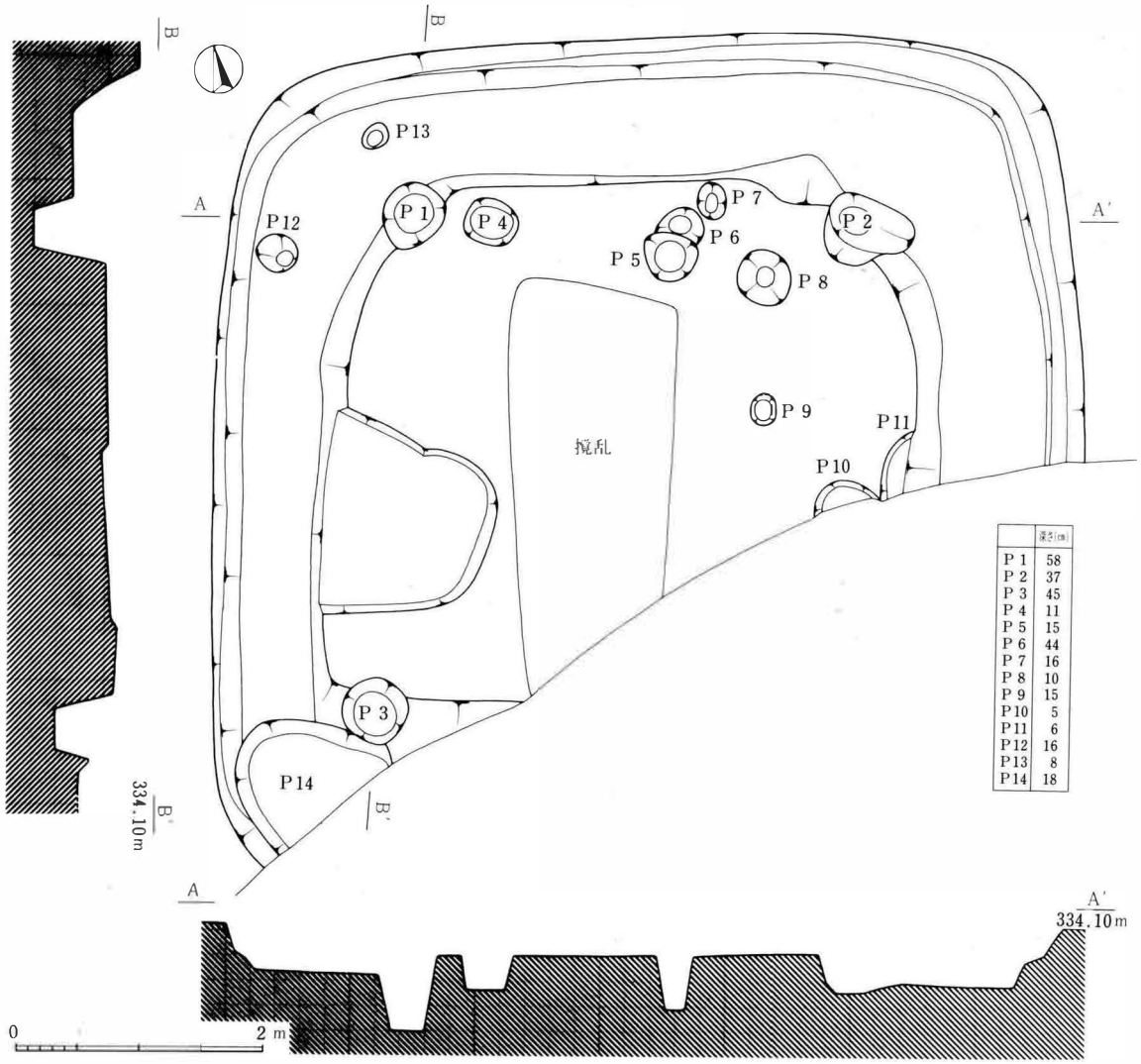
図55　29号住居址実測図

29号住居址　（図55）

検出状況：３区住居址集中区北側で検出されたもので、北側は若干が調査区外となる。形状・規模：4.40×4.20mの隅丸方形プランが予想され主軸はＮ－15°－Ｅを測る。床面・壁：床は住居址中央主柱穴間内のみ堅緻で、壁際は周溝状に平均10cm程一段下がる。壁高は東壁15cm・西壁25cm・南壁22cm・北壁18cmで、確認面からの掘りこみは平均20cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ９が検出されている。主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４で４本方形配列をなし柱穴間の距離は2.70m程である。Ｐ５～Ｐ７は支柱穴と考えられるが、Ｐ５・Ｐ６はあるいは炉に関連する施設の可能性もある。炉：住居址中央に地床炉が一個検出されている。径55cmの円形をなし、５cm程のレンズ状に掘り窪められている。内部には炭化物・焼土の堆積が確認されている。覆土内より直口壷（229）・甕（230）・鉢（231）・器台（232・233）が出土している。

31号住居址　（図56）

検出状況：３区住居址集中区西側にて検出されたもので、36・39号住居址を切って構築されている。また南側¼程が調査区外となり、住居址中央部に攪乱を受ける。形状・規模：一辺6.90m程の隅丸方形プランが予想され主軸はＮ－13°－Ｅを測る。床面・壁：床面は29号住居址同様、住居址中央部分のみ堅緻で壁際は周溝状に平均15～20cm程下がる。壁高は北壁55cm・西壁40cm・東壁50cmで確認面からの掘りこみはかなり深い。柱穴：Ｐ１～Ｐ14が検出されている。主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ３で、主柱穴配置は４本の方形プランが予想される。Ｐ４～Ｐ９・Ｐ11・Ｐ12は支柱穴と考えられる。住居址中央部は攪乱を受けており、炉等の施設は確認されていない。覆土内より二重口縁壷（234・235）・直口壷（236～239）・甕（240～245）・高坏（246～248・254）・底部穿孔鉢（249）・小型丸底坩（251・252）・器台（253）が出土している。

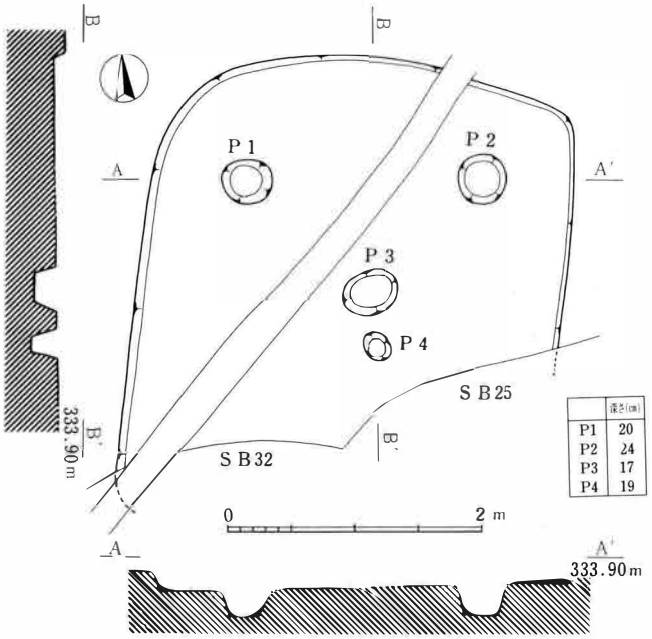


	深さ(cm)
P1	58
P2	37
P3	45
P4	11
P5	15
P6	44
P7	16
P8	10
P9	15
P10	5
P11	6
P12	16
P13	8
P14	18

図56　31号住居址実測図

37号住居址　（図57）

検出状況：３区住居址集中区北側にて検出されたもので、25号・32号住居址の上に構築されたものであるが、これらの住居址の調査中に検出されたもので南側¼程を破壊してしまった。形状・規模：一辺3.50m程の隅丸方形プランが予想され、主軸はほぼ南北方向に取る。床面・壁：床面は全体に比較的固く締まっていたが壁際は軟弱である。壁高は北壁10cm・西壁12cm・東壁８cmで確認面からの掘りこみは平均10cm程である。柱穴：Ｐ１～Ｐ４が検出されている。主柱穴と考えられるのはＰ１・Ｐ２で柱穴間の距離は1.90ｍである。柱穴配置は４本方形が予想される。炉等その他の施設は確認されていない。覆土内より台付甕（255・256）・小型丸底坩（257）・高坏（258）が出土している。

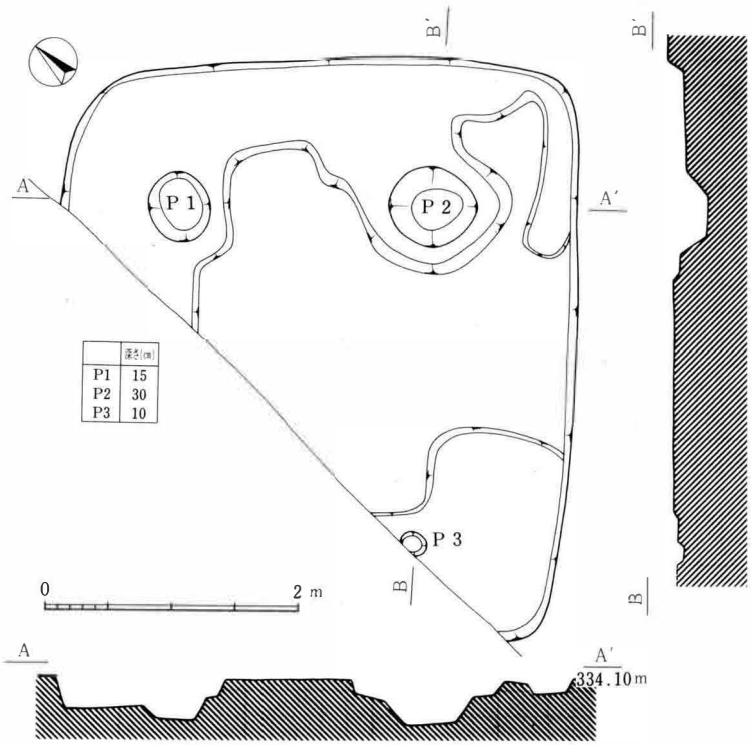


	深さ(cm)
P1	20
P2	24
P3	17
P4	19

図57　37号住居址実測図

48号住居址　（図17）

検出状況：４区にて検出されたもので49号住居址の上に構築されるが、54・55号住居址に切られ、また東側は攪乱を受け形状・規模等は不明である。床面は部分的に堅緻な部分が認められたが全体に軟弱で不明瞭なものである。確認された北壁は10cmを測る。柱穴はピットが２個検出されているが、本遺構に伴うものか不明である。その他の施設は検出されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内より甕（259・260）・台付甕（261）が出土している。



	深さ(cm)
P1	15
P2	30
P3	10

図58　51号住居址実測図

51号住居址　（図58）

検出状況：４区南側で検出されたもので北西側¼は調査区外となる。形状・規模：4.50×4.10mの隅丸方形プランを呈し、主軸はＮ－47°－Ｅを測る。床面・壁：床面は住居址中央部と南壁側の一部が固く締まっており、この部分を取り囲むように壁際は周溝状に10～15cm程下がる。壁高は東壁12cm・南壁15cm・北壁26cmを測る。柱穴：Ｐ１～Ｐ３が検出されておりこれらが主柱穴となると思われる。柱穴配置は４本方形プランが予想され、柱穴間の距離は2.00m程である。出土遺物は図示しうるものはない。

53号住居址　（図16）

検出状況：２区北端にて検出されたもので、東側½が調査区外となる。形状・規模：一辺７m程のやや大型の隅丸方形プランが予想される。床面・壁：床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。確認面からの掘りこみは平均15cm程である。柱穴等本遺構に直接関連すると思われる施設は確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内より台付甕（262）・甕（263・264）・高坏（265）が出土している。

13号溝址　（図17・59・60）

３区住居址集中区南側にて検出されたもので南西から北東へ直線的に伸びる形態を呈する。北側の推定流路本体の形状は、幅3.30m・溝底幅2.20m・深さ0.80mの断面逆台形状をなすが、南側はさらに幅3.50m程の二段にわたる浅いテラス状の平坦面をなしこの部分を含めた確認面での溝幅は約7.00mを測る大溝である。調査概要の項でも述べた

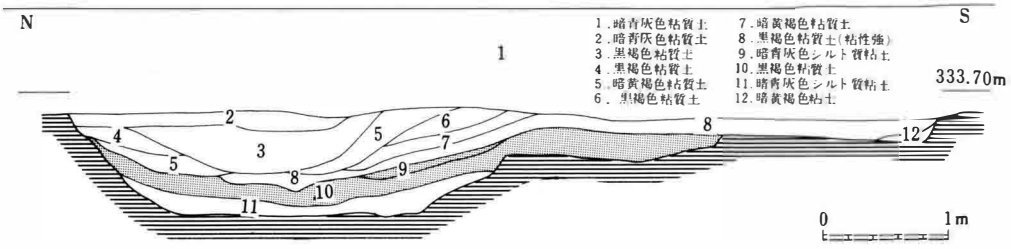


図59　13号溝址土層堆積状況実測図

とおり本溝址は３～５区に展開する当該期集落の南端を区画する溝址である可能性が高く、本溝址以南は遺構分布の空白地帯が形成される。覆土の堆積状況は下層～中層までは比較的レンズ状に近い自然の堆積状況を示すが、上層は一部再掘削されているようである。遺物は８～10層を中心に出土しており出土土器の様相からは本溝址はII期に掘削され、III期初頭に大量の土器群が投棄されたものと考えられ、その存続期間はII期～III期ととらえられる。強粘性の覆土と湧水のため調査は困難をきわて、確実な分層発掘はなし得ず出土土器の一括性は保証し得ないが、遺物出土状況の垂直分布図に示したとおり、在地の箱清水式系の土器と古式土師器が混在する状況で出土しており、当該期の研究に良好な資料を提示するものといえよう。

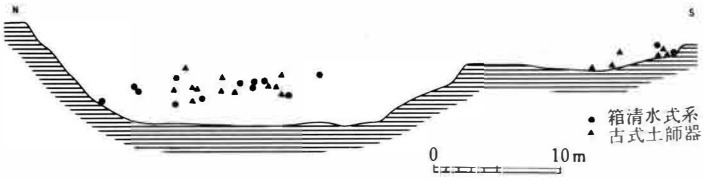


図60　13号溝址土器出土状況図

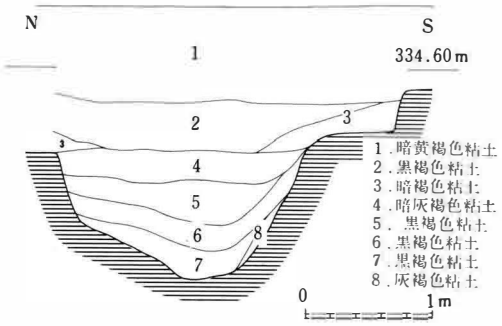


図61　14号溝址土層堆積状況実測図

壷（266～273・277～286）・ヒサゴ壷（274～276・333）・甕（287・290～314・317・320・321）・台付甕（288・289・315・316・318・319・322～332）・高坏（334～354）・器台（351～354）・蓋（355・356）・片口鉢（359）・底部穿孔鉢（360）・坏（358・361・362）・粗製器台（357）が出土している。

14号溝址　（図16・61）

２区中央付近にて検出されたもので、22・42号住居址を切って構築される。北西から南東へ直線的に伸びる形態を呈する。溝流路本体の幅2.00m、深さ1.05mを測り、南側は幅0.50m程のテラス状の平坦面を有する。覆土は比較的レンズ状に近い自然の堆積状況を示し、６層を中心に遺物が出土している。壷（364）・甕（363・369～371）・台坏甕（365～368・372～374）・底部穿孔鉢（375）・高坏（376～381）・器台（382・383）・小型壷（384）・鉢（385）・坏（386・387）が出土している。

15号溝址　（図17）

５区南側にて検出したもので、溝址としたが本来的には旧地形の自然の落ち込みに土器群が投棄されたものと考えられる。ただしこの溝を境に北側には住居址は検出されておらず、南側の13号溝址と対をなしてII～III期の集落を画していた可能性が高いものと考えられる。幅平均8.00m、深さ0.50mを測る。二重口縁壷（388）・壷（389～391）・甕（392～396）・鉢（397・398・405）・高坏（399～401）・器台（402）・小型丸底坩（403・404）・粗製器台（406～408）が出土した。

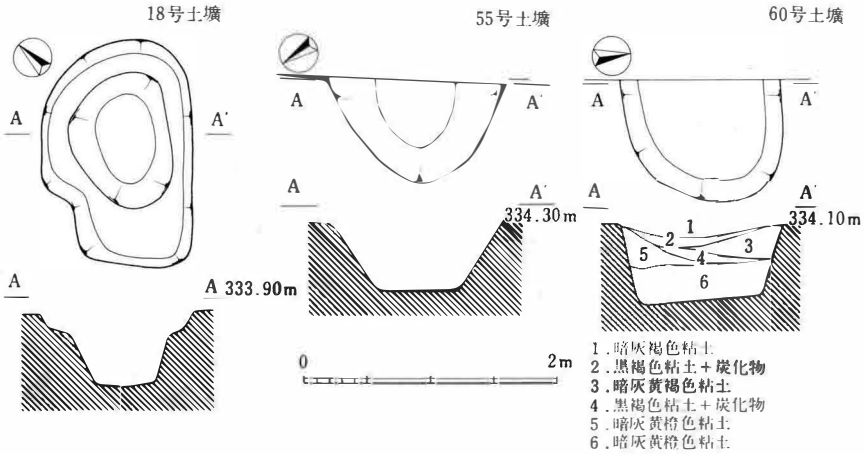


図62　18号・55号・60号土壙実測図

18号土壙　（図62）

1区東側にて検出されたもので、長径1.80m、短径1.20m程の不整な楕円形を呈する。二段にわたる掘りこみを有し最深部で60cmを測る。覆土内より壷（409・410）・台付甕（411）が出土している。

55号土壙　（図62）

2区北側にて検出されたもので、東側は½程が調査区外となる。径1.50m程の円形プランで、深さ60cmを測り断面逆台形状を呈する。覆土内より器台（417）・甕（418・419）・高坏（420）を出土している。

60号土壙　（図62）

5区北側にて検出されたもので、径1.30m程の円形を呈し深さ65cm程である。第6層より壷（412・413）・鉢（414）・粗製器台（415）・高坏（416）が出土している。

畝状遺構　（図63）

5区北半にて検出された。畝の主軸は北側と南側ではことなり二枚の畑地の存在が考えられる。北側N－40°－E、南側N－12°－Eを測る。覆土内からⅠ～Ⅲ期の各時期にわたる土器破片が出土しているが、いずれも小片で明確に時期決定できる根拠はない。

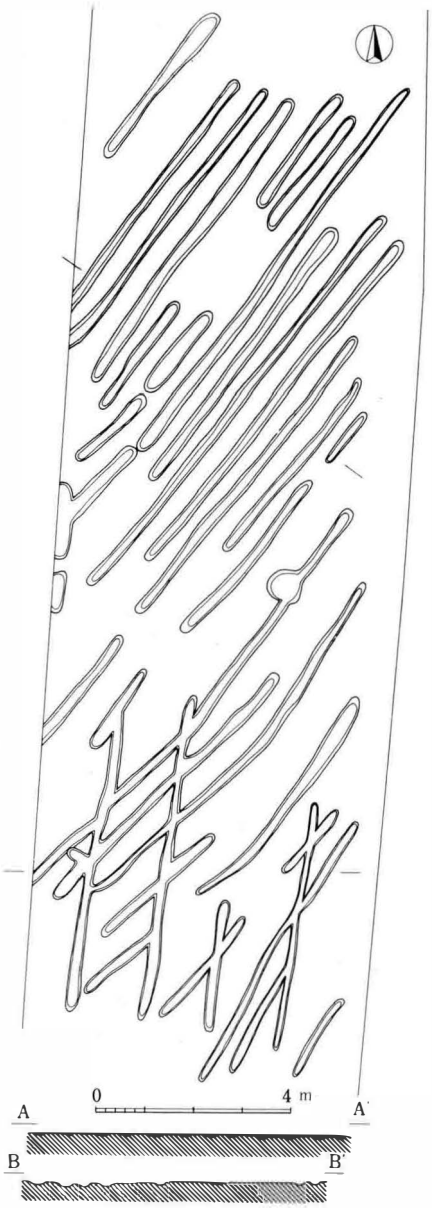


図63　畝状遺構実測図

畝状遺構全景

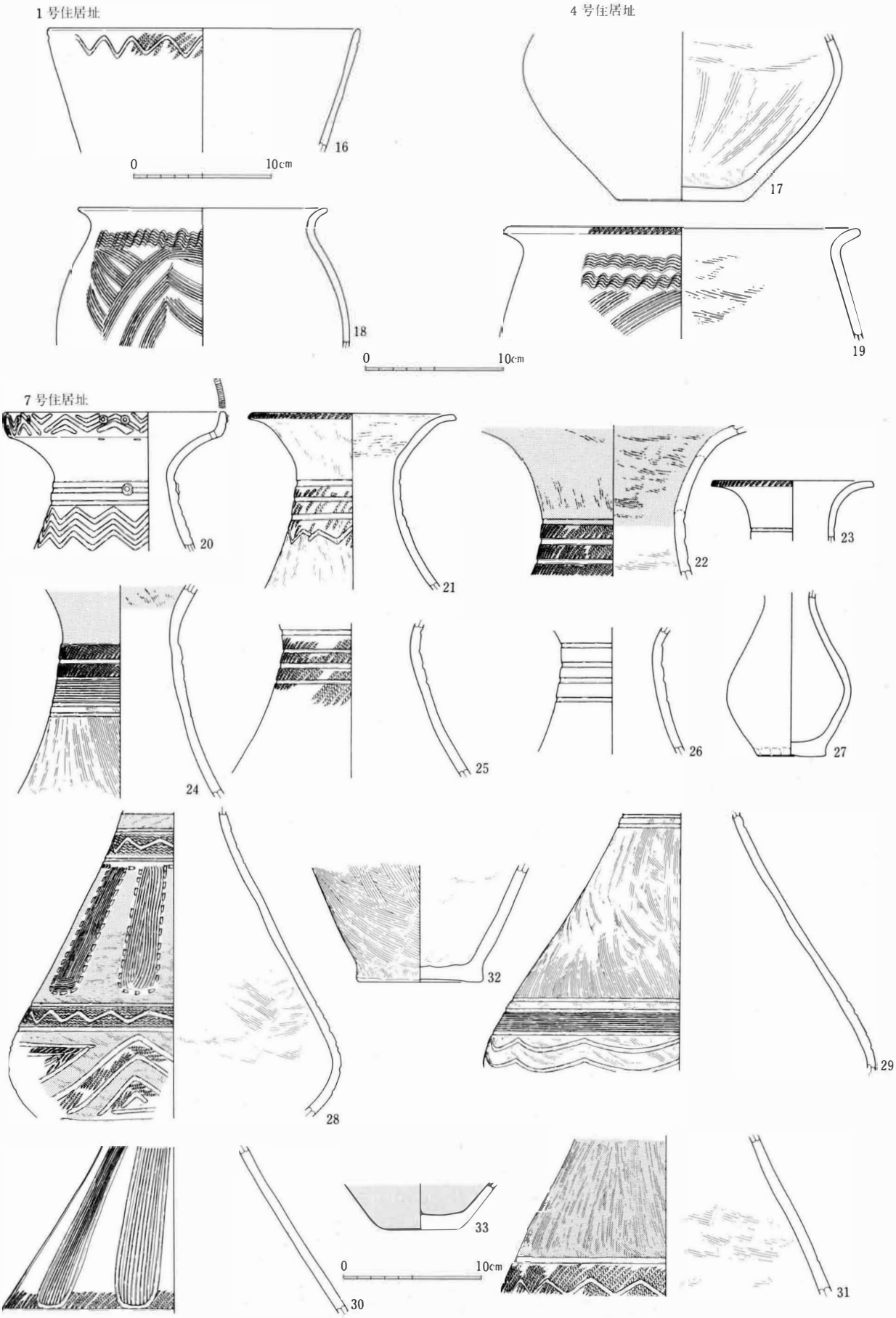


図64　1号・4号・7号住居址出土土器実測図

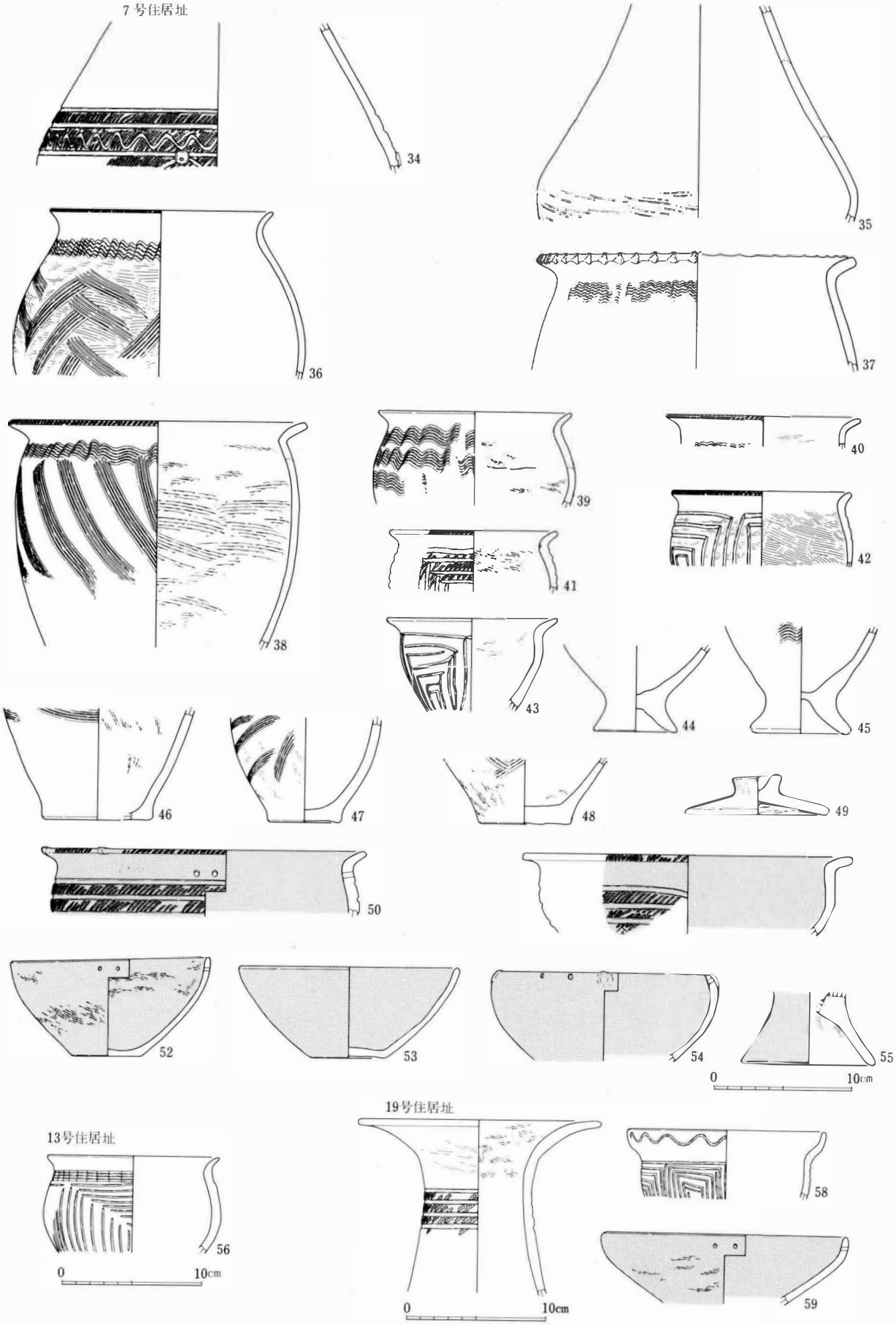


図65　7号・13号・19号住居址出土土器実測図

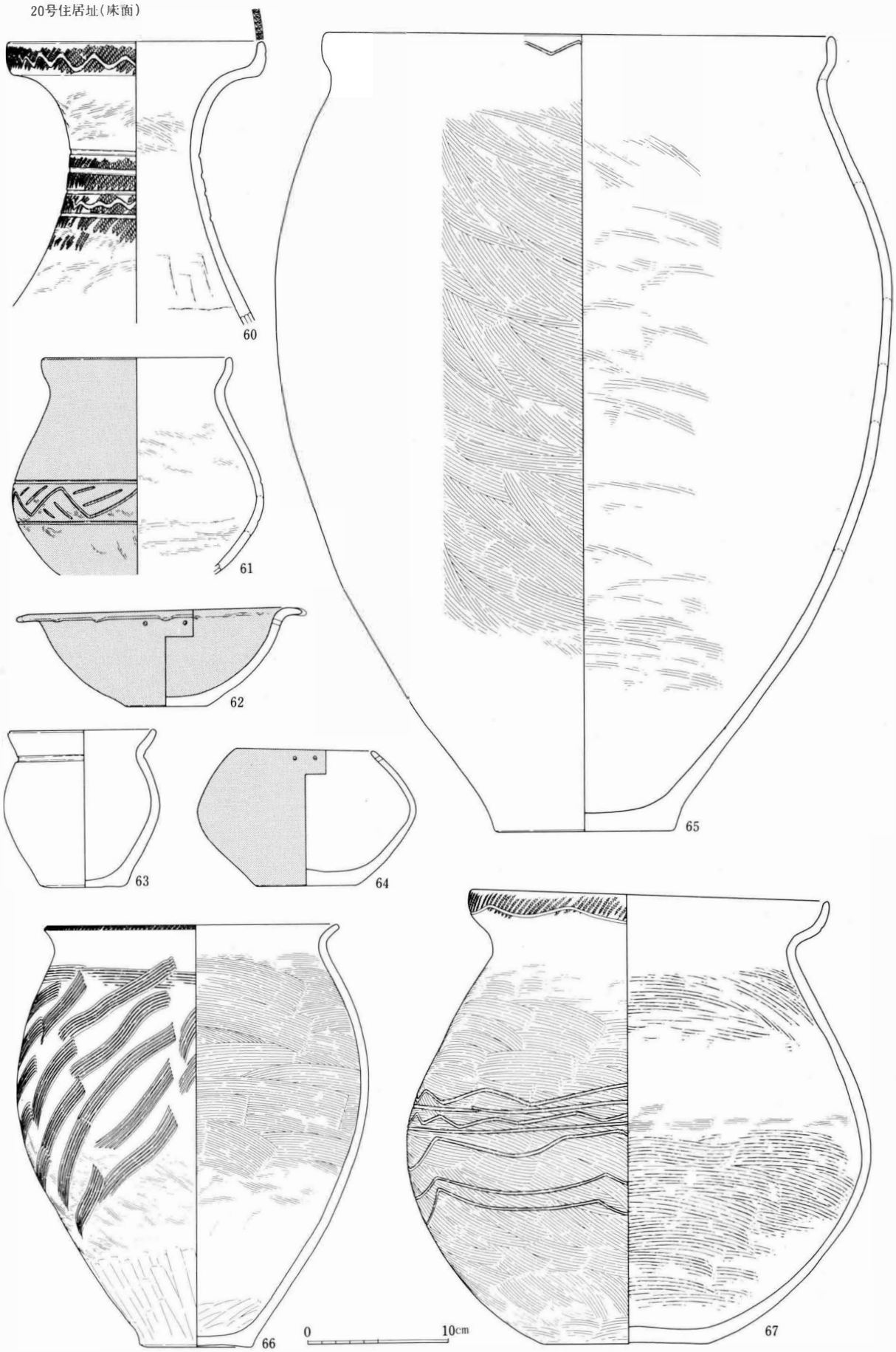


図66　20号住居址床面出土土器実測図

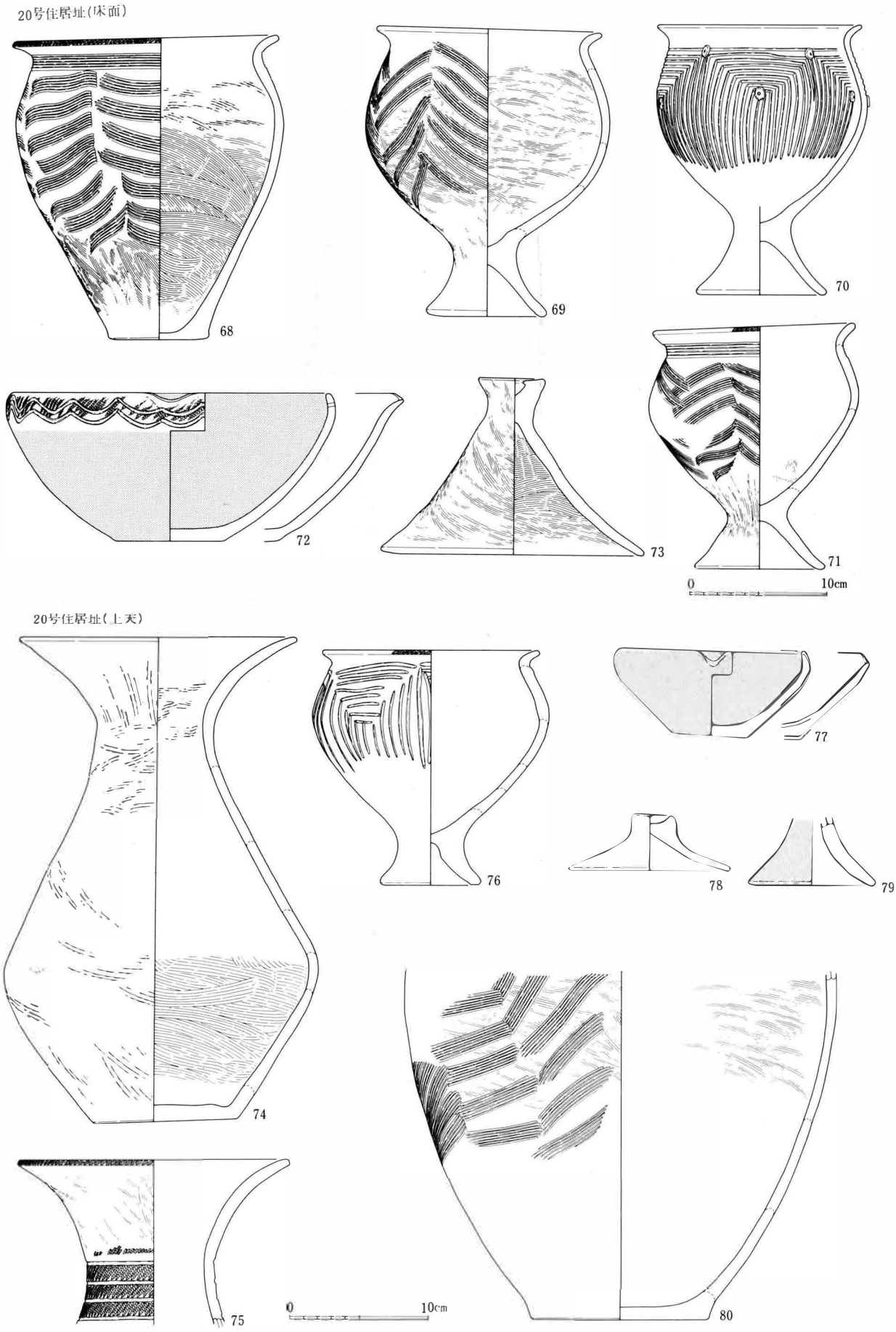


図67　20号住居址（床面）・同（上層）出土土器実測図

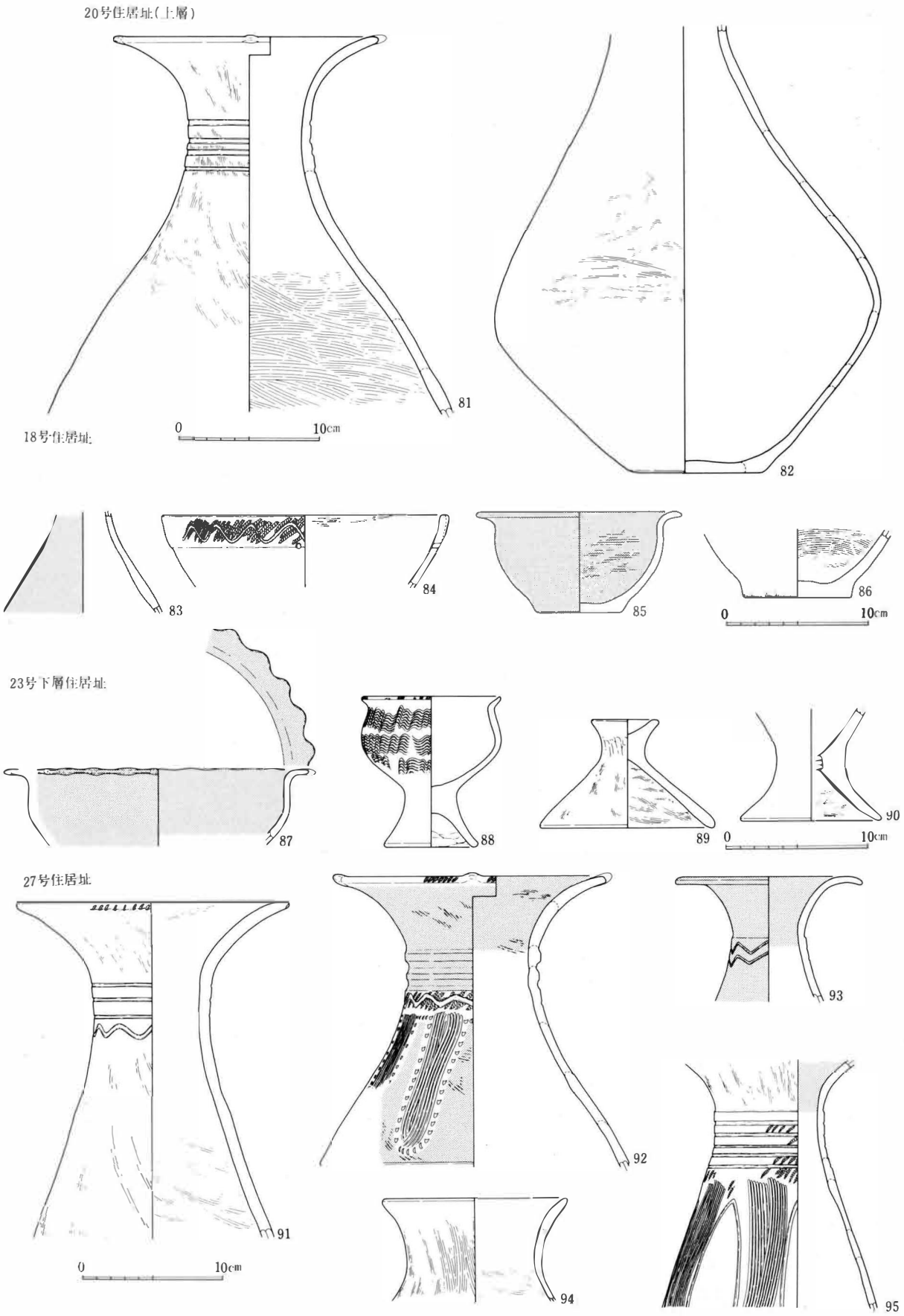


図68　20号住居址（上層）・18号・23号下層・27号住居址出土土器実測図

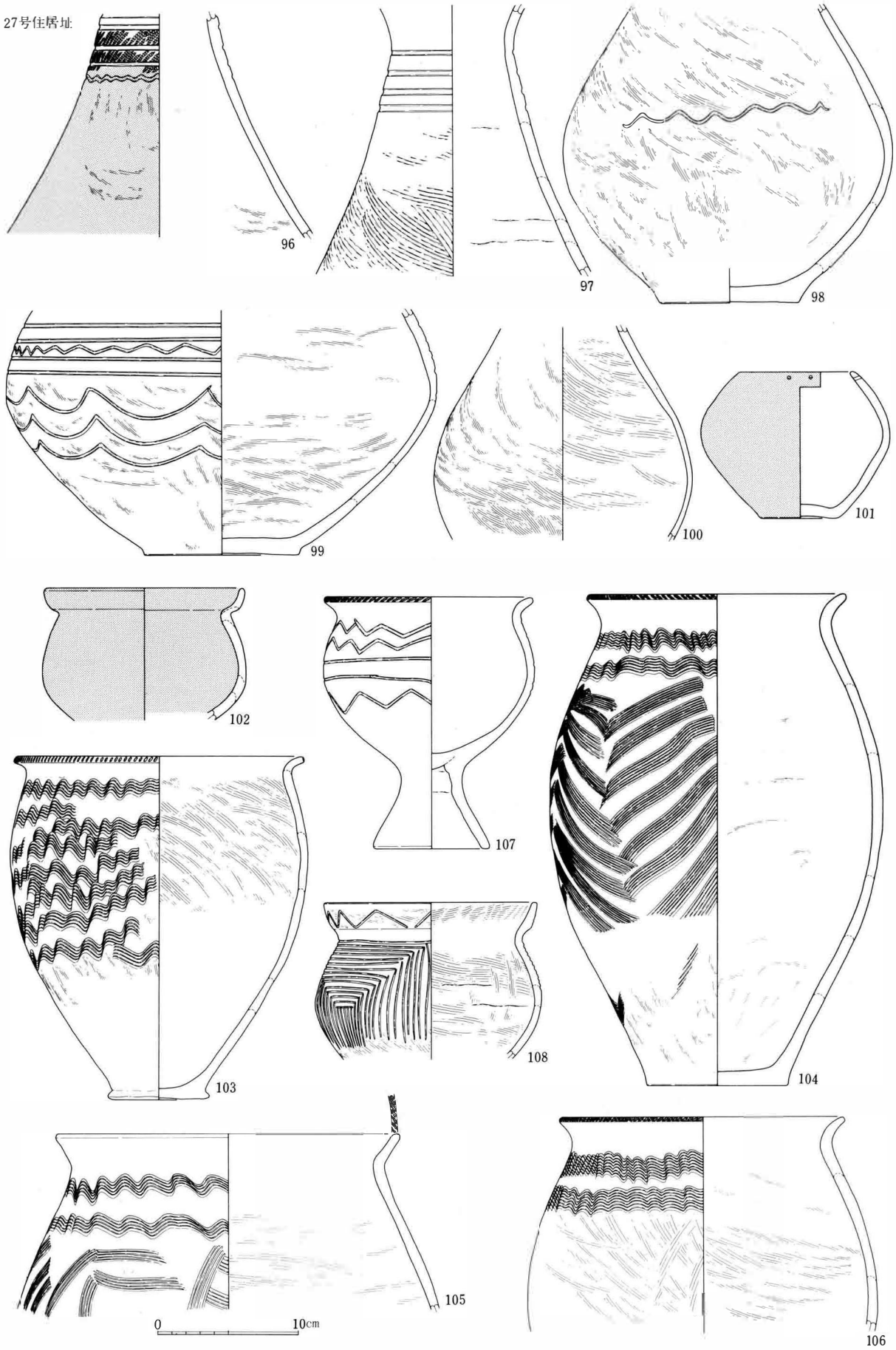


図69　27号住居址出土土器実測図

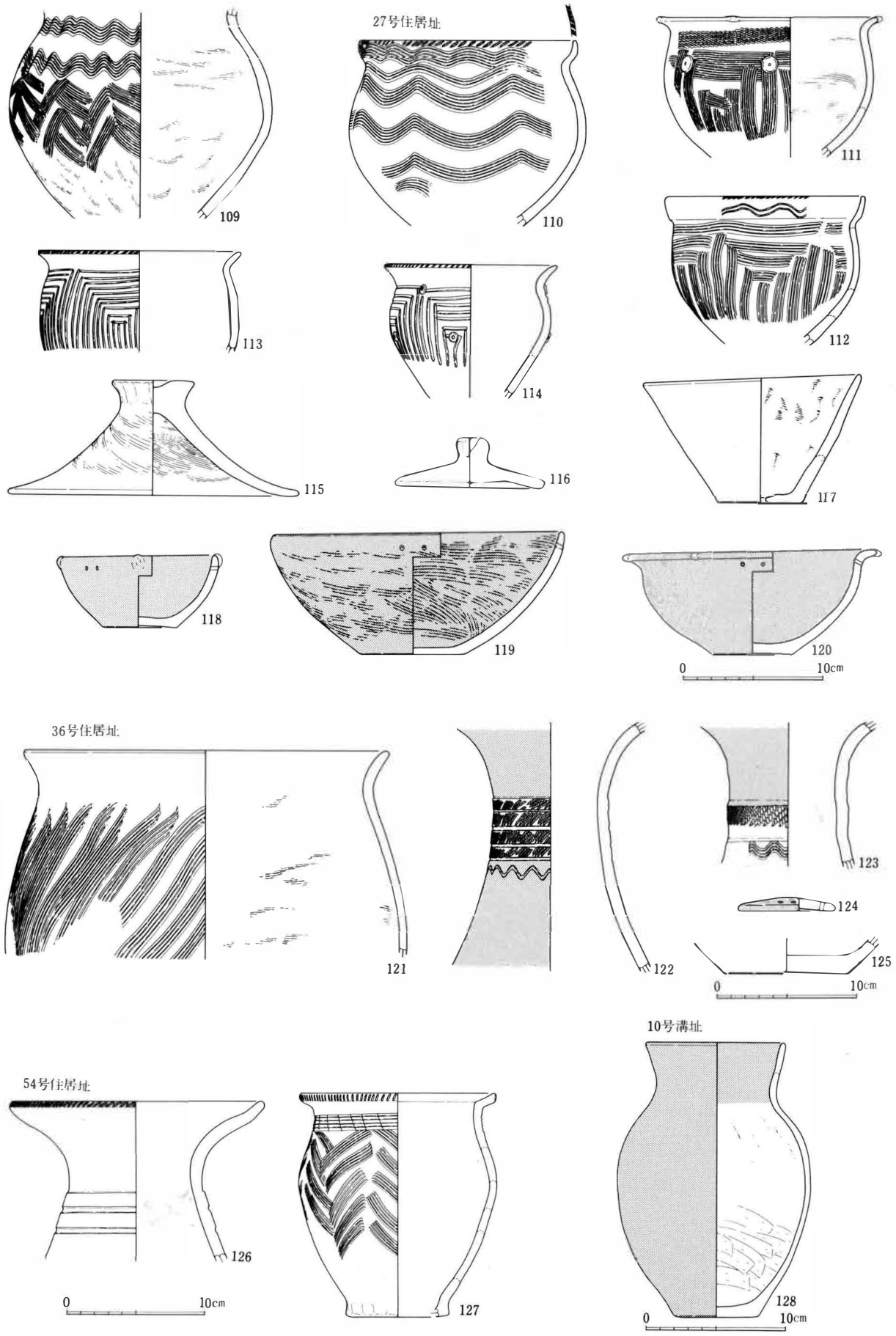


図70　27号・36号・54号住居址、10号溝址出土土器実測図

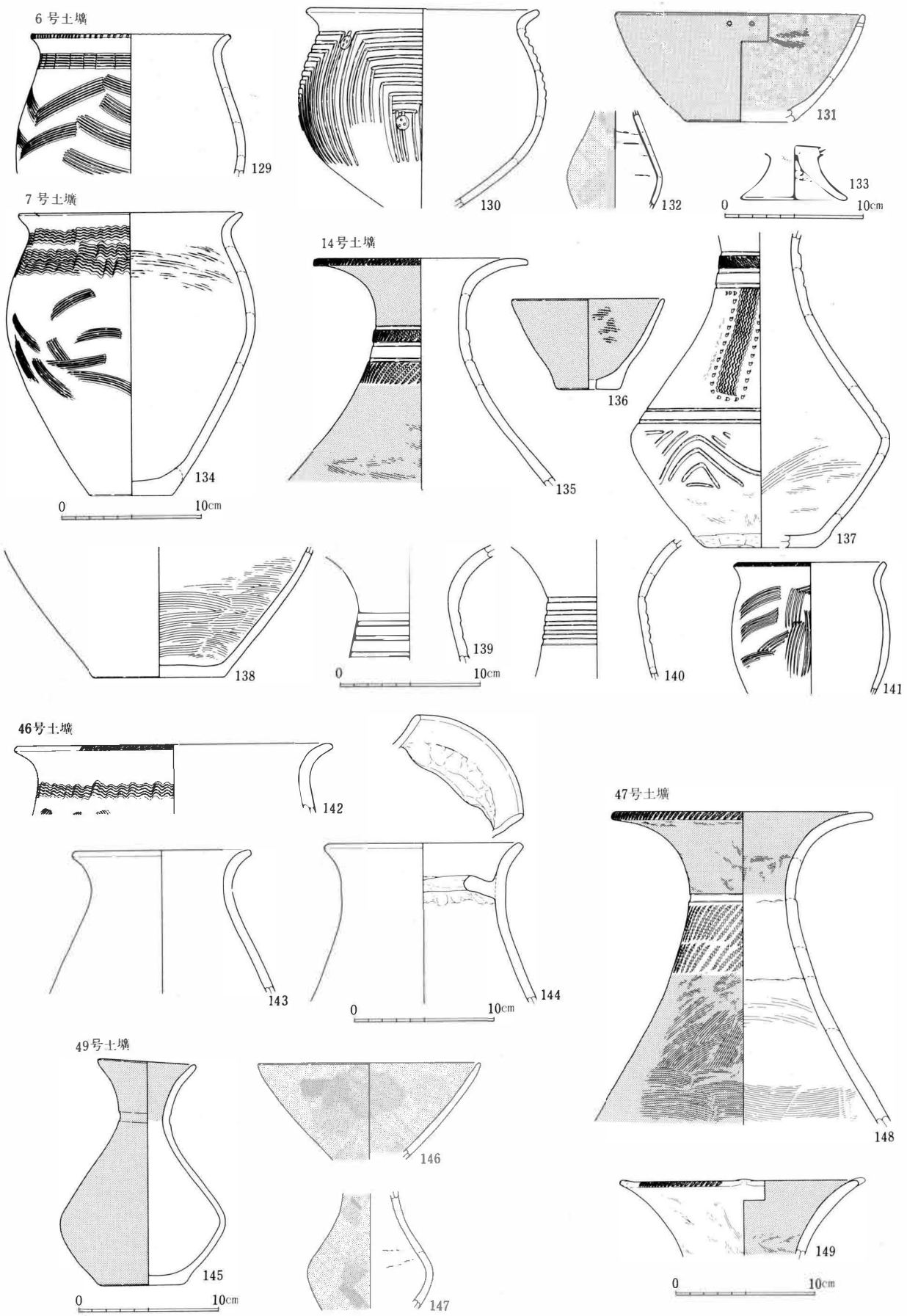


図71　6号・7号・14号・46号・49号・47号土壙出土土器実測図

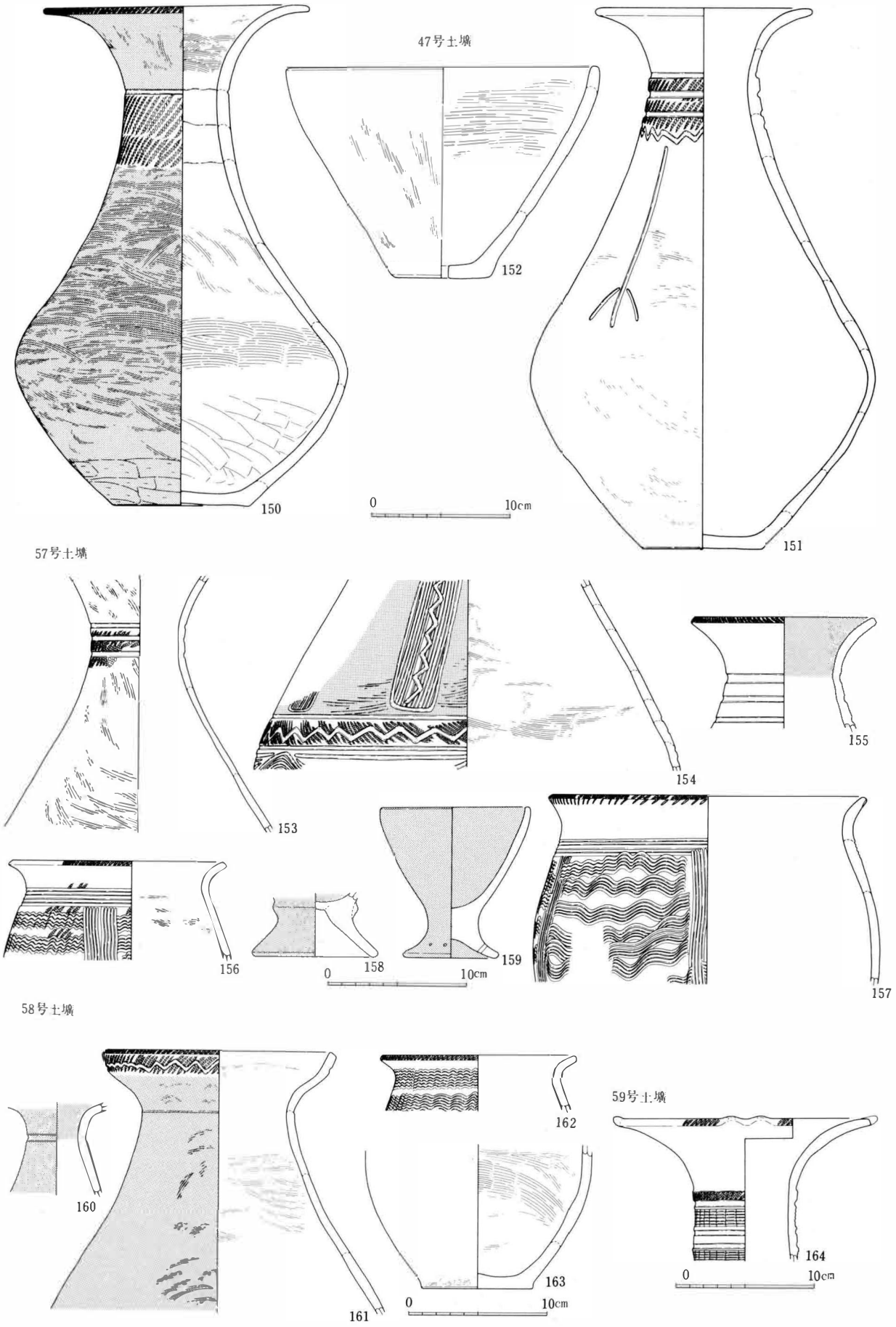


図72　47号・57号・58号・59号土壙出土土器実測図

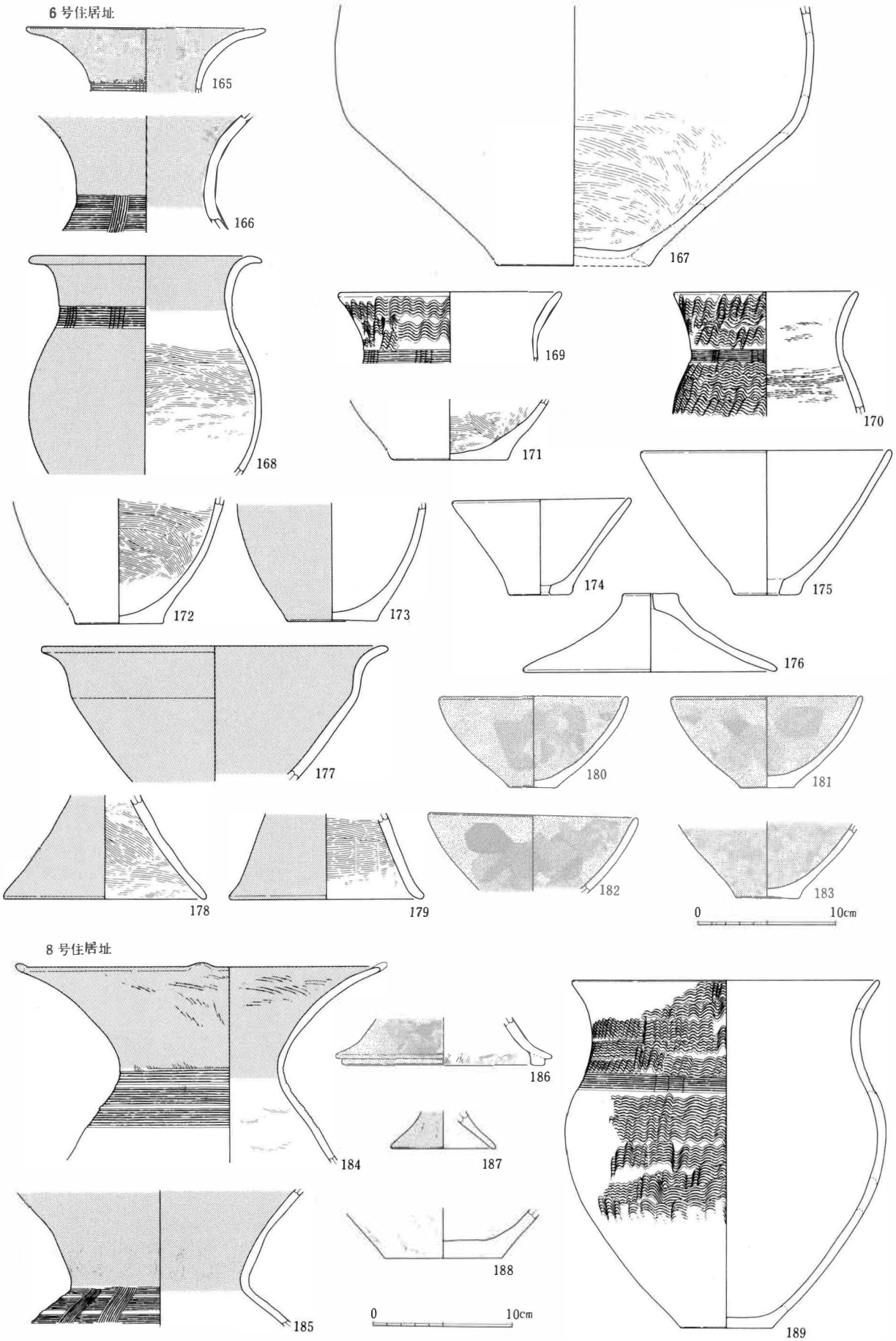


図73　6号・8号住居址出土土器実測図

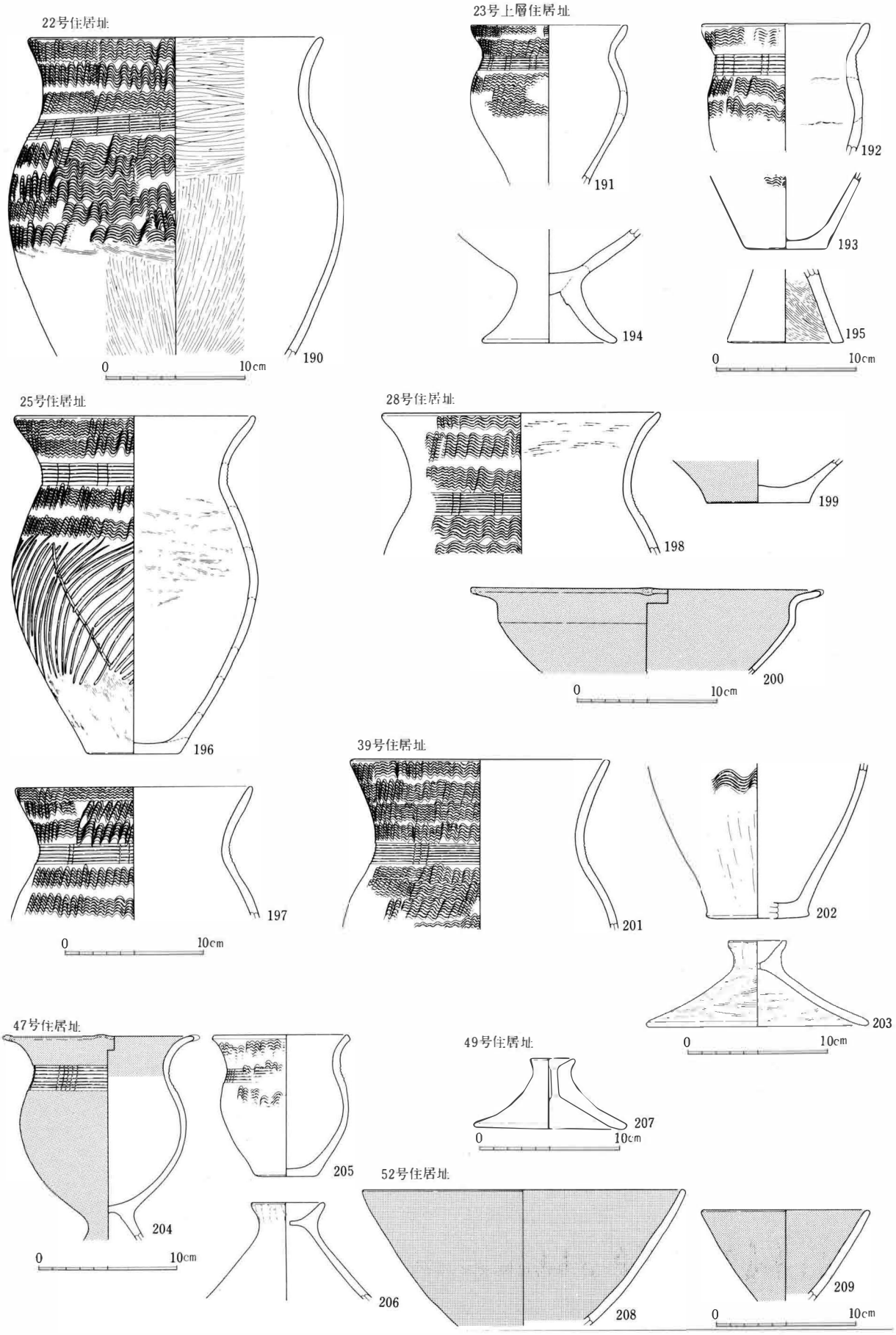


図74　22号・23号上層・25号・28号・39号・47号・49号・52号住居址出土土器実測図

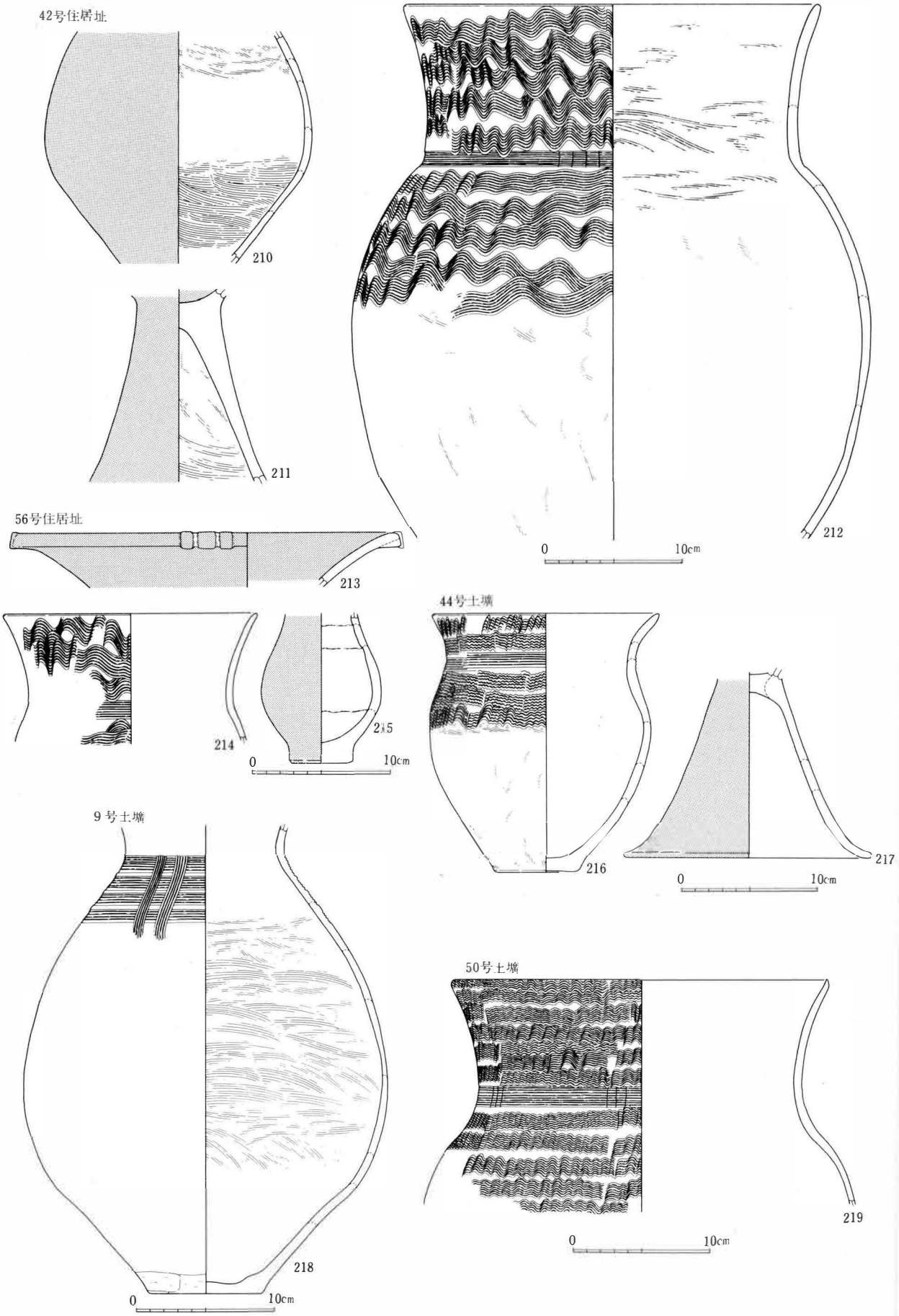


図75　42号・56号住居址、9号・44号・50号土壙出土土器実測図

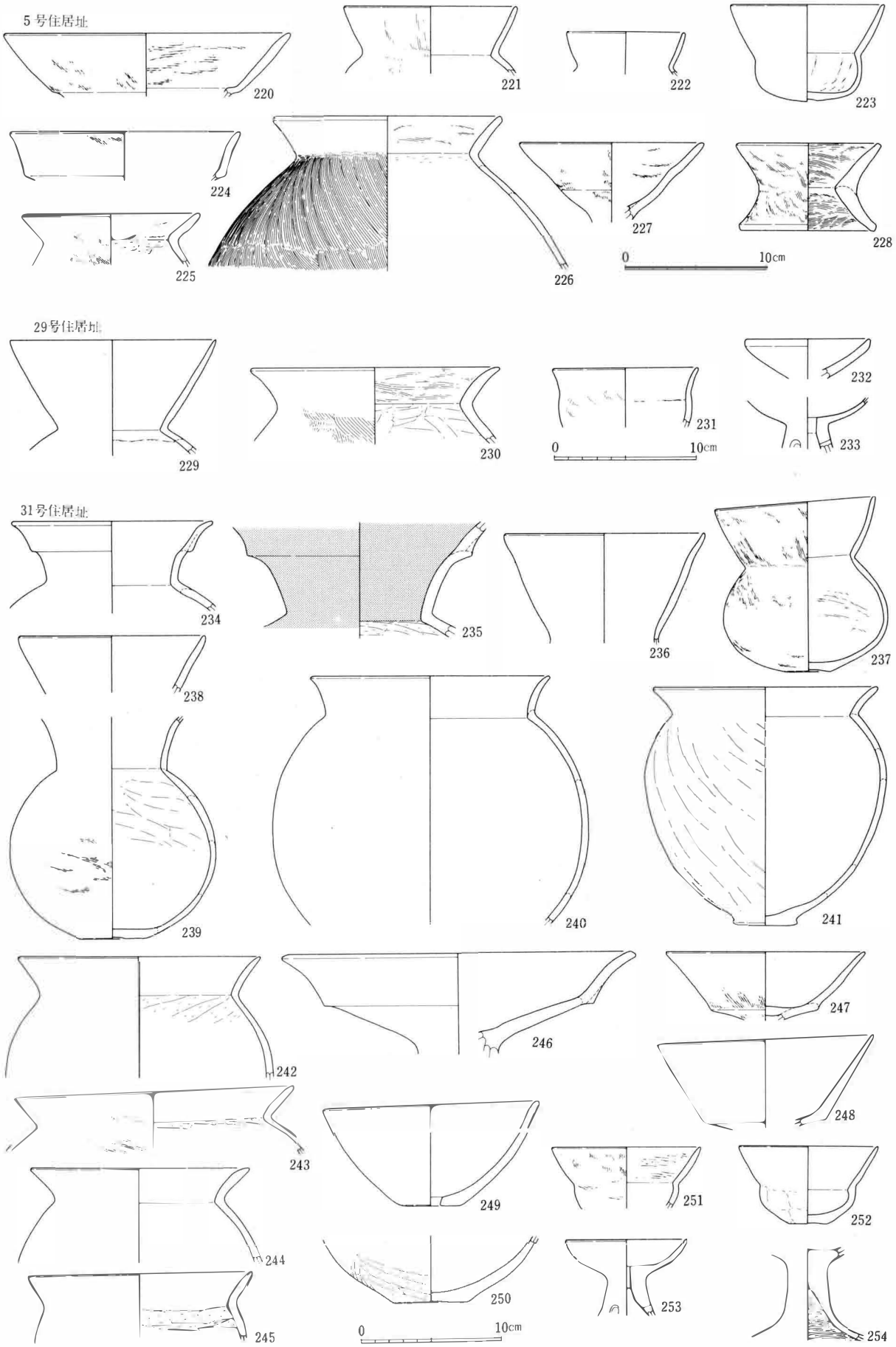


図76　5号・29号・31号住居址出土土器実測図

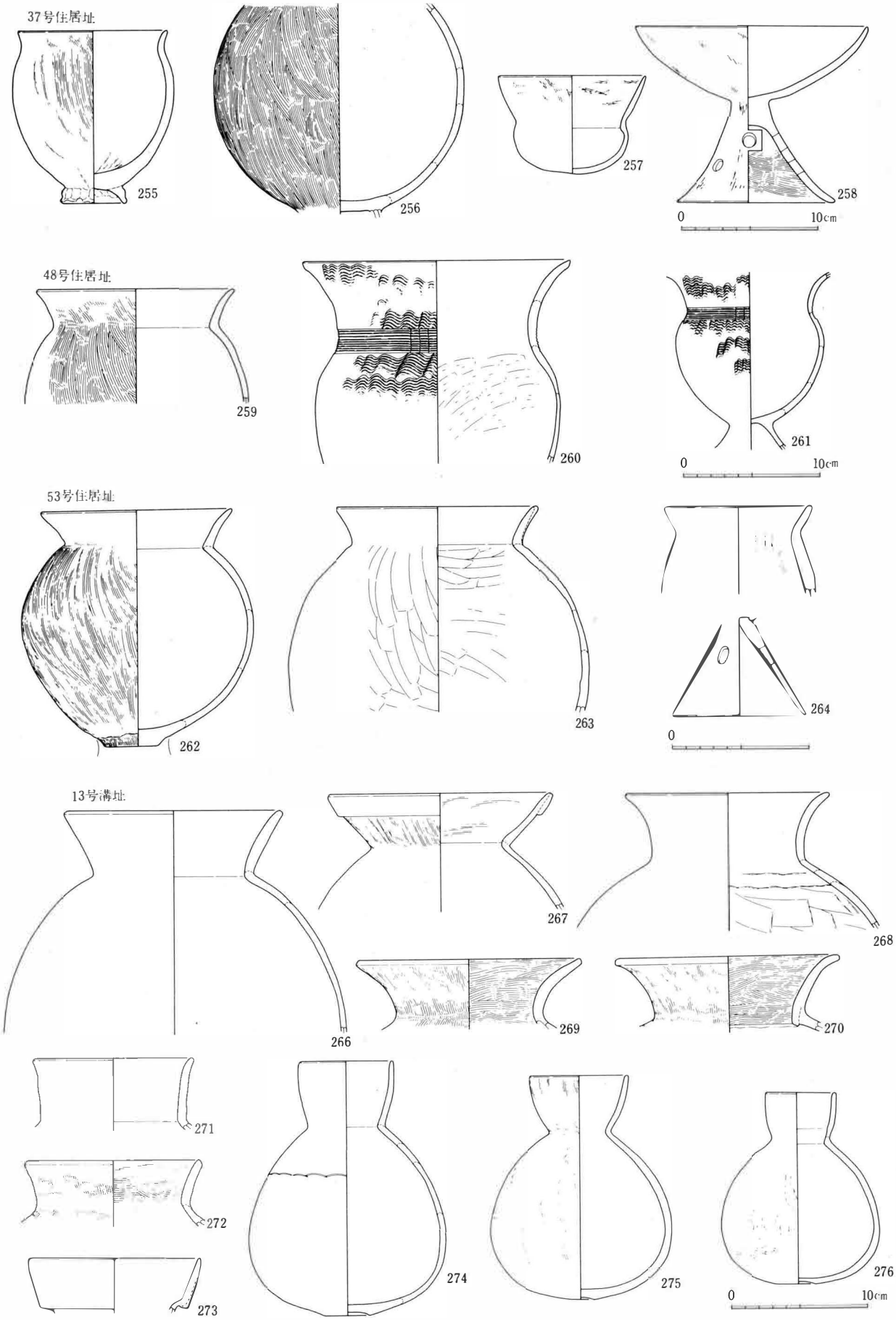


図77. 37号・48号・53号住居址、13号溝址出土土器実測図

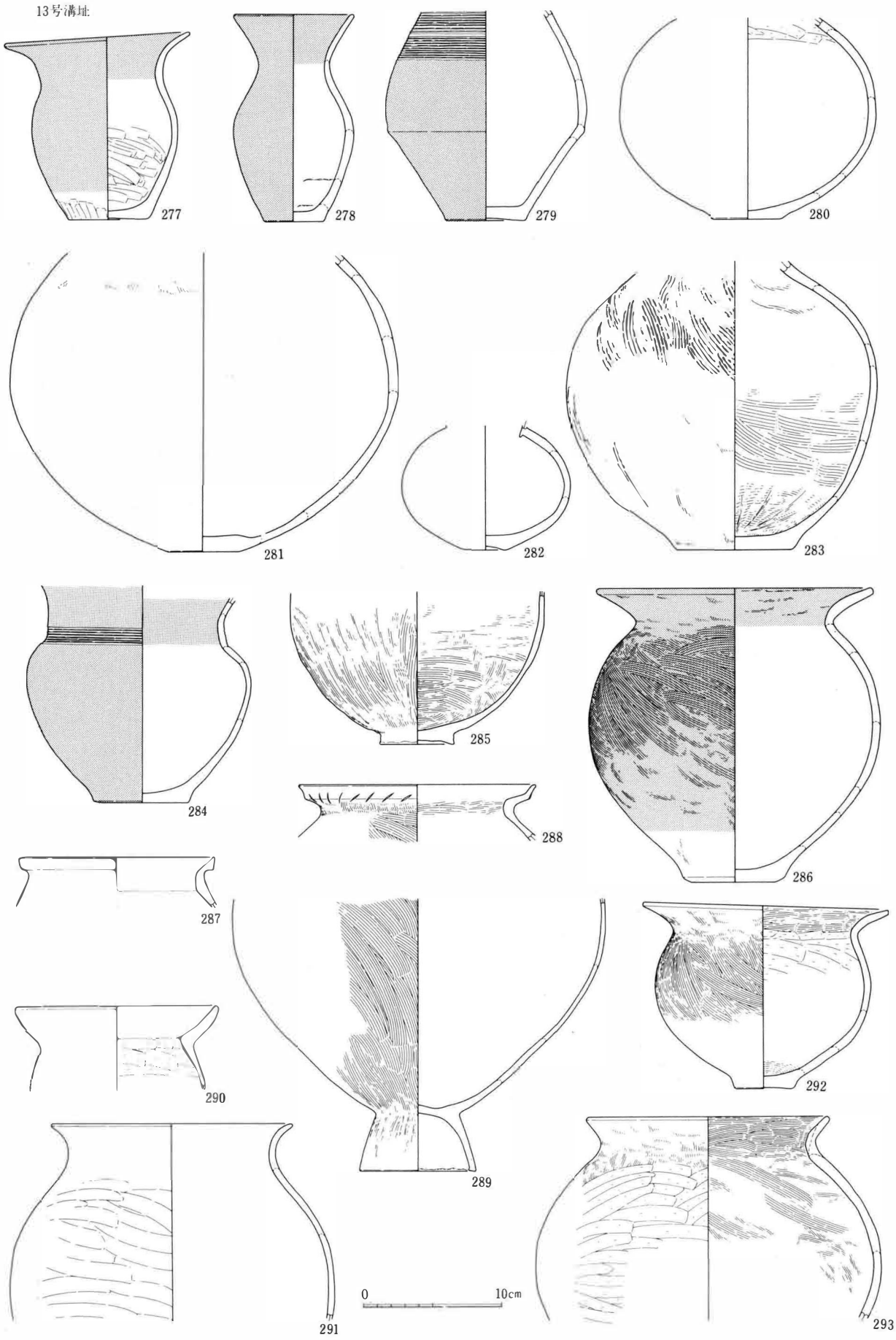


図78　13号溝址出土土器実測図

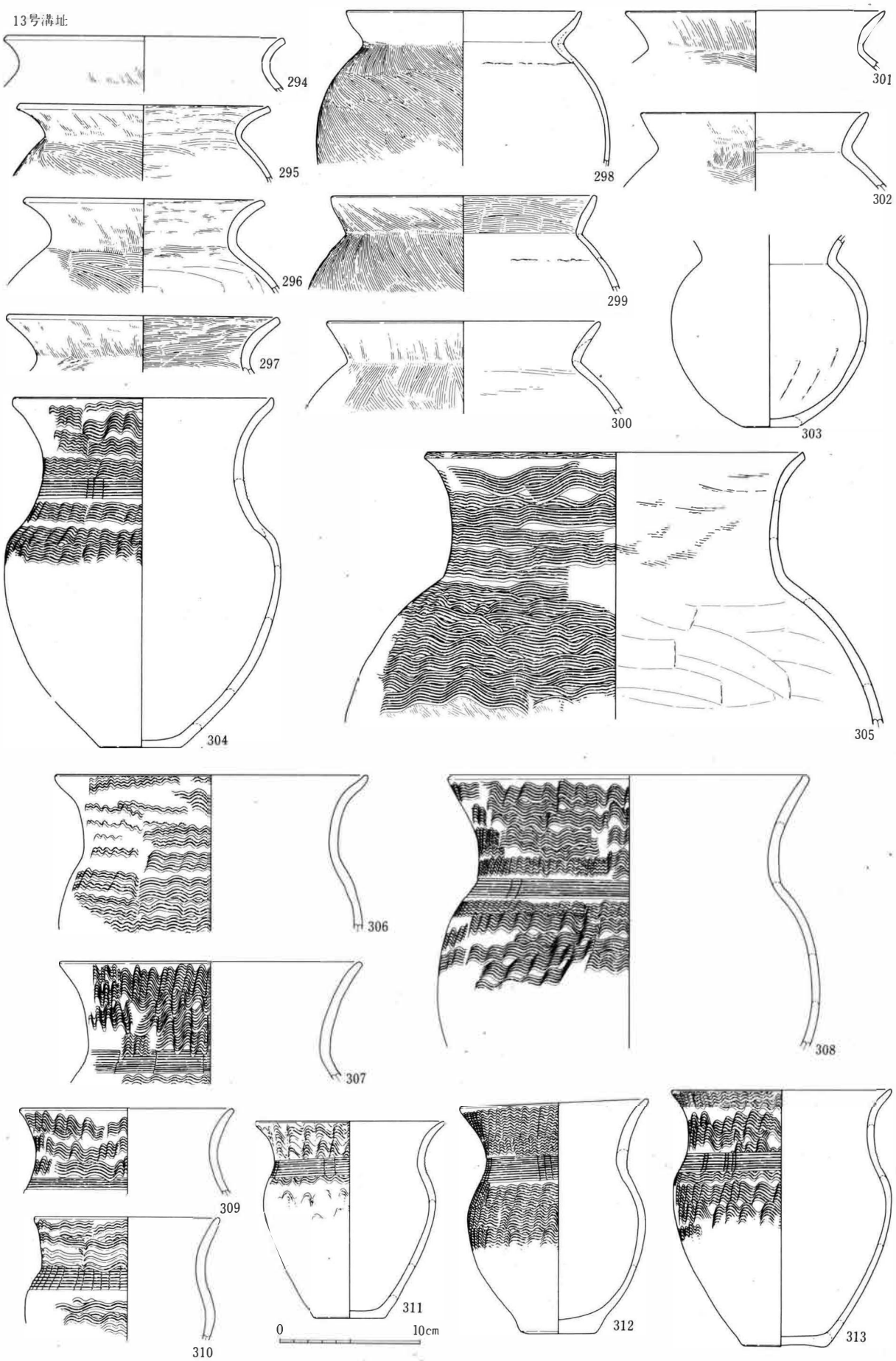


図79　13号溝址出土土器実測図

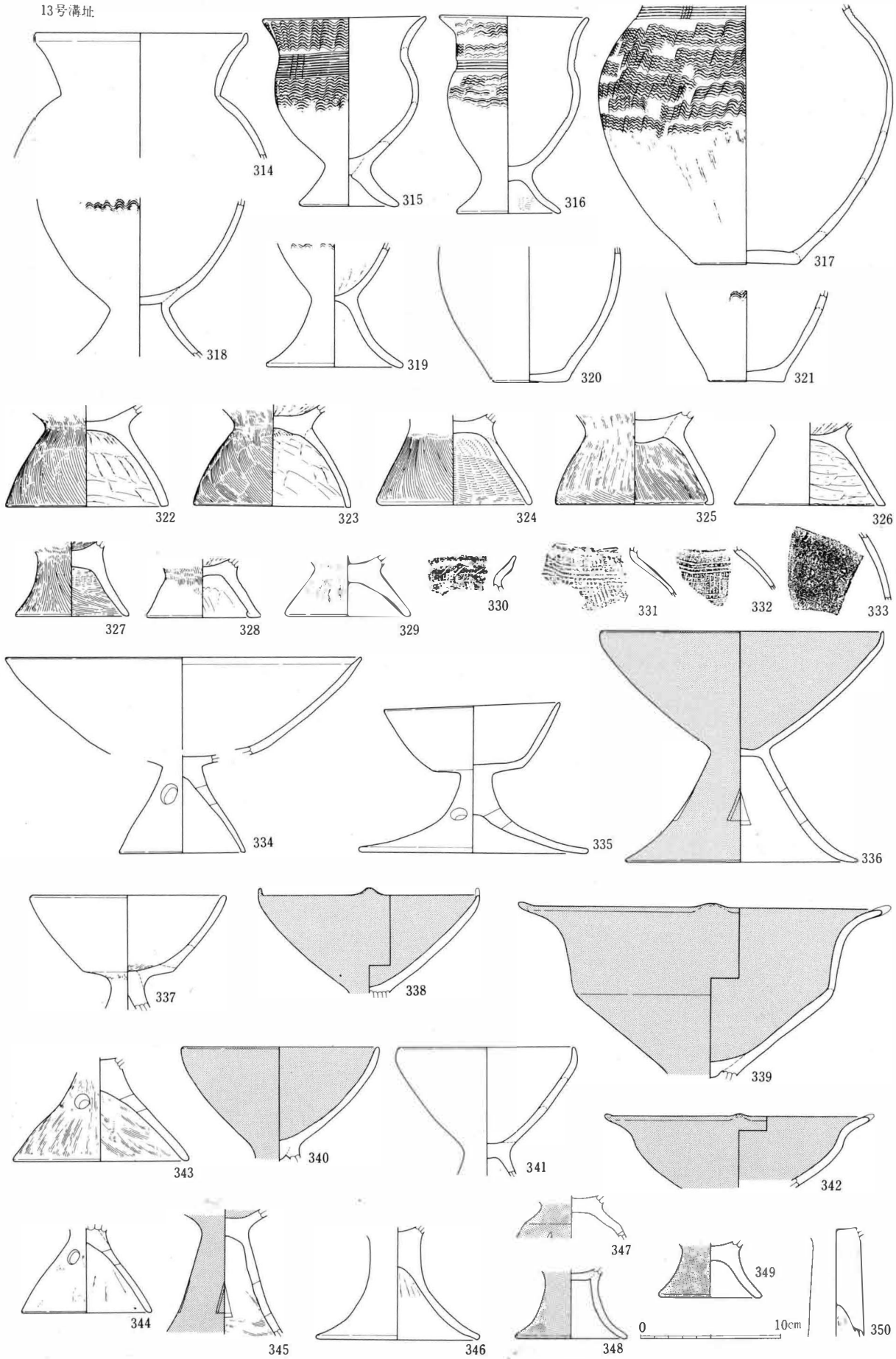


図80　13号溝址出土土器実測図

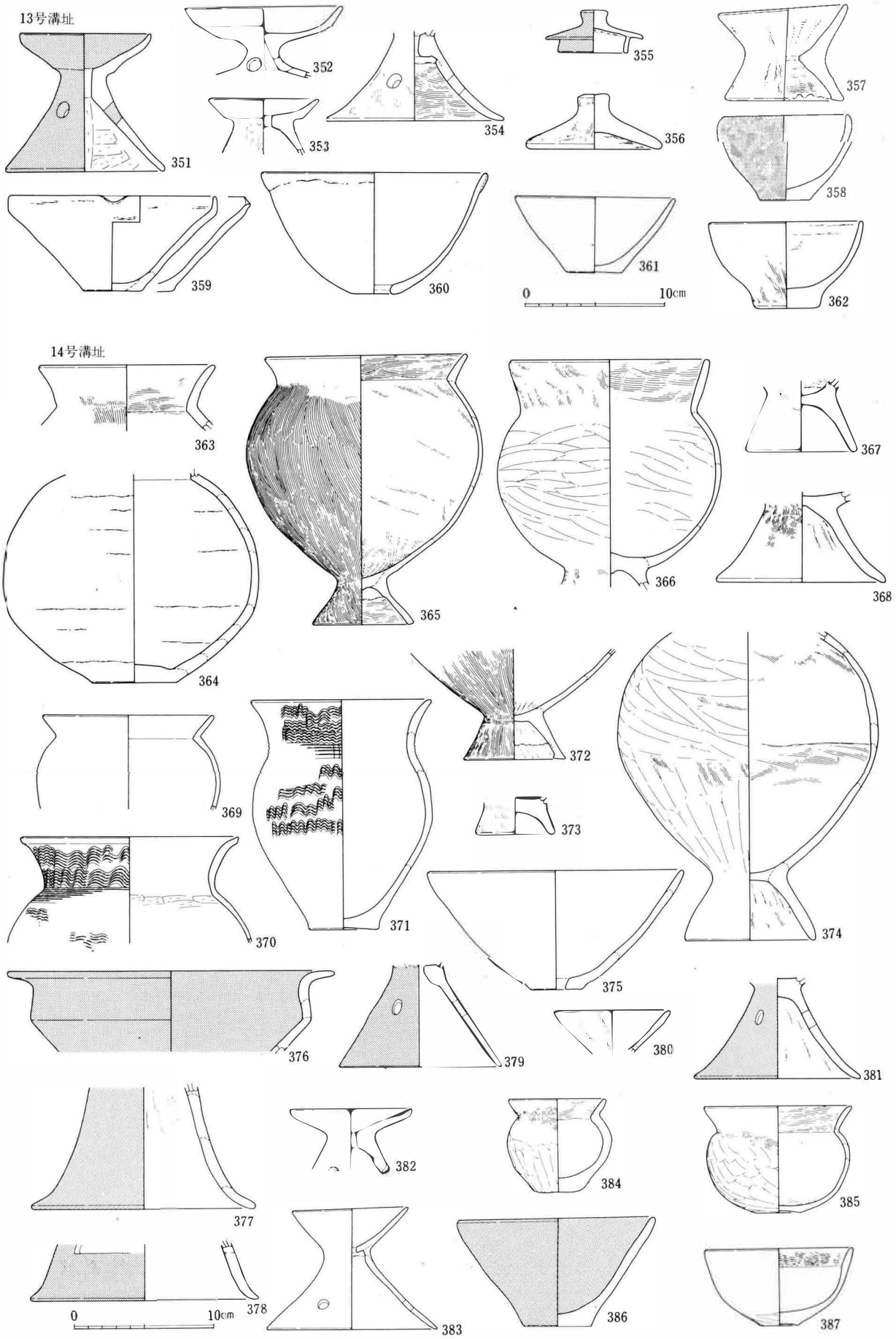


図81　13号・14号溝址出土土器実測図

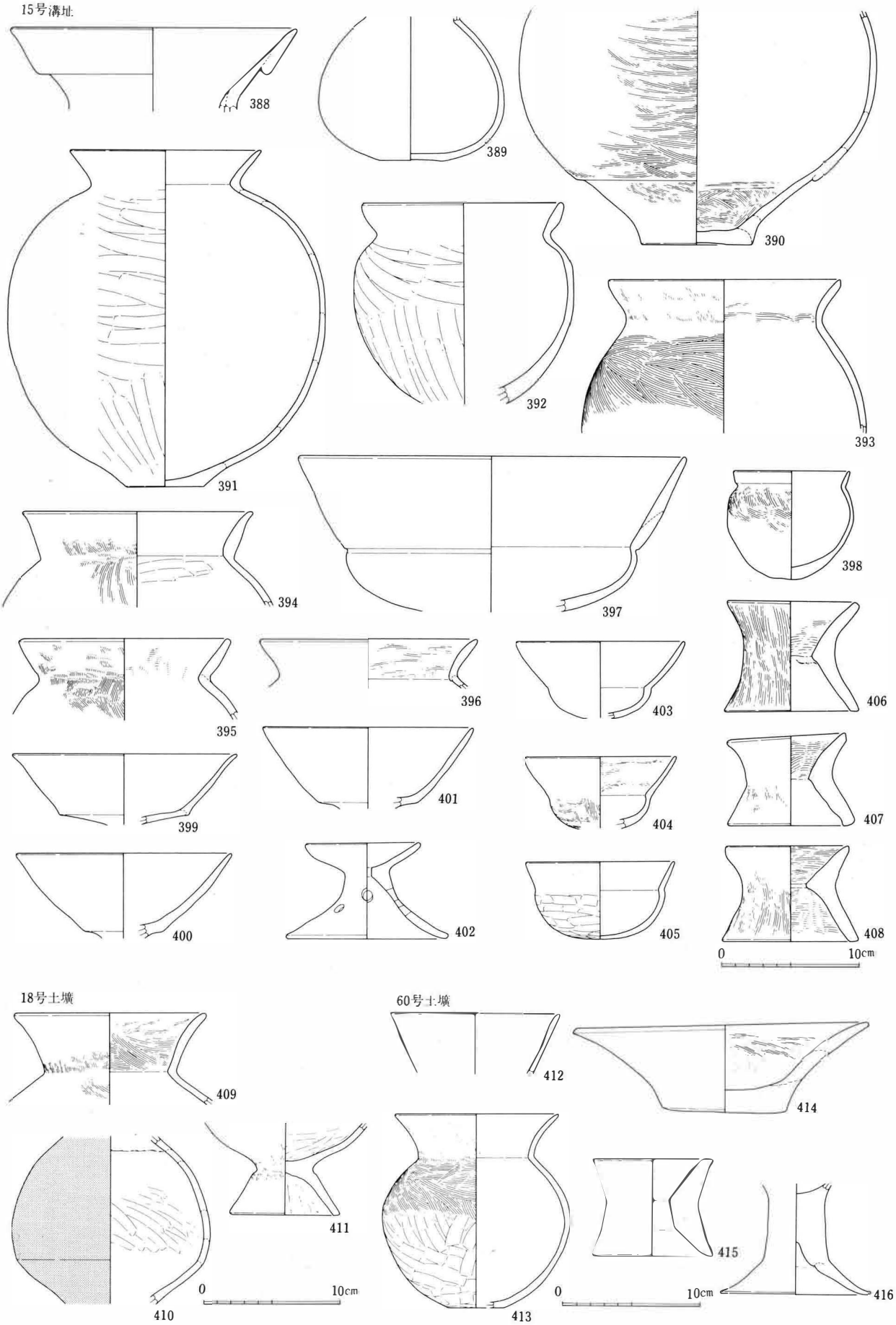


図82　15号溝址、18号・60号土壙出土土器実測図

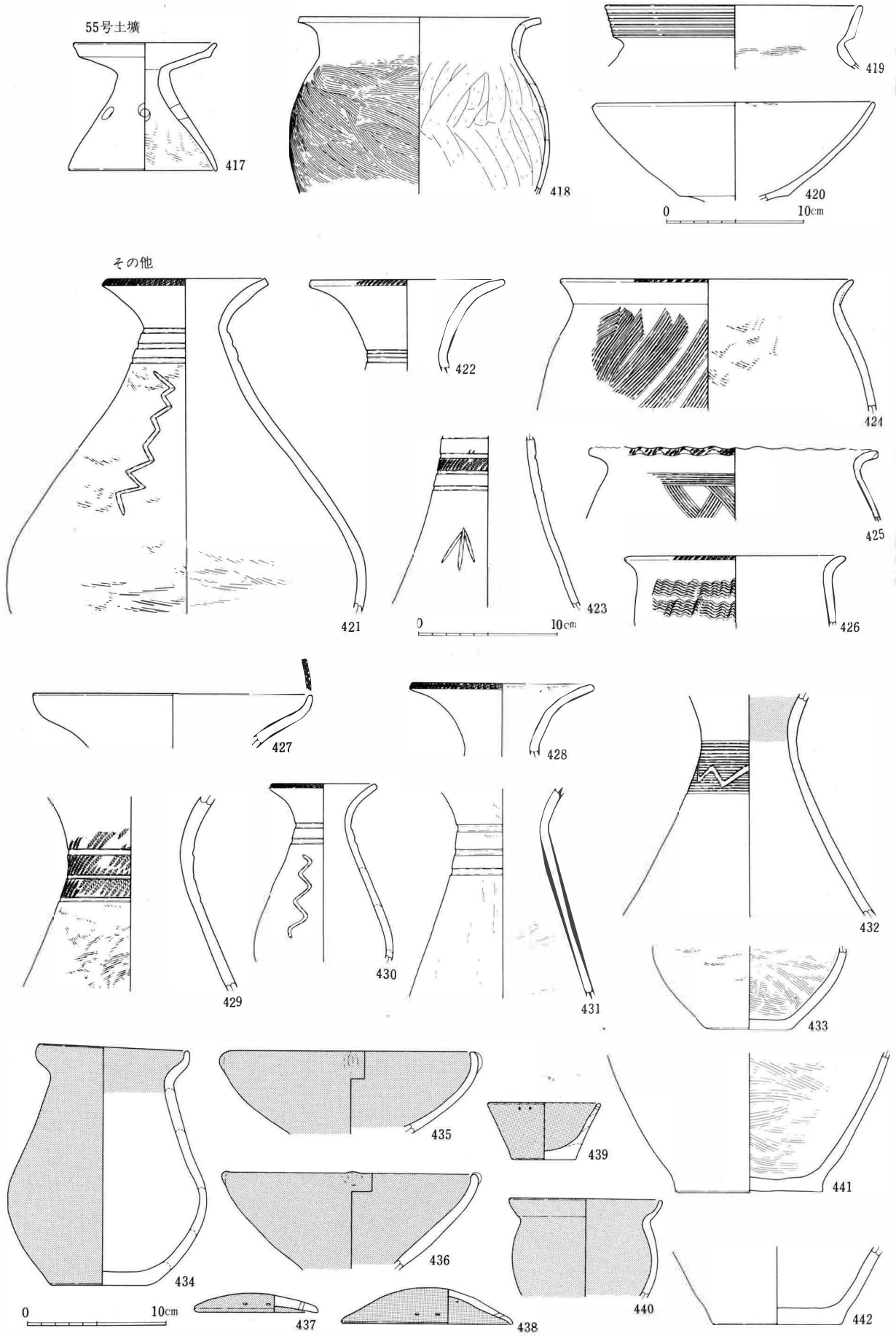


図83　55号土壙、B区出土土器実測図

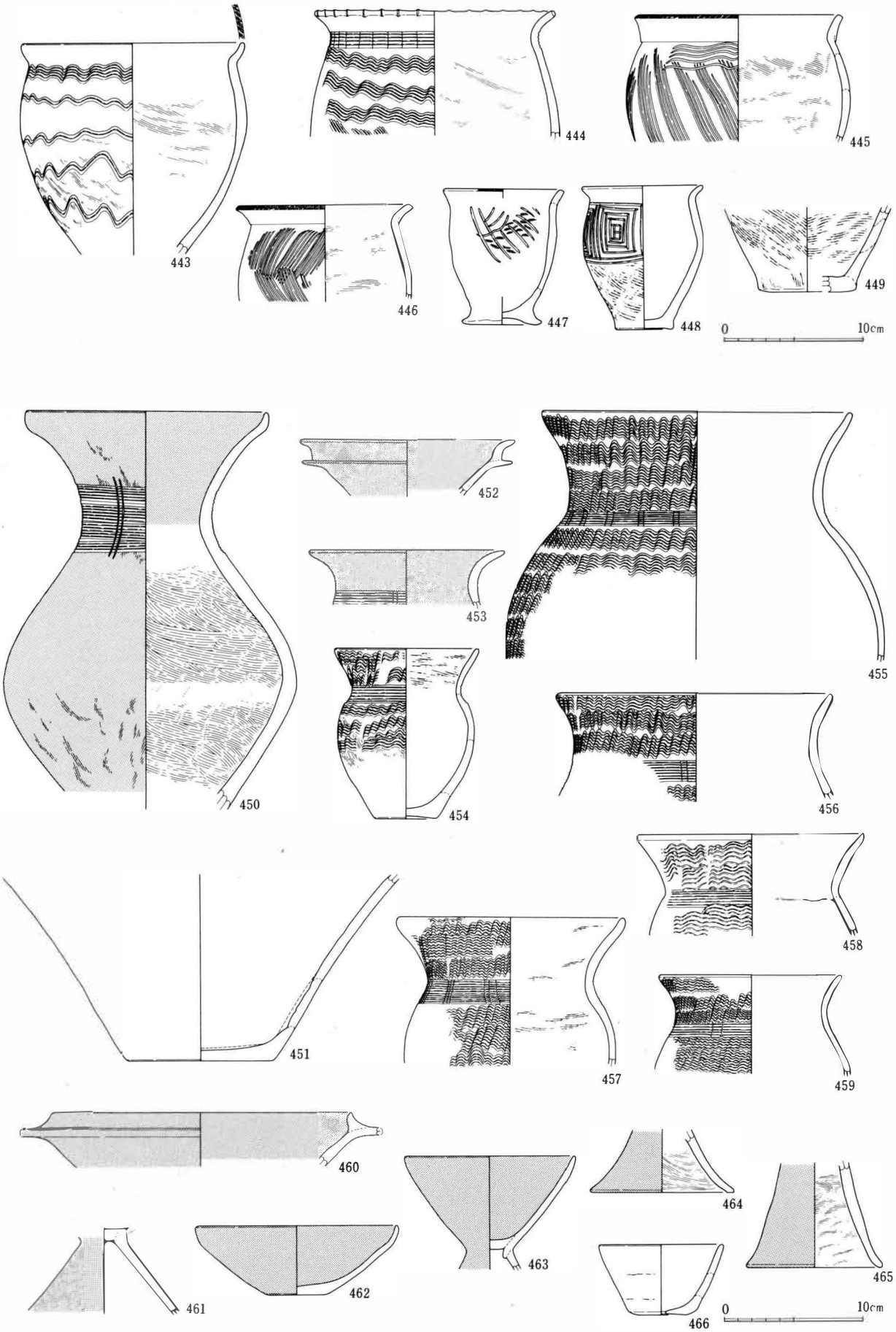


図84　B区出土土器実測図

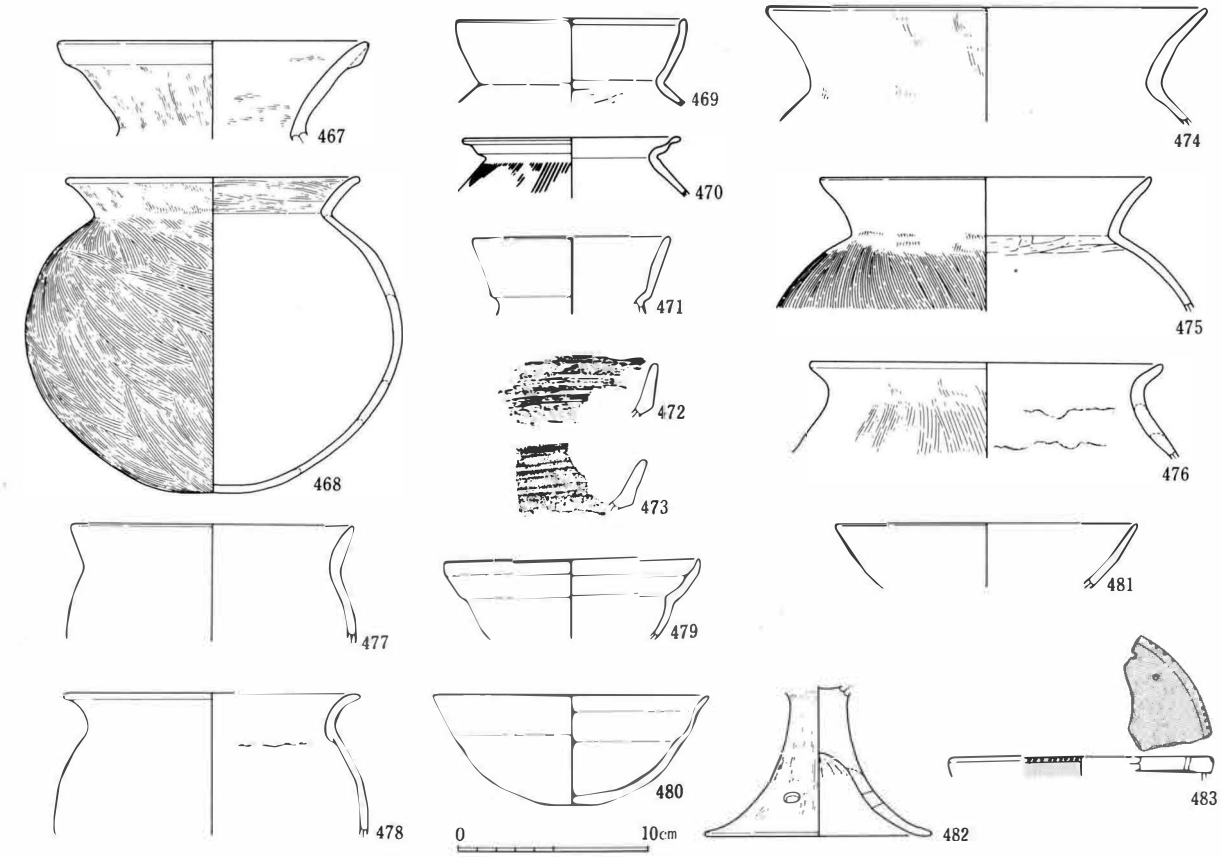


図85　B区出土土器実測図

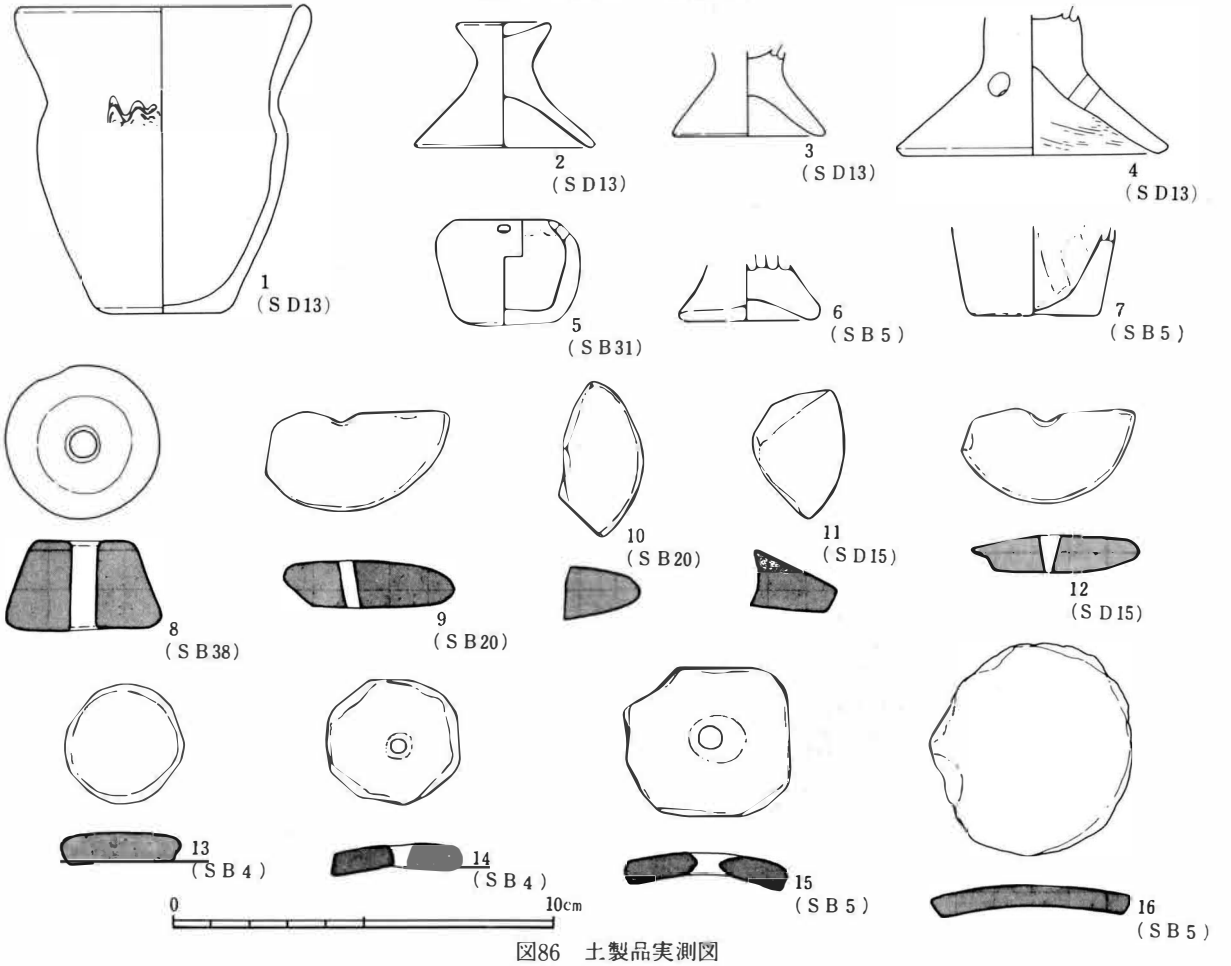


図86　土製品実測図

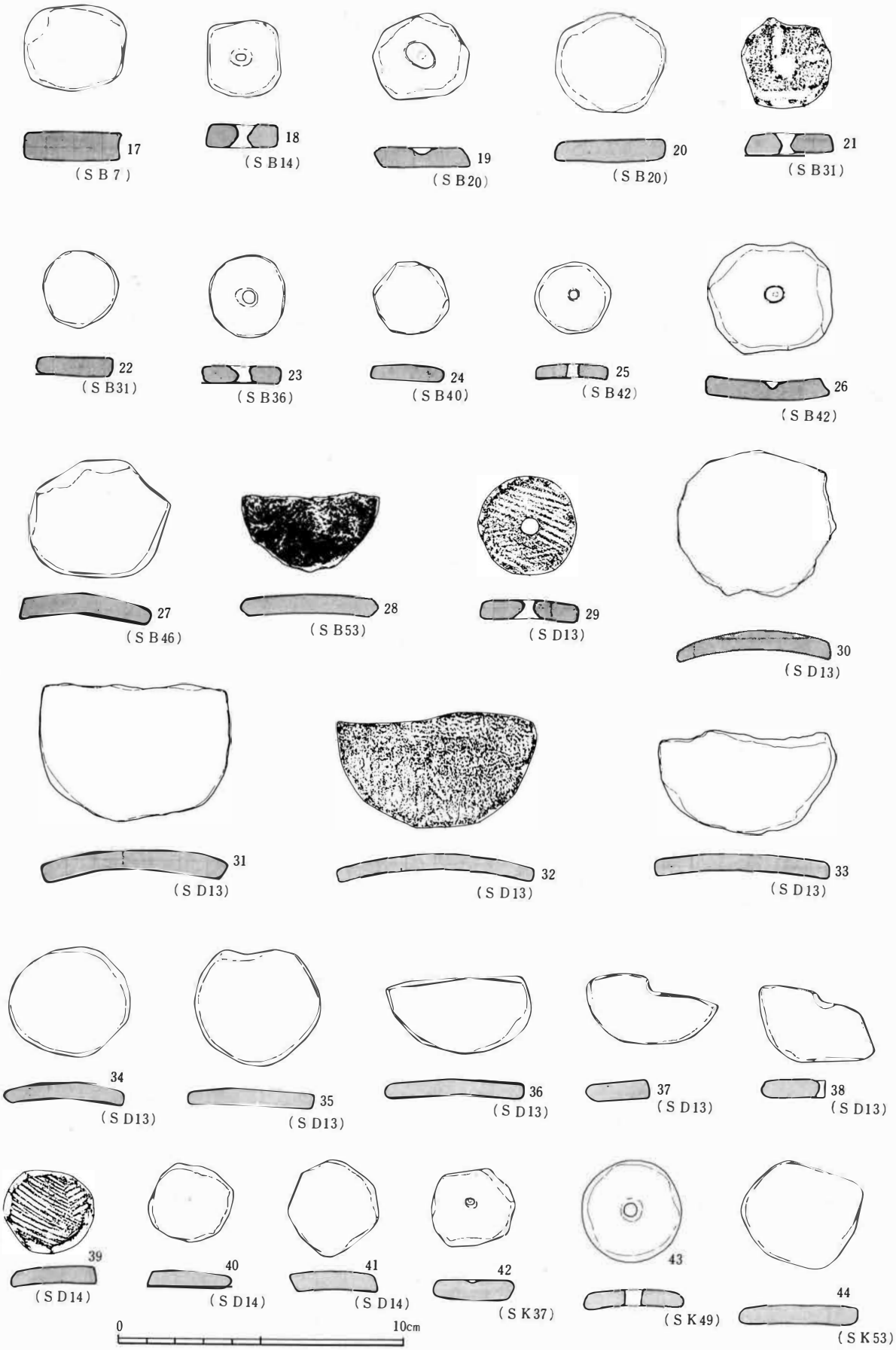

17
(SB7)
18
(SB14)
19
(SB20)
20
(SB20)
21
(SB31)
22
(SB31)
23
(SB36)
24
(SB40)
25
(SB42)
26
(SB42)
27
(SB46)
28
(SB53)
29
(SD13)
30
(SD13)
31
(SD13)
32
(SD13)
33
(SD13)
34
(SD13)
35
(SD13)
36
(SD13)
37
(SD13)
38
(SD13)
39
(SD14)
40
(SD14)
41
(SD14)
42
(SK37)
43
(SK49)
44
(SK53)
0
10cm

図87　土製品実測図

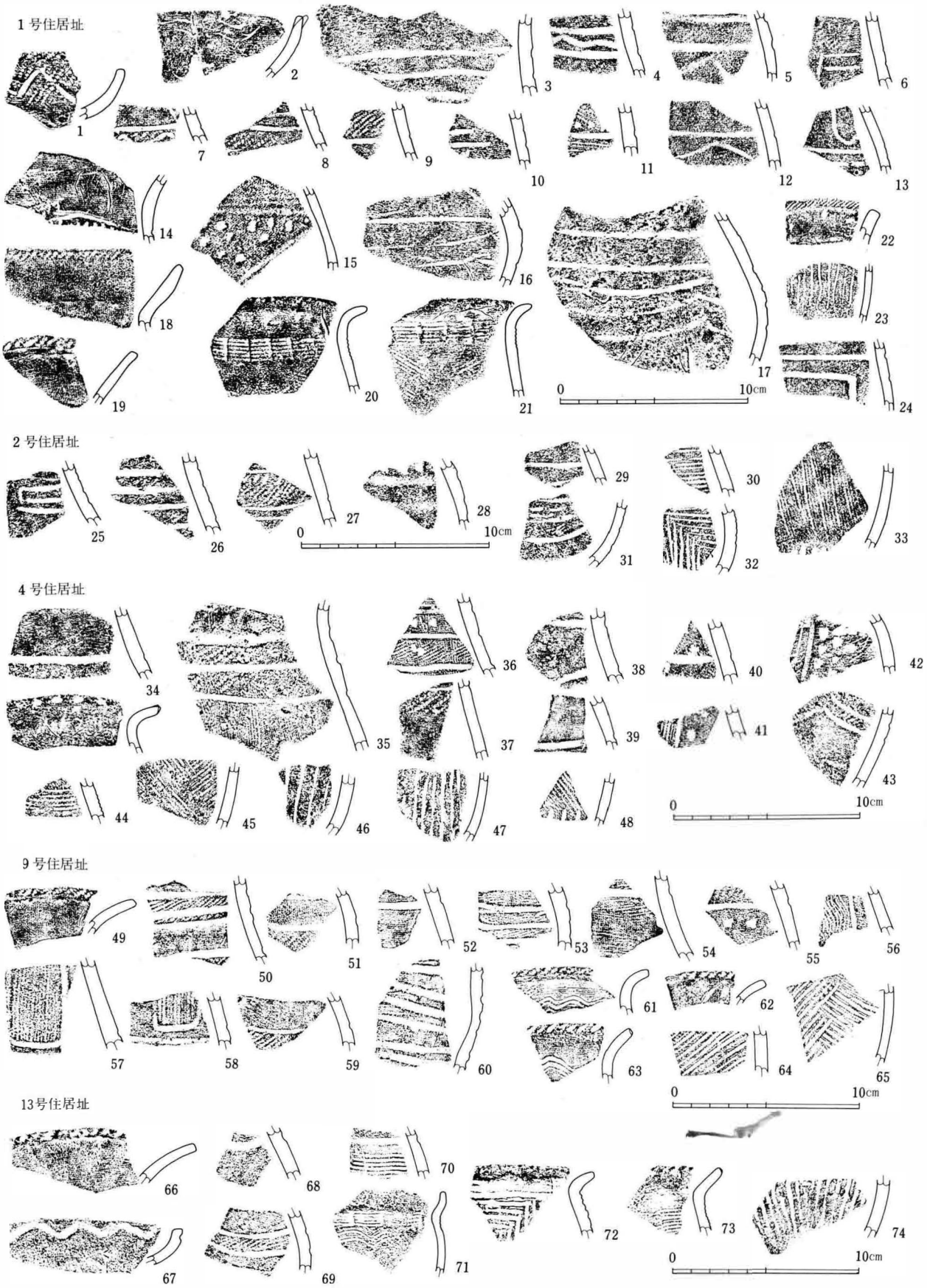


図88　1号・2号・4号・9号・13号住居址出土土器拓影

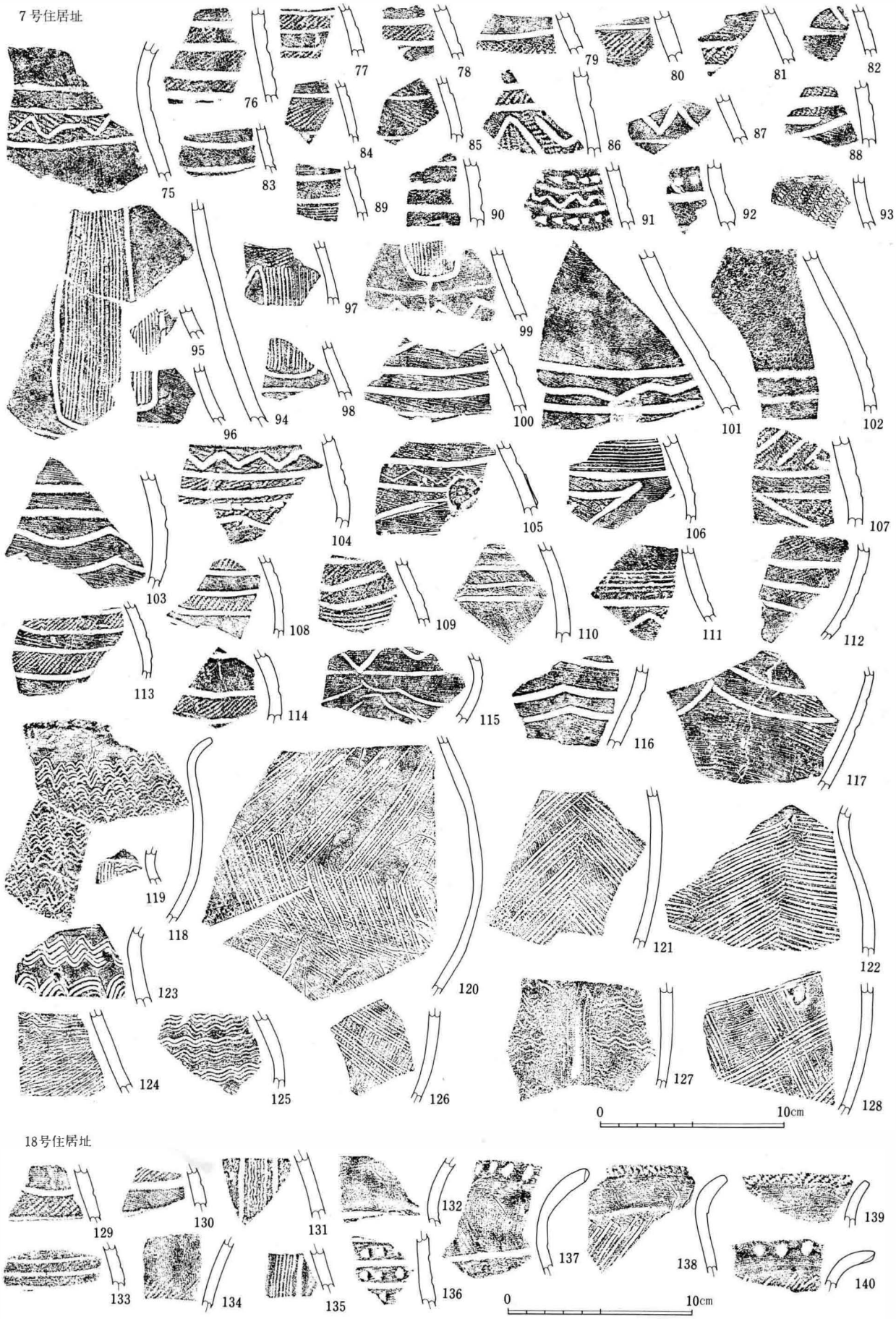


図89　7号・18号住居址出土土器拓影

図90　18号・19号・20号住居址出土土器拓影

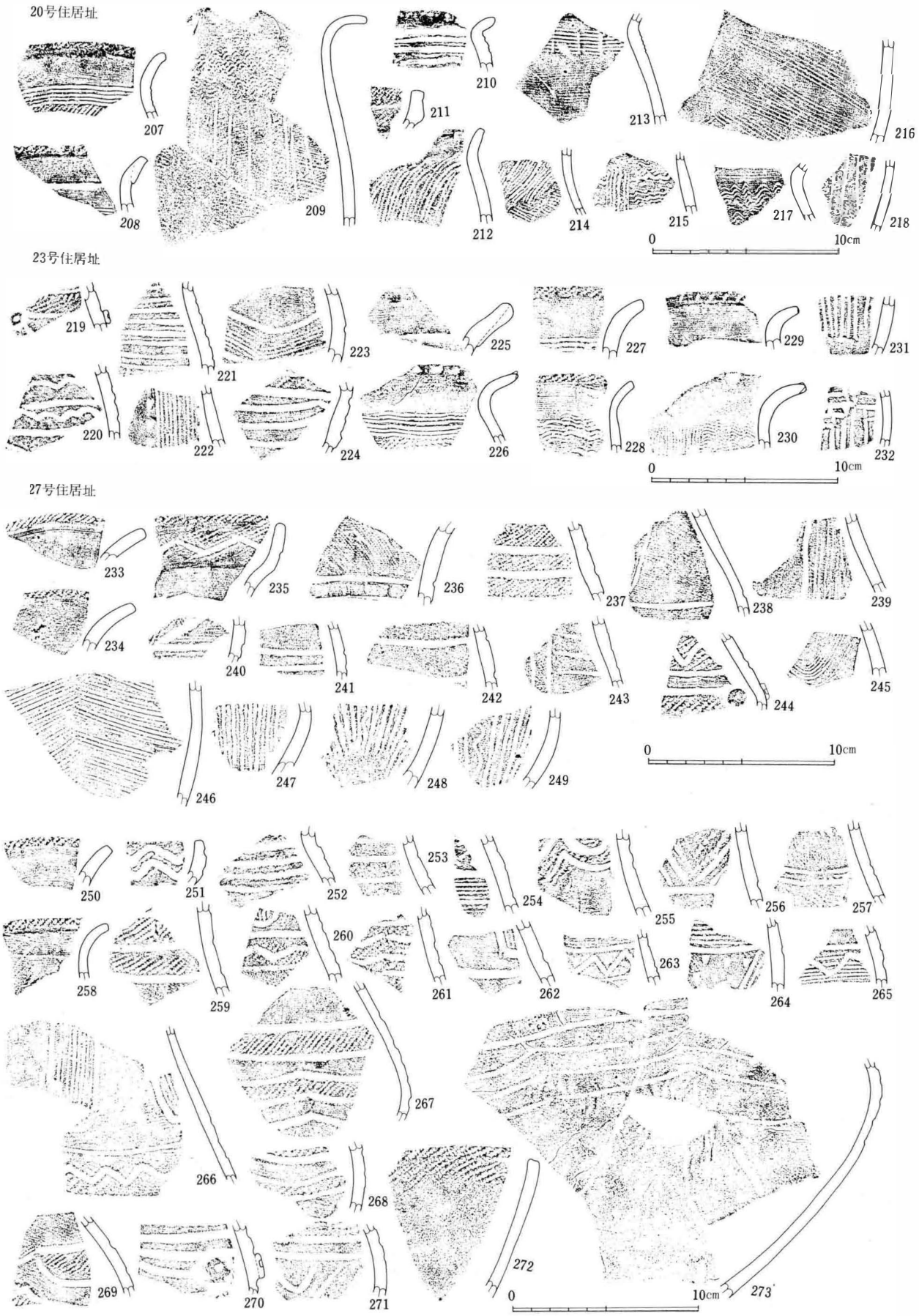


図91　20号・23号下層・27号住居址出土土器拓影

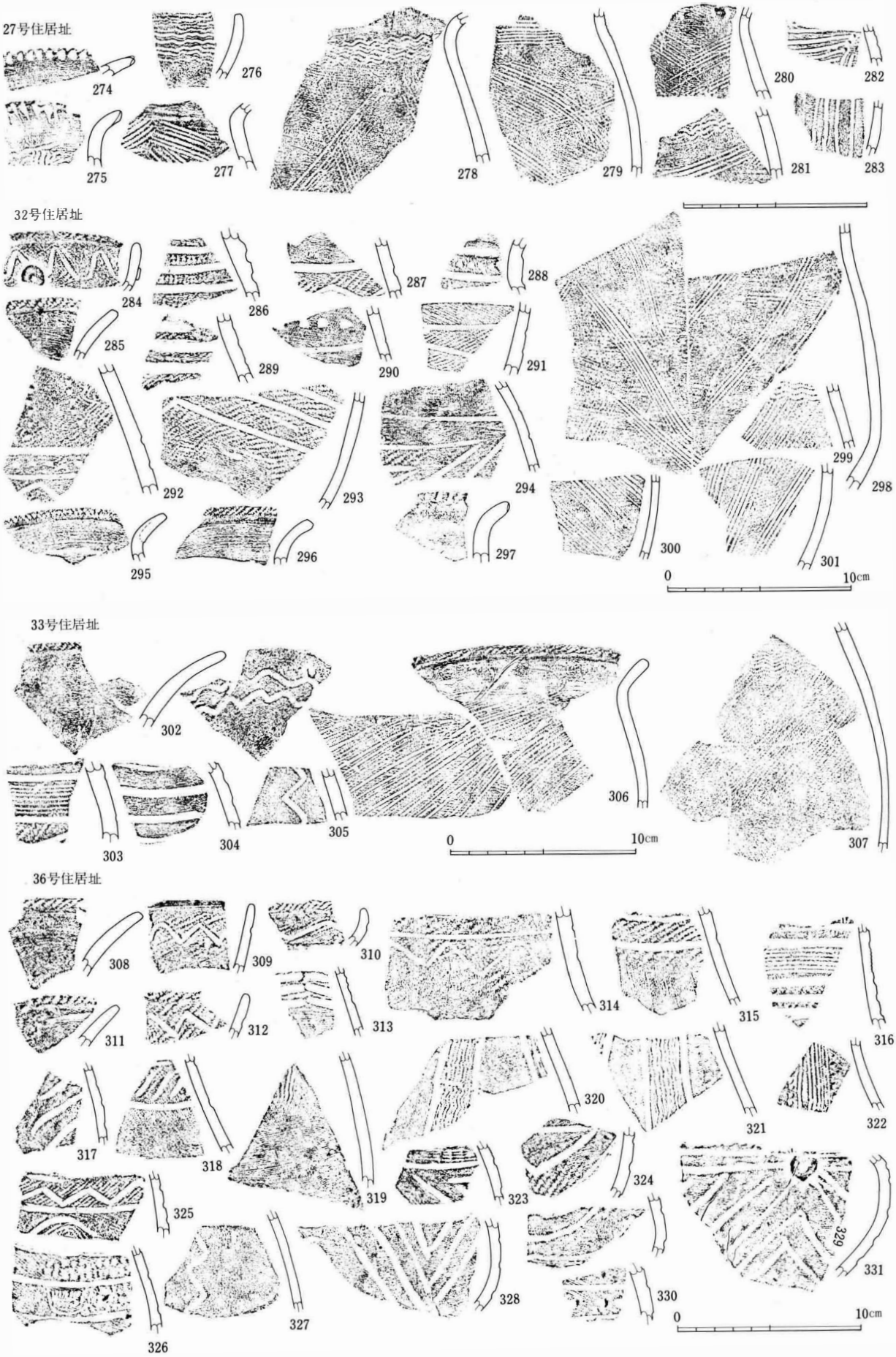


図92　27号・32号・33号・36号住居址出土土器拓影

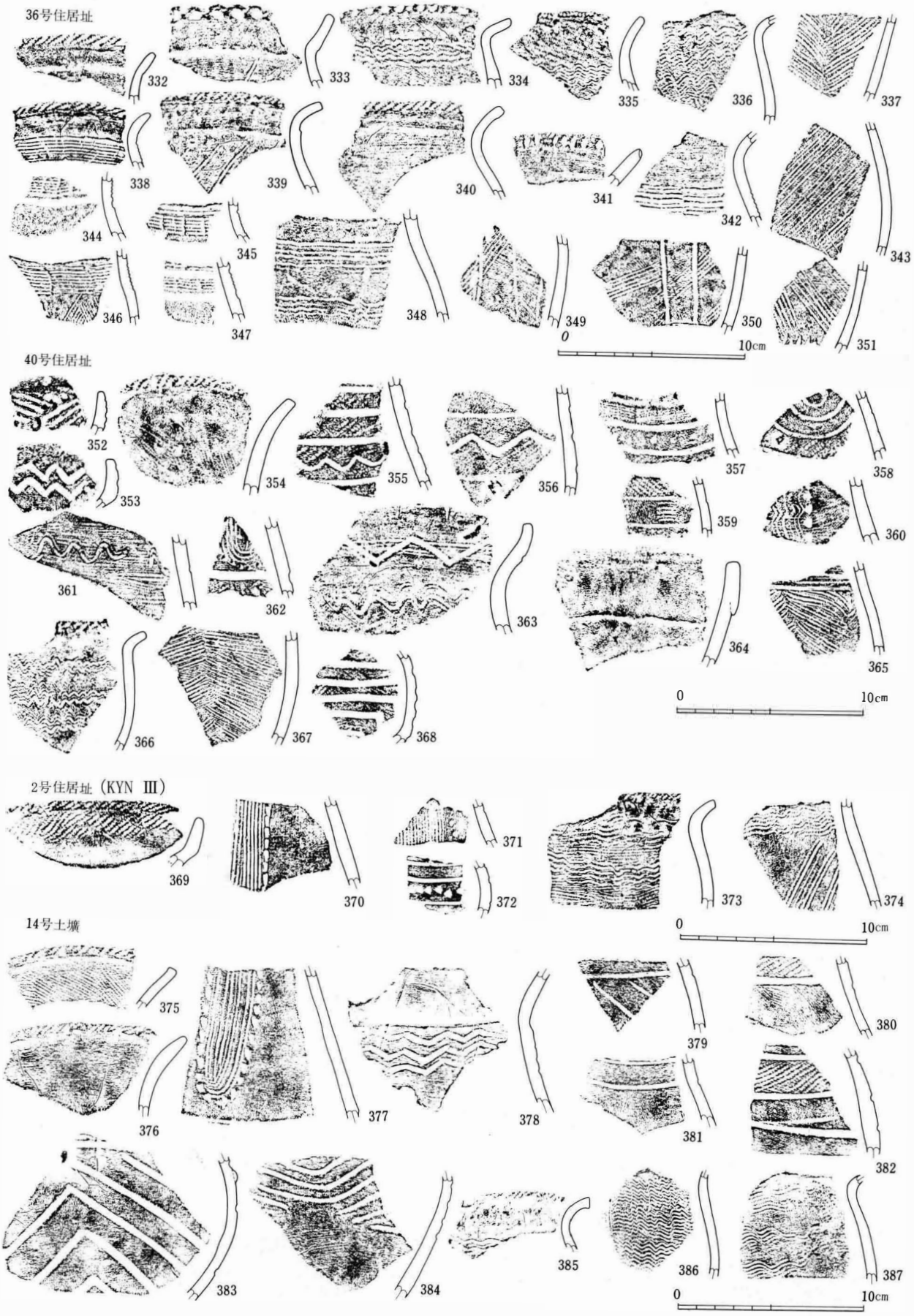


図93　36号・40号・２号住居址、14号土壙出土土器拓影

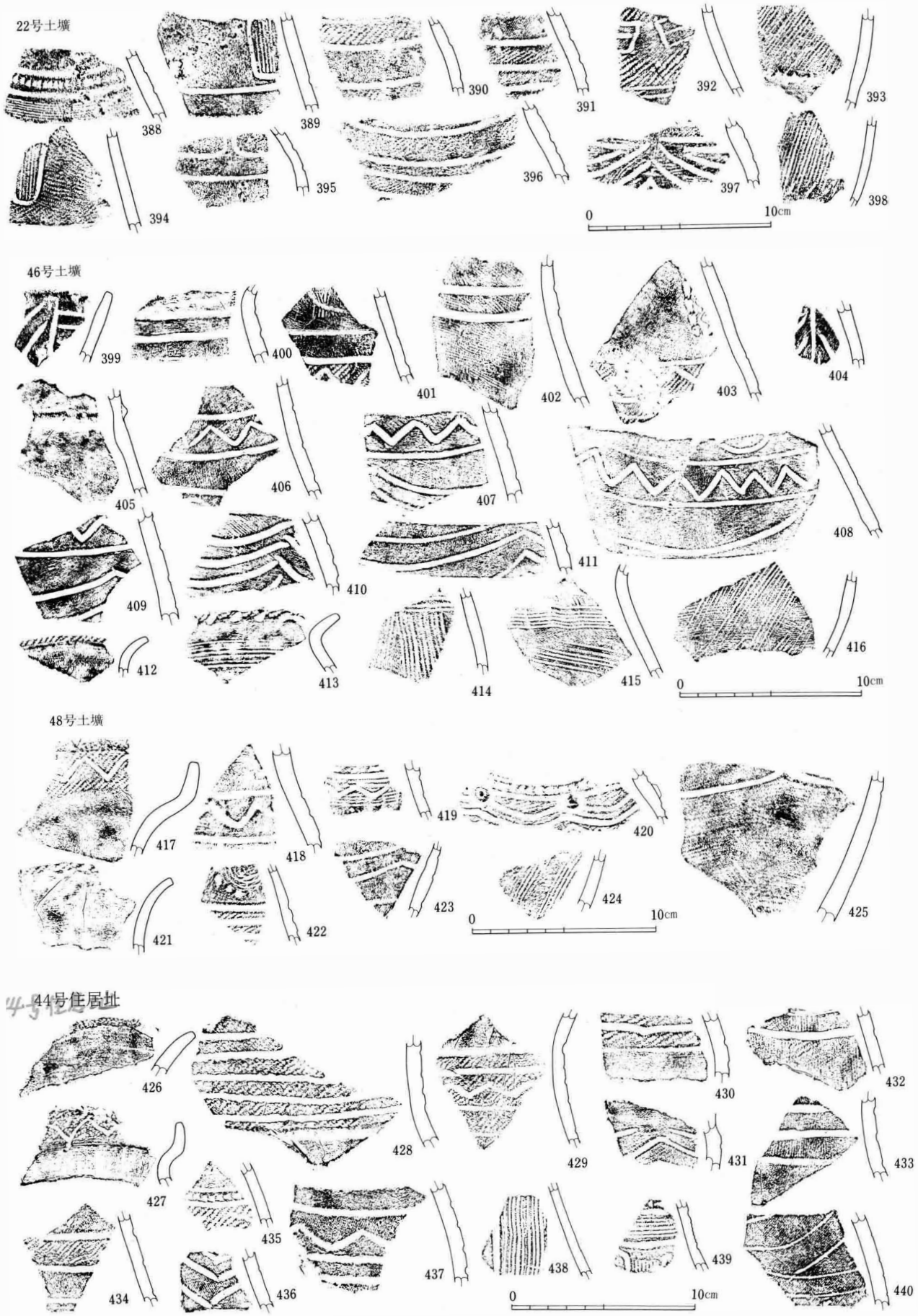


図94　22号・46号・48号土壙出土土器拓影、44号住居址

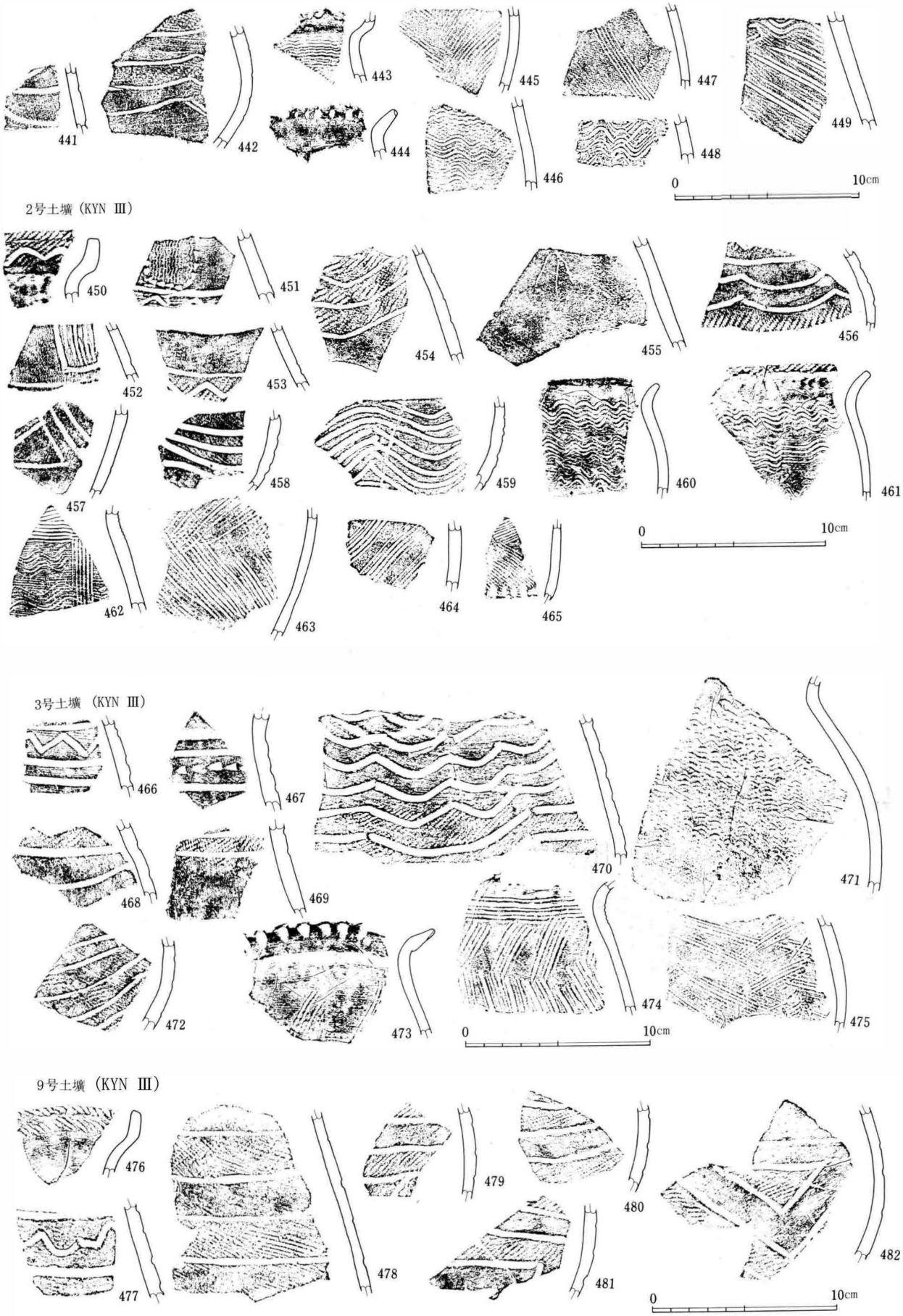


図95　44号住居址、2号・3号・9号土壙出土土器拓影

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
1号住居址										
16	鉢	22.9			1／4	B		LR縄文→箆山形沈線　磨耗詳細不明	横ハケ→ナデ	
4号住居址										
17	壺		9.6		3／4	D		横箆磨き	ハケ	
18	甕	18.3			1／4	D		口縁：横ナデ 櫛縦羽状文（右回り）→櫛波状文	ハケ→横箆磨き	
19	甕	26.0			1／8	D		口唇：LR縄文　口縁：横ナデ 櫛波状文２→櫛横羽状文or単斜条痕	横ハケ→箆磨き	
7号住居址										
20	壺	16.3			2／3	C		口唇：ハケ　口縁：箆重山形文＋円形浮文２ケ一対の緊縛孔　頸部：箆直線２＋重山形文（３）＋円形浮文	口縁：横箆磨き 頸：ナデ	
21	壺	15.2			2／3	E		口唇：LR縄文　頸部：縄文地文→箆直線3、山形文１ 全面赤彩	口縁：箆磨き→赤彩 頸：ナデ	
22	壺				3／4	D		口縁：ハケ→縦箆磨き　頸部：LR縄文地文→箆直線　全面赤彩	口縁：箆磨き→赤彩 頸部：ハケ→ナデ	
23	壺	11.6			3／4	D		口唇：LR縄文　口縁：縦箆磨き　頸部：箆直線	ハケ→箆磨き	
24	壺				1／3	D		口縁：箆磨き　頸部：LR縄文帯２　櫛直線文＋沈線区画　全面赤彩	口縁：箆磨き→赤彩 頸部：ナデ	
25	壺				1／2	C		頸部：縄文地文→箆直線４　胴部：箆磨き	横ナデ	
26	壺				1／2	B		頸部：ハケ→箆直線４→軽い箆磨き	ナデ	
27	壺		5.0			B		胴部：箆磨き　底部：箆磨き	ナデ	
28	壺				1／2	E		頸部：櫛波状文→箆山形文→沈線区画　胴上半：櫛懸垂文→箆刺突　櫛波状文→箆山形文→沈線区画　胴下半：重山形文	ハケ→ナデ	
29	壺				1／3	D		頸部：箆直線２　胴部：櫛直線→沈線区画→箆連弧文　全面赤彩	ナデ	
30	壺				1／2	C		櫛直線文→沈線区画　LR縄文地文	ナデ	
31	壺				1／3	D		ハケ→箆磨き　LR縄文地文→箆山形文→沈線区画	ハケ→ナデ	
32	壺		9.0		3／4	C		ハケ	ハケ→ナデ	
33	坏		6.0		1／3	B		箆磨き・赤彩　底部：箆削り→箆磨き	箆磨き・赤彩	
34	壺				完	B		縦箆磨き　縄文地文→箆山形文→沈線区画→円形浮文	ナデ	
35	壺				1／4	B		ハケ→箆磨き	ナデ	
36	甕	16.0			1／4	C		口唇：LR縄文　頸部：櫛波状文 胴部：櫛縦羽状文（左回り）	ハケ→ナデ	
37	甕	23.3			1／8	D		口唇：箆刺突　頸部：櫛波状文１　胴部：不明	不明	
38	甕	21.6			2／3	D		口唇：LR縄文　頸部：櫛波状文１ 胴部：櫛単斜条痕→箆磨き	ハケ→箆磨き	
39	台付甕	14.0			1／3	D		口縁：ナデ　胴部：櫛波状文３（上→下）	ハケ→箆磨き	
40	甕	14.0			1／4	C		口唇：LR縄文　頸部：櫛波状文	ハケ→ナデ	
41	台付甕	12.2			1／8	D		口唇：LR縄文　胴部：LR縄文地文→コの字重ね文	ハケ→箆磨き	
42	台付甕	13.2			1／4	C		口唇：LR縄文　胴部：コの字重ね文	ハケ→箆磨き	
43	台付甕	12.4			2／3	D		口縁：横ナデ　胴部：コの字重ね文	ハケ→箆磨き	
44	台付甕		6.0		4／5	B		箆磨き？	ナデ	
45	台付甕		7.2		2／3	D		櫛波状文　箆磨き	箆磨き	
46	甕		8.0		1／4	D		櫛縦羽状文→箆磨き	箆磨き	
47	甕		5.4		2／3	D		櫛単斜条痕→ナデ　底部：箆磨き	ハケ→箆磨き	
48	甕		6.8		2／3	B		櫛縦羽状文→箆磨き　底部：箆削り→箆磨き	ハケ→箆磨き	

表３　Ｂ区出土土器観察表１